

前期に比すれば感情が複雑になつただけ表出法も進歩する
覺的快樂を與へるものに向つて愛情を發する

る彼の喧騒極まるゲンジリだとか獅子だとか云ふやうなものは田舎人の感情が小兒と同じく未だ覺性的境界を脱せないことを示して居る。要するに運動したがること、覺官を働かせたがること、は此の期のものに最も盛んなものであるからして是等の活動が妨げを受けないで思ふままに行はれたならば彼等は常に嬉々として愉快を感じ之れに反する場合に不愉快を感ずることが甚だしいのである。そして此の愉快や不愉快は直ちに彼等の軟弱なる筋肉を動かして或は嬉笑、拍手、喝采、手の舞ひ、足の踏むところを知らざらしめたり、或は啼泣、嗚咽、掉頭、頓足せしめたりするのである。即ち之れを前期の子供に比べると感情が複雑になつただけ其れだけ其の表出法も進歩するのである。勿論此の時期の嬰兒でも母を慕ふが如き感情はないではないが然も彼等の愛情は未だ覺的狀態を脱せないことを忘れてはならない。彼等の母を慕ふのは母よりして甘き乳汁と甘き菓子を與へられるからである。彼等の姉を愛するのは姉は彼等を抱き或

此時期に表はれる共同的感情は人間の特有である

は彼等の見たきもの聞きたきもの、邊に彼等を導くからである。若し是等覺的の快樂を與へられることが無かつたならば母や姉といへども慕ひもせなければ愛しもせないのである。勿論人間の特徴とも云ふべきものは此の嬰兒期に於ても既に表はれるもので此の點に於ては嬰兒といへども既に他の高等動物と其の選を異にする事が明かである。其の特色の第一は共同的感情で嬰兒は獨、母や姉を愛慕すると云ふ許りではなく他の子供や見知つた人と群居することを好んで獨居することを嫌ふものである。他の動物は必ずしも離群索居を厭はないが人間は嬰兒の時期からして早く既に之れを厭ふのである。實に嬰兒が友を喜ぶの情は彼の飲食の衝動にも比べる事が出来るのである。此は實に人間が社交的動物なる本性を有する證據で此本性があつたればこそ人間が社會を形成するに至つて遂に他の動物よりも非常に高等の發達をすることが出来たのである。然り人間が幾百萬年の前に他の高等

嘆賞の情も亦人間の特有である

動物と同等にあつたものが次第に他の動物を抜いて今日の如き高度の文明に發達したところの原因は實に多々あるべき筈であるが然し此の共同生活を喜ぶ感情は其の原因中で最も大切な原因だと思はれる。第二に人間は又嬰兒の時期からして早く既に他の動物の有して居ない嘆賞の情を有して居る。他の動物は若し五彩に輝く夕雲を見ても只飼主より晩飯を貰ふことを聯想することがあるばかりであるが嬰兒は寧ろ之れを見て晩飯を聯想するよりも其の光彩の美麗なるに嘆美の感を發するであらう。如何に伶俐な犬馬でもビヤノの音を聞いて別段飛び立つて喜びもせないが人間は嬰兒時代から既に喜んで之れに注意するのである。即ち人間は假令甚だ幼稚だとはいへども嬰兒期から既に他動物の全く實利的なるのとは大に相異なるところがあるのである。此の嘆美の情こそ人間の發達に最も必要な彼の經驗的推究的及び審美的興味之淵源で此感情の存して居ればこそ人間は他の動物に超絶して高尚なる心境に達するのである。

動物は生存に直接關係のない感情や知識を有さない

即ち前に述べた共同的感情は道德的社交的乃至宗教的興味の根本となり之れに由つてヘルバルトの謂はゆる六種興味の根原は嬰兒期に早く既に發芽して居るのである。之れに反して他の動物は如何に伶俐なるにもせよ苟も自己の生存と安全とに直接的關係のないものには如何なる事物も一切之れを度外に置いて顧みない。一言にいへば彼等動物は思考することとはあるけれども嘆美することはない。漠然として然も勢力の強い有機的的感情や本能的感情を有して居るけれども其の生存に直接的關係のない感情や知識を有することはない。然るに人類のみは未だ必要の何物たるやを知らないときに當つて早く既に美妙の存在を感知することが出来るのである。彼等の光輝ある眼は美妙なるものを仰いで嘆賞し彼等の愛らしき聲は美妙なるものに對して讚美する。斯くの如く人間の注意と興味とが初めより他の動物の如く生存に直接關係のあるもののみ限られないで別に生存に直接の關係のない無我無慾のものにも關することは他

第四期情緒

日高尚の發達を遂げて萬物の靈たるに頗る大切なるものであると云ふことを考へねばならぬ。

第四期は情緒の頗る盛んなる時期である。吾々の情緒の中で最も早く表はれるところのものは恐怖、憤怒、喜悅などであつて是等の情緒は嬰兒より既に表はれるものであることは明かであるが是等の情緒の最も旺盛なるは幼童期を通じて兒童少年期であることは人々の熟知するところであらう。是等の情緒に次いで盛んに表はれるところのものは愛情、悲哀、自負名譽などの情緒である。元來感情の性質は情緒に於て最も能く表はれるもので情緒は内包量が最も多くて外延の最も狭いものであると云ふこと並に全く盲目的のものであると云ふこと又少しも節制のないと云ふこと其他變化定まりないと云ふこと其の發現するや洪水怒濤の如く一時非常の勢を呈するけれども一旦鎮靜に歸すると云ふと頗る寂寞の感あることなどは最も能く感情の特性を代表して居ると云つて可からう。斯くの如く

情緒を緩和する法

感情の特性を最も能く表はして居るところの情緒が兒童少年期に於て最も盛んであるからして人は屢此の時期のものを指して彼等は何事も感情的であると云ふのである。實に此の期のものは感情が喜怒哀樂愛惡憎の何種に屬するにしても皆極端から極端に走ることが多くて其の盛んに起つたときに當つては一切夢中で少しも反省すると云ふことはない。管に彼等の情緒は極端から極端に走るばかりではなく其れが發現することも頗る頻繁である。即ち彼等は平靜な感情状態で居ることは少いので、いつも些細なことにては情緒的の狀態になり易いのである。斯くの如く彼等の情緒の容易に勃興して極端から極端に走るのとは一つには其の身體の勢力が非常に旺盛で神經の興奮性も甚だ強いことが關係するであらうし二つには經驗が乏しいので反省する材料も少く従つて將さに起らんとするところの感情が他の感情の爲めに妨害を受けることの少いと云ふことも重なる原因であらう。されば此期のもの、情緒を緩和せんと欲せば成る

第五期情操の時期
此期は何事も理想を掲げて突進するから鮮かである

べく之れに反省の資料を給すること、竝に成るべく其の神経を興奮する飲食物を避けること、竝びに其の心身の勢力を遊戯其の他無邪氣なる方面に消費せしめることは最も大切である。

第五期は情操の時期で年齢で言つたならば青年期である。此の時期は實に人生に於て花實兼備の時期で人間の生粹とも云ふべき各種の情操は遺憾なく其の特色を發揮する。前にも述べた通り情操は一方よりいへば理想的感情であるからして此の時期のものは頗る理想に富んで何事に對しても理想を掲げ之れに向つて傍目をふらず勇猛に突進するから其の鮮かなことは謂はゆる處に句ふ山櫻のやうである。學校の種類でいつて見れば中學校の終りから高等學校時代で未だ情實纏綿たる社會の事情にも通せないからして何事も實際的の事情や情實の爲めに妨げられることはなく、さればとて其の智識も既に高等に發達して居ることであるからして第四期のもの、やうに無暗に情緒にのみ支配せられるでもない。若し人生

第六期實際的感情的時期

高尚なる理想は利害得失問題の爲に制肘せらる

純粹感情の發展上よりいへば稍衰運に向ふ

感情の衰退

が意の如くなるものであるならば誰しも此の境涯に永住したきものである。

第六期は假りに實際的感情的時期と名付けて宜からう。學校の種類でいへば將さに大學を終らんとする頃竝びに卒業後の状態で此の時期のものになると最早第五期のもの、やうに只理想の光明にのみ酔ふて居ることは出来ないでパンを得る爲めの心配や實際社會の纏綿せる事情やなどに關心せねばならぬこと、なるので従つて其の感情は第五期のもの、やうに生粹の情操ばかりと云ふ譯にはゆかないで高尚の情操のある傍には各種の利害得失問題の爲めに其の鋒が鈍つて謂はゆる動機は複雑となり又多少不潔となり勝ちである。されば理想の境涯から云ふと人間感情の最高の時期は第五期で第六期は大に世間的であるが然も純粹感情の發展より言へば將さに衰退の運に向つたものと云はぬばならぬ。

余輩は既に感情發展の大體の順序を述べて第六期の將さに衰退の傾向あ

は發展の順序と正反對である

退化の意義

無我的の情操第一に衰退す

るところに至つたが此の感情の衰退は別に説明するまでもなく其の發展の順路と正反對をなすものであると云へば足るのである。夫れ感情の發展は進化で衰退は退化である。退化と云ふことは如何なる順序に由るか云ふと進化の最終に表はれたものが第一に消滅して漸次原始的狀態に復歸することである。此の原則は廣く萬物に應用することが出来るので若し宇宙が原始の狀態に復歸することがあるとしたならば其の最も後に表はれたところの吾々人類は最も始めに消滅せねばならぬのである。吾々の智識の中で第一に衰退するものは高尚なる理性的作用であると同じく吾々の感情中で最も早く衰退するところのものは無我的の情操である。世に老人となつて骨董をいぢるものが多いからして美的情操の如きは青年時代よりも老年の方が却つて發展して居るやうに思ふものがあらうが然しながら老人のは實は骨董癖で光輝ある眞の美的情操は青年の時代に及ばないのである。富裕なる老人が骨董を弄するのは社會に奮闘す

同情的社交的感情的如き愛他的感情は第二に衰退す

主我的愛他心は第三に衰退す

るの勢力も盡きて閑日月消費の方便としてである。之れに出つて彼等が眞の美的情操を起して居るか居らないかは疑問である。否生氣あり燃ゆるが如き情操は到底青年期に及ぶものではない。況んや智識的情操などに至つては老人輩には全く影を没するところである。さて吾々の智識作用中で第二に衰退するものは悟性作用であると同じく吾々の感情中で第二に衰退するところのものは同情的社交的感情的如き謂はゆる愛他的の感情である。自己の利害には頗る多く關心する老人も社會國家の出來事や純粹他人の身の上のことに付いては頗る冷淡無頓着であることは吾々の多く實見するところである。即ち青壯年の時代のやうな生々としたる同情は彼等から喚び起すことは出來ない。第三に衰退するところのものは主我的愛他心即ち名譽心男女の情などである。俗に年をとると鐵面皮となると云ふことは彼等の名譽心が既に衰へて居ると云ふことを能く表はして居る。最後に消滅するところのものは主我的感情である。即ち恐

最後に消滅するものは主我的感情である

怖憤怒と云ふやうな感情である。此の期になると人間も飯を食ふ機械に過ぎないで僅かに本能と反射運動とに由つて其の生命を維持して居る。

第三編 意志

第一章 原始的行動

第一節 自發、興奮及び反射運動

吾々の行動を内面的に見るならば其れは意志で従つて意志を外面的にすれば其れが行動である。行動と意志とは離る可からざる關係を有するもので従つて吾々の筋肉に直接に命令を下したり指揮をしたりするものは即ち意志である。此意志が行動となつて外に表はれたもの、最も發達したるものにはそこに必ず目的とするところの概念もあるし又此の目的を達する爲めに要するところの動力と手段ともあるものであるが然しながら未だ經驗の少いものに至つては素より動力のみは存して居るが目的の概念や手段の概念は存して居らない。無論無意識的には何かそこに目的や手段が存して居るやうであつて又其れが其の物の生存に必要な行動であ

行動を内面的に見れば意志で意志を外面的にすれば行動である
發達した意志は目的の概念と動力と手段とを有す

るやうに見做されることは勿論であるが自ら其目的や手段を意識することは最初に於てはないのである。然しながら假令目的や手段の意識がないにしても吾々は一個の生物として必ず何か活動せすには居れないものである。換言すれば目的の観念や手段の意識が明瞭になるまで何も行動せないで居るべく吾々は作られて居ないのである。由つて吾々が目的の観念あり手段の意識ある行動をば有意的行動と稱することが出来るならば其れに先立つて無意的行動の存在すると云ふことは明かなことである。今余輩は有意的行動に入る前に暫く此の無意的行動に付いて述べねばならぬ。

自發運動は
目的の意識
なり又外界
の刺激を待
たないで自
ら運動する
もの

動物が有意的行動をなす前に表はれる一つの運動は自發運動と稱するものである。此の運動は彼のアミーバのやうな最下等の生物でも有して居るので少しも目的を意識せないで且つ又外部の刺激をも待たないで自ら運動を發するのである。此の運動の原因は有機體内に堆積して居るとこ

有機細胞も
亦た自發運
動をなす

意志と筋肉
との調和が
成立つて初
めて獨立運
動をする

ろの勢力の發漏である。此の種の運動は或る意味に於ては有機細胞にすら之れを有して居るものがあると云つても宜いので彼の高等動物の身體の一部を成して居るところの有機細胞例へば血液中の白血球の如きも此の性質を有して居る。そして此の自發運動の起るのは生活體の新陳代謝に基くので此の運動の最も著しいのは分娩の作用である。子宮の筋肉纖維が漸く生長して一定の時期に達すると外部の刺激を要せないで自發的收縮的運動を以て自然に其の胎兒を押し出すものである。又自發運動は概して其の運動と同時に他の諸機關に關聯するもので例へば右の手を振るときは左の手も之れに伴ふ傾きのあるもので少くも相共に屈伸する傾きのあることは人々の知るところである。そして其の各個が相離れて獨立的運動を遂行するに至らなければ未だ筋肉が意志の命令に十分に應ずるものと云ふことは出来ないのである。例へば右の目ばかりを閉ぢやうとして然も左の目も共に塞がるが如きは意志と筋肉とが未だ調和せない

意志作用を
表はす局部
に必ず自發
運動の存し
て居た局部
である

自發運動と
有意運動と
の關係

一、身體の
潛勢力盛ん
なきには
自發運動も
意志作用も
盛んである

二、運動機

ことを示すものである。然しながら爰に注意すべきことは意志の命令を受けるところのものは最初に必ず自發運動の存して居つた部分であつて初めから全く自發運動の存して居らない局部は到底意志作用を表現する機關とはならない。例へば吾々の耳などは初めからして自發運動がないからして意志が發達した後でも吾々が随意に之れを動かすことは出來ない。

自發運動は斯くの如く獨立的に運動し得るのみならず又有意的行動に對して必要な關係を有するものである。

第一に身體内に營養分が充満して潛勢力が盛んなときには盛んなる自發運動を生ずる傾きがあると同時に甚だ著明なる意志作用を遂行せしむるものである。例へば強壯なる兒童が亂暴な遊戯を好み或は山に駆け上り或は川を飛び越へなごして頻りに快樂を感ずるのは之れが爲めである。第二に特別の刺戟の爲めに運動機關に多量な血液が注入した場合には大

關に多量の
血液注入す
れば意識的
行動を盛に
する

三、快樂も
亦意識的行
動を盛んに
する

四、苦痛は
反對の現象
を呈するけ
れども單に
刺戟性のみ

に活氣を増進して意識的行動を勃興せしむることがある。彼の酒を飲んだ場合などは其の最も著名なものであるけれども通常の場合でも數時間急激な運動に従事する場合などは之れに類して居る。即ち身體の一局部を働かすときには多量の血液は他の局部を去つて専ら是れに集まり其の局部は分外の勢力を得るものである。

第三に快樂は精神的の刺戟として前と同様の結果を生ずる。即ち快樂を受けると云ふことは必ず活氣の増進すると云ふことを意味して居つて従つて意志的行動を容易ならしめることは自護律の上より當然のことである。例へば困難に打ち勝つたり敵を打ち倒したりするときには之れが爲めに身體の勢力を加へて更に一層強烈な行動を促す。

第四に苦痛は概して之れを云ふと自護律上活氣を減損するものであるけれども其の餘りに甚だしくなくて單に刺戟性をのみ有する一種特別なものに至つては却つて一時勢力を増進する。

なるときは
一時勢力を
増す

意志行動熱
達すれば只
聯合作用の
で運動す
る

自發運動は
永く外界の
影響から獨

右に述べた諸種の原因中で其の一を有して居つても活潑な勢力を喚び起すに足るであらう。そして熟達せる意志的行動を成立せしめるためには此勢力と之れを發作する機會とを聯結して諸種の行動に當るものである。例へば初めて駒に溝渠を飛び越わさせやうとするときには之れに鞭を加へねばならないが其の經驗が數度に及ぶときには駒は只之れを見たばかりで飛び越わるところの勢力を生ずるやうなものである。但し意志的行動が熟達するときには只聯合作用のみに由つて急速の運動を生ずるとは出來るけれども然も多量の勢力を要するものであると幾分か之れが準備をなし之れに必要な態度を整へねばならぬ。例へば小川を飛び越へるには先づ數歩の外から走り來たつて其の勢に由つて身を跳らして之れを飛び越わると云ふやうなことや力士が相手と組む前に先づ四股を踏むやうなものである。爰に注意すべきことは自發運動なるものは只一時外界の影響から獨立することが出來るばかりで長く獨立して居ることは出

立するこ
は出來ない

興奮と自發
運動との差
は分量的で
ある

興奮は種々
の事情を取
捨する力が
ある

來ない。なせなれば元來吾々の生活なるものは有機體と其の環象との相互の一定關係に由つて保持されるものであるからして一旦其の關係の終ることがあつたならば吾々の生活は忽ち止まなければならぬ。要するに純粹の自發運動なるものは體中の脂肪の消費であつて只暫時其の生命を保持することが出來るばかりである。自發運動と似て少し異なるものに興奮と云ふのがある。此の二者の相異は單に分量的のものである。興奮と云ふのは外界の刺戟に特別な方法を以て反應することである。言ひ換へると外界の刺戟と其の力及び性質を異にする運動を以て之れに應ずることである。此の興奮が生活體に必要な所以のものは種々の事情を取捨するの力があるからである。爰に興奮の何物であるかを知らんと欲せば有機體の行程殊に有機物質の不定に注意せねばならぬ。見よ微細なる力も網膜や腦髓に大なる刺戟を與へて之れに由つて筋肉の收縮を惹起し身體内に一種の化學的の變化を生ずるこ

自發及興奮などの運動を悉く反射運動とせずのは不當である

反射運動とは外界刺激に對して機械的に反應するを云ふベイン氏は動物の最初

とがあるではないか？
苟も神経中樞を有して居る動物ならばそこに自發及び興奮の別あることは明かである。だから是等動物の運動をば悉く反射運動に基くものとなすのは不當である。なせならば中樞に堆積して居る勢力は覺神経の興奮がなくても能く發射する事が出来るからである。血液の状態即ち其れが炭酸瓦斯を含むとの變化が延髄に存するところの呼吸中樞や血液循環を司るところの中樞を動作せしむるが如き或は直ちに他の高等中樞を犯して夢幻の如き自發的觀念を惹起し又或る種の運動を惹起せしむるが如きは外界の刺激が原因となるのではなくして全く血液の刺激に由つて外界の刺激と同種の作用を爲さしめるのである。ところで反射運動と云ふものは外界の刺激に對して機械的に反動するのであるからして今述べたやうなのは決して反射運動と稱することは出来ないのである。ベイン氏は動物の最初の運動を以て自發性のものとなし他の種の運動も之れに關係す

の運動を以て自發性のものとし他の運動も之れに關係すとした

運動は覺官知覺よりも天性に親密である知覺思考などは運動の方向を規定する

るものだと云つた。氏の言に動物體の營養が十分であるときには其の堆積せるところの勢力は必ず何にか發漏の道を求めて遂に動神経を通じて其の目的を達するものである。だから有機體は必ずしも外界の刺激を待たないで動作するものであると。ベイン氏の説はミユルレル氏の説を擴張したもので之を明かならしめんが爲めに胎兒の運動、小兒並びに幼動物の運動熱の盛んなこと、早朝或は營養の十分なきに人類や動物の活潑なことを擧げた。是れに由つて之れを觀れば動物の或る種の行動は最初外界の刺激を待たないで覺官知覺の起る以前に己に生ずるものである。此の邊より見れば運動は覺官知覺よりも吾々の天性に親密な關係があるものと云つて宜からう。即ち人間は見聞したり思考したりすることの有無に關せず早く既に自ら活動し得るものである。後に生ずるところの知覺や思考などは吾々の運動の方向を規定するものであるので然も吾々の運動を起す原因ではないのである。フイフテール氏曰く吾々に最も特有なも

動物は又外界の刺激に順應し且つ刺激を制限する力を有す

反射運動は無意識ながらも多少の

のは運動的衝動である。此の衝動は外界知覚の未だ起らない前に既に存して居るものであるからして其れが意識より起るものでないと云ふことは明かである。近頃になつてブライエル氏は懐胎中の動物の運動を研究して全く内部に潜在して居るところの勢力及び血液又は淋巴液の循環或は組織の生長の爲めに顯著となるものとなした。然しながら動物は常に外界の刺激を待たないで生活を維持する活動を有して居るのみならず又之れと同時に外界の諸關係に順應するところの力をも有するものである。加之動物は初めよりして外界に對抗するところの力と共に其活動が外國の事物の性質と共に或る種の制限を受くることのあることを要するものである。さればこそ吾々に意識の未だ發せない前に於てさへ尙反射的運動と云ふものがあつて斯かる順應や制限をなす。反射的運動は内部の状態に由つて起るものではなくして全く機械的に外界的の刺激或は身體の一部より來るところの刺激に由つて生じ無意識

目的を具へて刺激に反應す

的ながらも多少の目的を具へて其の刺激に反應するのである。無論此の多少の目的を具へたる反射運動は全然意識に由つて伴はれないものなるか否かは頗る議論のある問題である。然しながら爰には一步を譲つて此の種の運動も微少なる意識に由つて伴はれるものだとしても決して意識的思慮の結果に由つて生ずるものだと云ふことが出來ない。例へば吾の目前に何か突き付けられた場合には吾々は思慮する暇もなく其の目を閉ぢるであらう。吾々の口中に食物の投げ入れられたときには下下作用は思慮を待たないで行はれるであらう。是等の作用は通常反射運動となすところのものであるが是等の運動を以て自發的運動に比べると其の運動の目的に對する性質は稍深厚であるやうであるけれども大抵の場合に於ては其の目的は甚だ汎濫不定なものである。だから反射運動は尙ほ自發運動の如く全く無意的にして刺激を受けるや否や直ちに運動するところの特質を有して居るものである。そして二三の刺激が並發するとき

には反射運動は各の刺激に對して發作せうとする傾きのあるものであるけれども其の刺激が相互に聯合することの出来ない反射運動を惹起する傾向のある場合には其の運動は最強刺激に對して起るものである。吾々の反射運動を禁止するのに最も有力なものは大脳である。此の大脳の十分に發達しない幼児などにあつては未だ反射運動に反抗するところの力を有せない。

第二節 本能

本能は人に由つて非常に其の意味を廣く取るものと狭く取るものとがある。ゼームス氏の如きは本能とは畢竟するに機關の生得的性質の官能に外ならないと云つたが斯くの如きは本能の意味を非常に廣く取るもので余輩は寧ろ本能の意味を狭く取る方の論者である。以下に述べるところの本能に付いての説は其の狭い意味の説である。本能は之れを反射運動に比べると一層複雑で活潑で且つ意識的である。

本能には廣狭の二意あるが爰には狭意に従ふ

本能の特性

第一、本能は動作の有機的生得的傾向である

本能的運動にあつては無意識ながらも有して居るところの或る一定の目的に好都合なるところの幾多の方便的系統を具へて居る。且つや本能は自發運動や反射運動のやうに、單に一時の發作ではなくして多少隔絶せる目的を有して居る。だから本能的運動は刺激があつて後に發作するものであるけれども然も反射運動などと違つて其の運動は刺激の性質に由つて束縛せられることはなしに内部に存して居る發動的傾向に従つて起るもので刺激は只其の運動を誘ふに過ぎないのである。今本能に付いて其の特性を左に示すことにせう。

第一に本能は動作せうとするところの有機的生得的傾向である。例へば赤兒は生れると直ぐに其の吸乳の本能を表はすが此の吸乳の作用は生後殆んど経験を積まないで然も能く熟練に成し遂げることが出来るものである。此は本能が有機的生得的傾向であることを示すものである。然り假令本能でも種類に由つて多少の経験を拒むものではない。即ち幾分かの

経験を積んで然る後に熟練するものもあるが然し其れが普通のことの熟練のやうに非常に多くの経験を積まなければならぬことはなく其の経験は内部に盛んなところの本能的動作を喚び起す導きたるに過ぎないのである。

第二、本能は自發的であるが動作を起すには刺激を要する

第二に本能は自發的のものである。自發的ではあるが然し其れが喚び起されるには何か一種の刺激が必要である。例へば燕が彼の巧みな巢を造ることは何人も知るところで近頃の學者の説に由ると彼れの巢の造り方は偶然にも高等數學から割出した建築術に協つて居ることである。かかる巧みなる働きは無論燕の本能であるが然し彼等が斯くの如き巢を造るのは泥土に由つて刺激されるからであらう。又赤兒が吸乳作用をなすのは彼れの唇を刺激するものがあるからであらう。無論赤兒は乳房ならぬ指頭などを口中に入れても之れを乳房と同じやうに欺かれて吸ふが然し其は吾々の議論に關係はないので即ち本能の外に表はれる爲めに

は其の刺激が本當のものであるかどうかには關係せないので兎に角何等か其の本能を發揮せしむるに適當な刺激がなければならぬ。ヒスロツプ氏は例を擧げて云ふには海狸が浸水を防ぐ爲めに堤を築くところの本能は彼れが籠居さゝして其の必要のないときにも之れをなすときがあるし鴉鳥は卵と思つて石を孵化せうとする舉動をなすことがあることを以てして本能は純然たる自發的のもので外來の刺激がなくても只内部の刺激に由つて起るものだと主張したが余輩も素より本能は頗る自發性のものであると云ふことは疑はないが然も氏の擧げた二例に於ても矢張彼等の本能を喚起すべき何等かの刺激のあることは明かである。即ち假令其れが眞正の卵でなくても石が卵に似た刺激を鴉鳥に與へなかつたならば鴉鳥は孵化の本能を表はすことは無からう。本能は此の如く外來の刺激に由つて喚び起されるものではあるが決して其の刺激に規定せられるものではない。即ち本能は或る種の刺激の導きに由つて起るのではあるけれど

も然も其の作用は内部に存在して居るところの發動的傾向に従ふものであることは疑ふ可からざる事實である。動物が輒もすると欺かれ易いのは實に之れに由るもので鴛鳥が卵と思つて石を孵化すると同じやうに昆虫は或る臭氣に欺かれて腐つた葉の上に産卵する。

第三に本能は其の行動複雑なるのみならず固定的にして整正である。燕が泥土を以て巧みに巢を造るが如き海狸が築堤するが如き之れを反射運動などに比べると頗る複雑であることは明かである。之れと同時に其の動作は先祖より遺傳した一定不變の形式に従ふもので先祖代々其の爲すところが變らない。是れ實に本能の本能たる重要な點である。

第四に本能は無意識的にして然も確定せる目的に順應するものである。即ち本能的行動をなすつゝあるものは其の爲しつゝある現在に於て意識のあることは勿論であるが然も其れが最後に達せられるところの目的に關しては何等の觀念もないのである。即ち目的の豫知なくして然も能く

第三、本能は其動作複雑なる上に固定的で整正である

第四、本能は無意識目的に順應する

目的を達するところの自然なる順應のあると云ふことが即ち本能の特色である。例へば燕や雀が永い間かゝつて熱心に巢を造つて居るのを見ると其の方法の巧みなことに欺かれて人々は彼等は來らんとときの産屋に充てんために其れを目的として巢を造つて居ると考へるのであるが然も實は彼等は唯粘土を見れば又枯れ枝を見れば巢を造ると云ふ本能的行動をなさねばならぬやうに内部から強い付けられて其の働きを敢へてするものであつて決して産屋に充てると云ふ目的を意識して爲して居るものではない。だから産卵の期に至つて前に刻苦して造つた巢が其用に供せられるのは彼等に取つては偶然の幸福である。試みに思へ人間でも野蠻人や幼稚のものは數日數月の後を目的にして或る行ひを爲し得るものはないのであるが其れに燕や雀の如き下等動物が一ヶ月も二ヶ月もの後のことを目的として即ち意識的に目的にして働くと云ふやうなものは到底あるべきものではなからう。若し彼等に一二ヶ月の後をも洞見するの知識が

第五、本能は變化のない環象にのみ順應する

あるとしたならば彼等の發達は非常に驚くべきものである。第五に本能は變化がない環象には順應するけれども變化せる環象には順應せない。是れは本能の客觀的特性とも云ふべきもので若し本能をば遺傳せる習慣であるとき考へるときには其を活動せしめる爲めには環象が一定不變の狀態であることを要するとは明かなことで之れが爲めには環界が變化しても本能は依然として此の變化に抵抗を示すのは正確な事實である。例へば海狸は海水の浸入を防ぐ爲めに堤を築く本能のあることは前に述べた通りである。是れは彼等が海邊に其居をトする場合に於て初めて其の必要があるもので籠居の場合に於ては其の必要がないのであるけれども何物か彼れの本能的作用を喚び起す刺激があるときには彼れは依然として築堤の動作を敢へてするのである。其の他鷓鴣が石を卵と思つて孵化するが如きことは本能が如何に一定不變の環界にのみ順應するものであるかと云ふことを示して餘りありと云ふことが出来る。既に本能

衝動は肉慾であること云ふ説

衝動は不規則的執意だとする説

は一個の不變の環界に順應するものであるから本能にのみ依頼して居る動物は謂はゆる進歩發展と云ふことが出来ないのである。

第二章 衝動

前に述べた本能や今述べやうとする衝動などは其の語義が種々に解せられるのである。或る學者は衝動は或る一定種類の動作を惹き起すところの全く盲目的で不合理的の傾向だとした。例せば饑渴兩性の慾その他自然的なる肉慾を衝動だと云ふのは一つには其の不合理的性質の理由によるのであるし又一つには是等の強盛なる要求は唯其の肉慾を満足さすと云ふことの外何等の確かな目的に向ふと云ふこともなく經驗の後漸く其の趣旨を知るに至るまでは其の目的の智識たにないと云ふ有様であると云ふ理由に由るのである。又他の一派の學者は衝動をば意識的だとはするものの之れを以て其の時其の時に發する變化の極まりない不規律なる活動と見做し之れをば規則正しき合理的動作と反對のものとなした。

衝動は現在と將來との相異を含む

約言すると前説は衝動をば肉慾と見做し後説は不規則的執意だと見做したのである。
余輩の見解によると衝動に於ては吾々の意識は最早一時的印象によつて支配されることはなく其の一時の状況を超越せうとするところの運動が起つて之れが爲めに心身の平衡を破るものである。即ち衝動の心理的狀態に於ては一時の感覺及び感情と苦を避け樂を進めやうとする多少の明白なる觀念との聯合を要するものである。尙之れを言へば衝動は必ず現在と未來との相異を含んで居るもので前に述べた本能や反射運動と相異なる點は爰にあるのである。本能や反射運動に於ては刺戟は單に或る種の感覺を惹起するに過ぎないで其れに付いて如何にすべきかを規定すべき觀念はない。然るに衝動は必ず多少の有識なる要求を有するものである。廣い意味で之れを言つたならば衝動と云ふ語は感覺や感情に對した運動的傾向をも含んで居るのである。要するに衝動は假令不明瞭なりと

衝動は目的の觀念を有して居るが方便的觀念は有することと有せないこととある

衝動は二種の方面を具へて居る

は云へ何れも其れが目的の觀念を有して居る點に於て本能や反射運動と相異なるので之れと同時に其の目的を達する方便的觀念に至つては或は之れを有することもあるし有せないこともある。之れに反して本能などは其の目的は意識せないが然も其の無意識的目的に到達するところの方便は之れを有して居るのである。たとへば小兒が何かなしに食ひたがる動きたがると云ふことは本能ではなくして一種の衝動である。で、そこには決して何が食ひたい如何なる運動がしたいと云ふやうな明瞭な目的の觀念はなくとも然も漠然ながら其の達せんとする目的を意識して居ることとは事實である。
衝動は二種の方面を具へて居る。即ち苦樂の感情と其の感情に對するところの活動の誘因を含んで居る。此の二つの方面は決して混同してはならない。吾々が或る事物から快樂を受けると云ふ場合に吾々は單に之れを感ずると云ふ意と又之れを追究すると云ふ意との二様に用ひることが

出来る。だから日常に於ては此二つの方面は甚だ混同せられ易いのである。二者の間に於て衝動の目的は常に苦痛を避けて快樂を得んとする感情にありとして考へられる如き關係があると思つてはならない。衝動は快樂を得苦痛を避けやうとするものであると云ふ説明は凡べて吾々の動作並びに執意の基礎は利己的動機であると云ふことを證明するものであると考へられたが然し此の考へは不完全であることは明かである。なせならば衝動の目的は快樂を喚起し或は喚起せんとするところの事物其の物にあるので決して快樂の感情其の物を要せないからである。加之衝動は觀念の爲めに規定せられて其の觀念に満足を與へやうとするものである。たとへば空腹なときに吾々の衝動は何に由つて起るかと云ふと先づ或る種類の食物其のものに關して起り必ずしも其の食物を食つた後の快樂の感情に關係するものではない。又吾々が或る種類の事物を認識せうとする場合に於ても其の衝動は先づ吾々の認識せうとするところの事物

目的の到達
に伴ふ感情
は衝動の動
機ならす

其の物に關し其の認識に由つて得るところの快樂の感情には關係せないのである。又吾々が他人の不幸を軽減して其の幸福を進めやうとするところの同情的衝動は吾々の心中に描き出されたところの他人の幸福の觀念並びに其の幸福によつて感ぜられるところの他人の快樂の觀念によつて誘導せられるのである。然しながら此の衝動の發作は吾々が同情を表するところの人物の幸福を増し或は不幸を減少するのを見て感ずるところの快樂の感情に必要なものである。本能の場合に於ては夫れ自身は動作の目的をも知らなければ又其の動作に由つて起るべき快樂の感情に付いても無意識である。之れに反して衝動は其の目的を意識し之れに向つて運動せうとするものである。然しながら其れが目的に由つて起るところの快樂の意識とは違ふのである。委はしむ云ふと衝動的運動の動機となるところのものは目的の觀念に由つて惹起せられたところの感情であつて其の目的を達した後には感ずべきところの觀念に由つて惹起せられた

目的到達に
伴ふ感情と
衝動との調
和は完全で
はない

ところの感情ではないのである。素より衝動と其の目的に達して得るところの満足との間に多少の調和の存して居ることは通常疑いのない事實である。然しながら其の調和たるや一つには衝動と本能との聯合に基き一つには衝動の目的が元來感情の原因であると云ふことに基くのである。然しながら此の調和は常に必ずしも完全なものではない。衝動の強弱と其れが到達後の満足によつて得られるべきところの快樂と比例せないところからして著るしい心理的現象の起る事のあるのは吾々の屢々注目するところである。今二三の例を擧げて見るならば凡べての情慾の上に於ては此の不調和は多少の差はあるもの、凡べて免れることは出来ないものである。さればこそ吾々に或る種類の情慾が起つたときに假令強弱の差こそあれ常に多少の不自由の感情を免れないのである。彼の酒飲みが酒に對するところの情慾は非常なものであるけれども然も愈彼れが其の酒を飲んだ後に得るところの快樂の感情は決して其の情慾の強盛なる

ことゝは比例せないのである。少年が試験準備のために其の最も好んで居るポルトやテニスを數週間禁せられた場合に於ては其の運動を樂まうとするところの衝動は著るしい強さを有して居るものであるけれどもさて試験も終つて實際其の運動を爲し得るに至つたときの快樂は必ずしも前の強さに比例するものではない。小學の兒童などに遠足を豫告すると彼等は殆んど寢食を忘れて其日の來らんことを熱望するがさて愈其の日となつて遠足を遣つて見ると小兒は喜ぶには違ひないが然も衝動の強盛なのに比べてたら決して其の勢ひは強いとは言へない。吾々は世の中に生き長らへて何の樂みをも得べき望みの綱の絶れたときすら自衛的衝動の甚だ強盛なものであることは彼の貧民や不幸なるもの、列に於て屢見るところである。此の關係は利益に無關係なるところの感情と聯結したところの衝動の上に於ては殊に肝要なことである。或る種の事物に吸収せらるべき衝動即ち他人の爲めに自己を犠牲に供せんとするところの衝動

は其の行爲の結果一個人に起るべき快樂の感情から見たならば到底十分なる理由を發見することの出來ないほど強盛なることがあるであらう。例へば慈母が其の愛兒の危険を救ふが爲めに自分の身命の危いことをも顧みないで之れを保護せうとするところの衝動は到底彼の女が其の子の危険を實際に救つた後に當然得らるべきところの快樂の感情より見ては解することは出來ないのである。

然しながら是等の不調和は暫時にして堪へないやうになるものである。そこで衝動が漸次に衰へて消滅するか或は感情が熱せられて益其の度を加へるかする。元來衝動と生活状態との調和は缺く可からざるもので若し此の二者が永く調和せないので反對の方向に進むやうなことがあつたらば遂には破裂するを免れないのである。感情と活動とは衝動の性質で殊に活動は之れを感情に比べると其の根底が無いのである。こは無意識的の衝動は意識的の衝動に比して早く存在すると云ふ原則に由つて明か

活動は感情より根底が深い

である。自發運動、反射運動、本能的運動及び衝動的運動は生活の發端で觀念や感情の次第に發達するに従つて是等の活動を規定するやうになる。然しながら此の規定に先立ちて言をかへて言へば觀念及び感情に先立ちて活動の存することは明かである。

明確なる觀念は苦痛及び快樂の感情と結合するときに於て初めて衝動の對象の表出となるのである。此の時に於ては運動は既に一定の方向に向つて進行して居るものであるからして之れを他の方向に轉せしめることは容易ではない。衝動が一たび起つたならば意識の平衡は爰に攪破せられて如何に運動を處理すべきかの問題が起る。智識を求めやうとするところの人は智者と愚者との中間に位して居る。なせならば智識を追究するところの衝動は先づ無智を感ずるところの苦痛と更に無智に勝るもの存せねばならぬからである。實に其の内界のことたると外界のことたるとを問はず、即ち思想的革命たると政治的革命たるとを問はず、凡べて革

命の起るのは斯かる状態の時期で却つて苦痛の激烈なときには人をして畏縮させて仕舞ふがもし其の苦痛が少しく緩和となり或は多少進歩改良を得て一層良好な境遇の觀念が起るときにはそこに方法の十分であるや否やに關せず破裂を見るのである。さればこそ古來の歴史に見るが如く革命を起すところの人民は全く自由のない人でもなければ又素より全く自由な人でもなく寧ろ幾分の自由を有する人である。トクイエ氏曰く歴制政府にあつて最も危険な時期は暴政の甚だしい時期ではなくして却て稍改良を加へせられた時期である。此の事は佛蘭西の大革命や米國の獨立戦や露西亞の近世史が吾々に十分證明して居る。

第三章 慾望

衝動と慾望との重なる差異は目的の觀念の明瞭の度にある

前に述べた通り衝動には強盛なる感情と目的の觀念の臆げながら存在して居るものであるが然し衝動の場合に於ては其の目的の觀念は未だ漠然として居る。ところが一步進んで慾望と云ふものになると其の目的の觀

其の他の差異
第一、衝動は變動し易く且つ不規則である

第二、衝動は非反省的、非思慮的である

念は明瞭になる。だから衝動と慾望との重なる差異は目的の觀念の明瞭の度である。然り尙ほ細かに二者の差異を述べると左の通りである。第一衝動は慾望に比べると變動し易くて且つ不規則である。彼の嬰兒などは慾望と云ふものが未だ十分に表はれないで大人に慾望と言はれるものも彼等にとつては未だ衝動の分際を越えないからして従つて俗に謂はゆる氣の變り易いと云ふことは多いのである。そして其の望むところのものが頗る不規則である。是れは慾望のやうに目的の觀念が確立せないから従つて不規律にもなるし變動し易くなるのである。

第二慾望に比べると衝動は非反省的、非思慮的である。即ち衝動の方は活動となつて外に表はれやうとする勢力が非常に強いために靜に反省し靜に思慮すると云ふことは出來ないのである。例へば大人でも落付いて食物を慾望するときには何が滋養になるとか何が甘いか云ふことを考へて居るが戦争などの場合に於て終日空腹に苦んだときなどには滋養も糸

瓜もなく何でも駄でも食ひさへすればよいと云ふ風になる。又終日遊び暮して居る少年は如何なる運動をなさうかなど、云つて考へることがあるが禁足に處せられて數日舎監室に留められた少年は其れが許されるや否や何かなしに飛び廻はりたい考へから運動すると云ふやうなことは殆んど無い。是れは其の運動の慾望的でなしに衝動的であることを示して居る。

第三に衝動は慾望に比べると其の發作が極めて一時的で且つ噴火山的である。慾望の方には衝動の方よりも智識要素が多く加はつて居るだけ其れ丈多少永續的であるが衝動の方は其れが起ると云ふと殆んど待て暫しなしに發動したがる。例へば幼稚園時代な子供は衝動に富んで居るからして何か食物を欲しがると云ふと前後を顧みず非常な勢力で無暗に之れを得たがるが然し漸く長じて小學時代にもなると御馳走が出来るのを知つて居ると之れを待つだけの餘裕は出來て来る。

第三、衝動の發作は一時的噴火山的である

第四、衝動は近接目的の爲めに將來の効果を忘れる

第五、衝動は變化し易い不規則の外界には順應しにくい

第六、衝動は力學的要素に富む

慾望の種類

慾望の種類は又衝動の種類と見て宜い

第四に衝動は慾望に比べると眼前近接の目的の爲めに將來の効果を忘れる傾きがある。丁度酒飲が病氣の如何に拘らず無暗に酒を飲みたがつて却つて平癒後の飲酒の快樂を犠牲にして仕舞ふやうなものである。第五に衝動は之れを慾望に比べると變化し易い不規則な外界には順應することが出來ない是れは第一の個條と對照したならば容易に其の説明を得るであらう。

第六慾望に比べると衝動の方は恐らく吾々の意識中で最も力學的要素の盛んなことを示すものである。實に衝動ほど人間を動かさうとする勢力の強いものはないので慾望は其れほどではない。

前にも述べたやうに衝動と慾望との根本的差異は唯其の目的の概念の明瞭であるや否やにあるのであるが従つて其の種類に至ると衝動も慾望も大體同じいのである。以下に慾望の種類を述べて見やうと思ふが是等慾望の種類が目的の概念の不明瞭な場合には皆衝動と言はれるのである

からして従つて慾望の種類として述べるところのものは又衝動の種類と見て宜いのである。

飲食の慾望
覺官的慾望

動作の慾望

休息及睡眠
の慾望

第一は飲食の慾望である。是れは人間も動物も生れてから死ぬまで絶えず有して居るものである。其れから次は見たい聞きたいと云ふやうな覺官的慾望である。此の慾望は無論大人にもあるが然し小兒の方は殊に此の慾望が甚だしい。無論其れは小兒の智識を豊富にする爲めに大層必要なことである。次は動作の慾望で此の動作の慾望は前の覺官的の慾望と相待つて内界と外界との經驗に便利を與へる。即ち前の覺官的の衝動にあつては慾望は主として受動的に外界に對するのであるが動作の衝動若くは慾望は主として能動的に外界に對するのである。従つて覺官の衝動は吾々の智識の發達の門戸となり動作の衝動若くは慾望は感情意志の發達の門戸となる。覺官を使ひ動作を盛んにすると吾々は勞かれるそこで今度は休息や睡眠の慾望と云ふものがある。子供には休息の慾望と云ふ

模倣の慾望

名譽の慾望

事は其のエネルギーが強盛であるだけ少いが然し大人となると此休息の慾望は中々盛んである。夫れから又人間には模倣の衝動若くは慾望と云ふものがある。殊に此種類のものは小兒に於て活潑である。小兒が言語を覺わたり種々の舉動を巧みにするやうになるのは全く此模倣の衝動に驅られるに由るのである。大人にも多少は模倣の衝動はあるもので即ち自分の欽仰して居る人物の言行などは知らず識らず模倣する傾きがある。殊に小兒の時は模倣心の盛んなほど其の發達が速かである云つても宜い。又人間には交際の慾望が盛んなものである。常に群居して居ればこそ、れほどに此の慾望の盛んであると云ふことが知られないが彼の密室監禁などをされたもの、經驗に徴すると此の慾望は非常に強盛など云ふことが分かる。次ぎは名譽の慾望で此の慾望は色々と變形して人間社會の重要な機會となつて居る。名譽とする事柄に差異はあるもの、殆んど世の中に名譽に頓着せないものはないので甚だしきに至つては之れ

權勢の慾望

生命の慾望

所有の慾望

智識の慾望

由自の慾望

兩性上の慾望

が爲めに身命を犠牲に供して厭はないものさへある。名譽を愛すると同時に人は權勢を愛する。人は自分が權力を振ふ地位に立たうとするものであることは小兒のときからして表はれて居る。此の外吾々人間には生きたい生きたいと云ふ生命の慾望もあれば死んでも財布は放さない云ふ所有の慾望もあるし新しいことは知りたい知らないことは解釋を得たいと云ふ智識の慾望もあるし、又言論に於て行爲に於て將た信仰に於て自由を得たいと云ふ慾望も人間には中々盛んで歐羅巴の近世歴史は人間の自由を愛する慾望が如何に強いかを吾々に示して居る。尙一定の年齢が來ると男女兩性上の慾望と云ふ非常に強盛な衝動や慾望が生じる。是は人間に最も大切な慾望であると同時に又其始末に中々困難なものである。以上は凡べての人間に多少強弱の差はあるものゝ悉く存在して居るものであるが言ひ換へたら皆自然的のものであるが此の外に人爲的の慾望と云ふものがある。其の一番著るしいものは飲酒喫煙の慾望などで是等

人爲的慾望

社會的現象は慾望の化身である

社會現象を變更せんとせば先づ慾望を變更するを要す

の慾望は無論習慣のない人には何でもないことであるが然し一旦習慣となつたものには却つて自然的の慾望よりも勢力が強いことがある。吾々には上に述べたやうな無數無限の慾望があるからして此の慾望が謂ゆる種々の社會的現象となつて客觀的に表はれるのである。換言すれば社會の萬般の現象は畢竟吾々の慾望の化體である。だから其の國に往き其の處に至つて其の社會的現象の如何なるものが多いか、又如何なる邊が發達して居るか、如何なる點に於て他と異なつて居るか、と云ふことを見たならば即ち其の國、其の處の多數の人の慾望として居るところが如何なる邊にあるかを大體上知ることが出来る。だから社會の風儀とか或は習慣とか或は制度とか文物とか云ふものを變更せうと思つたならば先づ其の本體たるどころの人の慾望から變化して往かねばならぬ。又慾望の變化が出来たならば其の外界的の化體は容易に變革される。たとへば日本には小料理屋や待合が多くて風俗を壞亂することが多いと云ふのも此は

慾望は人類
社會の改良
進歩を促す

日本人の慾望が其の點に發達して居るからであるから其の慾望の方向を他の高潔な方面に向はせなければ到底其の弊を矯めることは出来ない。人間には色々な慾望があるから色々な社會的現象が出来る。又人々の間に調和があるかと思へば衝突もあり笑ふやうなことがあるかと思へば喧嘩することもある。傀儡子首にかけたる玉手箱ほどけ出さうと鬼を出さうと。實に慾望の如何によつて世の中は地獄とも極樂ともなるのである。實に慾望がある爲めに吾々は之れを實現せうとして働く、争ふ、改良する、従つて進歩するのである。若し慾望が無かつたならば吾々人類及び社會は進歩發展することが出来ない。ところが昔から宗教家や消極的の道徳家などは此の慾望の悪い方面ばかりを眺めて人間の慾望を全滅して謂はゆる化身滅智枯木死灰的となることを以て理想的状態涅槃の有様と考へたものであるが其れは餘りに氣の狭い話して慾望を除いたら社會はないのである。否、人間と云ふものもないのである。社會もなく人間もなけ

古來の宗教
家や消極的
の道徳家は
慾望の悪い
方面のみを
眺めた

慾望は種類
の選擇と調
和が必要
である

慾望が行爲
を起すやう
になつたの
を執意と云
ふ

れば宗教も道徳もあらう筈がない。人間あつての宗教、人間あつての道徳で道徳あつての人間、宗教あつての人間ではない。其れを宗教家や消極的の道徳家は反對に考へて居る。要するに慾望は大變必要なものである。只其の性質を選び其の各種の間に調和を計つて往くと云ふことが大變に大切である。聖人君子と疋夫野人と異なるのは詰まり慾望の有無にあるのではなくして慾望の調和、種類の選擇如何にあるのである。文明社會と野蠻社會との差異も亦慾望の種類の多少、美醜、善惡、調和、不調和にあるのであることを考へたならば教育も社會の改良も政治も道徳も此の慾望と云ふものに付いては大に重きを置いて考へねばならぬ。衝動が一步進むと慾望となり慾望が愈吾々の行爲を起すやうになると其れを執意と云ふのである。吾々の常に有して居るところの慾望は無數無限に澤山ある。名譽も得たいし、金も欲しければ運動もしたいし、甘いものも食ひたい。洋行もしたければ、閑居して花を樂しむともして見たい。然

執意は實行せられるものに限る

執意には目的の觀念の外に手段の觀念をも具へる

るに是等多くの慾望は單に慾望として存在して居るのみでは其れが一々行爲となつて表はれるものではない。空に慾望することは幾らでも出来るが之れを實踐躬行すると云ふことになる。非常に制限される。加之慾望には到底實行することの出来ないことでも之れを思ひ浮べて見ることは出来る。然るに執意と云ふものになると必ず實行されるものに限る。否少くとも實行されると信することではなければ執意となることはない。そこで吾々の慾望も進んで執意となつて初めて其れが意志されたと云ふことで意志されたものは必ず行爲に表はれねばならない。行爲に表はれる爲めには單に目的の觀念があるばかりではいかなない。假令實際に當つた場合には其れが不完全なことがあるにもせよ、必ず手段をも具へて居らねばならない。即ち執意には目的もあれば手段もある。だから吾々の一つの慾望が他の慾望と争つて勝を制し且つ如何に此の慾望を決行するか。手段の考へが付いたならば其の慾望は最早慾望とは言はないで執意と

意志は廣意では凡て努力作用を指し狭意では執意を指す

グリーン氏は執意は自覺的主體が自我をば慾望中の一と同一視して慾望の上に添加する原則とした

云ふのである。已に執意となつた慾望は單なる慾望とは違つて必ず意志となり行爲となつて表はれるものである。吾々の意志と云ふ言葉を廣い意味に取ると筋肉に訴ふるところの努勉作用は悉く之れを含蓄するのであるが若しそれを狭意に取ると本編の初めから述べて來た各種の作用中で只今述べつゝある執意のみを指すのである。然らば慾望は如何にして執意となるか？之れに付いてグリーン氏は大略左の如き説を立てた。曰く意志(グリーン氏の意志は爰に云ふ執意に相當す)は行動によつて實現せられるところの最強慾望若くは其最強慾望中の一つではない。尙ほ又彼等慾望と同格的のものでもない。と云つて彼等慾望なしには意志は成立することは出来ない。然らば意志は何であるかと云ふと自覺的主體が自我をば彼等慾望中の一つと同一視することに由つて彼等の上に添加するに至りたる一原則である。委しく言へば人が如何に行動すべきかを未だ決定せない間は諸の慾望は皆悉く彼れの外部に

意志は慾望の最強宇宙である

あるのである。彼れ主人公は絶えず是等の慾望によつて感觸はせられるけれども然も其れは彼れ自身ではない。其れ等の慾望は未だ彼れ自身と同一視せられたものではない。言ひ換へれば諸種の對象への傾向であるけれども尙ほ未だ彼れ自身の對象ではない。然るに一旦慾望中の或る物が自覺的主體と同一視さるゝに至つて爰に初めて慾望は意志上のものとなる。グリーン氏が謂はゆる意志は最強慾望でない云ふ説は一面から見ると異論のないことである。なせならば元來吾々の慾望と云ふものは其の當時表はれて居るところの一個の具象的事物のみに關しての勢力を以て意識内で戰闘するものではなくして其れが屬するところの一宇宙の勢力に由つて戰闘するものであるからである。然しながら若し吾々の意志は慾望の最強宇宙であると云つたならば余輩は之れに賛成せねばならぬ。此の點に於てはグリーン氏の説と反對である。要するに慾望の執意となるには一個一個に於て最強なものではなくして其れが屬する宇宙

マツケンジ
ー氏の慾望
の宇宙説

として最強なものであると云ふことは余輩の議論である。此の點はグリーン氏のと違ふのである。余輩は先づマツケンジ氏の慾望の宇宙に付いての説を述べて然る後にグリーン氏の説を批評することにせう。氏曰く人類の慾望は宇宙を形成するものであると云ふことは如何なることを意味するのであるかと云ふと此は論理學に謂はゆる論辯の宇宙と云ふものと比較したならば解釋の上に便利であらう。論理學に於ては特殊的陳述をなすに當つて其の陳述の効果の及ぶ範圍内を稱して論辯の宇宙と稱す。たとへば神々に付いての陳述はホーマーの詩編に寫し出された世界又一般に希臘神話中なる世界に關する範圍内に於ては信實である。されど一旦之れを通常事實上の世界に適用せうとするときには荒誕無稽のものとなるであらう。之れと同じく吾々は印紋學の宇宙に於ては鷲頭獅身の怪獸又は一角獸に付いての説をなすことが出来るし稗史の宇宙に於ては神仙に付いて述べる事が出来るしセキスピヤーの院本の宇宙に於ては

ハムレット又はキンググリアに付いて陳述をなしても正當であるであらう。ダンテのヂハインコメツヂの宇宙に於ては天國と極樂と地獄との説をなすことが出来る。即ち是等の事件に付いての陳述は是等各の宇宙内に於てのみは信實たる事を得るけれども一旦之れを其の所屬の宇宙からして取り放し他の宇宙に持ち出したときには其の陳述は虚妄たるを免れないのである。吾々の慾望の宇宙に付いて考へても稍之れと似たものがある。即ち各種の慾望は其れ々々皆某宇宙に屬するものであるが一旦之れを其の所屬の宇宙から取り放して他の宇宙に移すときには忽ち其の勢力を失ふであらう。然らば慾望の所屬する宇宙と云ふのは如何なる宇宙を指すかと云ふと吾々の性格と稱するものに外ならない。委しく言へば其の慾望なるものが起るときに表はれたところの其の人の倫理的見地の宇宙であると云つて宜からう。如斯き宇宙の間に大なる差異の存するところのある事は詩歌、小説、戯曲などに於ける人物の行動に對して吾々の常に

氏は慾望の宇宙を以て其の人の性格となす

慾望の宇宙は變化する

下すところの判斷に徴して證明することが出来るであらう。吾々は小説を読んで其の主人公の發起した慾望の如何にも其の人の平素の性格と地位とに相應せないと云ふことを見ること屢あるであらう。少くとも其の人の起したと云ふ慾望の程度が其の人物に不相應なることを見ること屢あるであらう。そして事實上彼れの特殊的宇宙に屬するところの慾望と云ふものは斯くの如き慾望ではない。且つ吾々が斯く評價するところの特殊的宇宙即ち各個人の性格の異なると共に甚だ相異なるところの特殊の宇宙は同一の人にあつてすら永久不變のものではない。吾人は吾人の心氣の差異健康状態の如何に由つて吾人を支配するところの慾望の種類も自然に相異なることを認めねばならぬ。是等の相異は吾人が宇宙相異と稱し得るところのものを構成する。そしてかゝる宇宙の各には其れ其れの慾望圓があつて之れに附屬して居る。少なくとも慾望の特別的配列があつて之れに附屬して居る。此の宇宙は同一人に於てすら其の人

に境遇事情の急變のある場合には又急變するのが常である。或る昔譚に猫が皇女に化けたが鼠を見て忽ち其の本體に復したと云ふことのあるのは境遇事情の急變が慾望の宇宙の急變を來たさしむることの好比喻である。即ち事情の急變は猫をして皇女の宇宙より猫の宇宙に墮落せしめた。之れと同様の變化に付いては世間に其の例が少くない。獨逸の諺に少年のときに慾望するところのものは老年に至つては飽き足るものである。豊菅に少年時と老年時との間のみならずやである。吾々は年々歳々日々夜々否時としては時々刻々一宇宙からして他の宇宙に移り、さきに慾望したのも今は捨て、顧みない。甚だしきに至つては之れを嫌惡するに至ることさへある。例へば朋友死去の報知の如き、約束の回想の如き、道德原則の提醒の如き其の他此類の急變は直ちに吾人を捕へて一宇宙から他の宇宙に移らす。セーキスピアーのラヴス、レポア、ロストと名付くる演劇に由ると佛王崩御の報知が前の諸の舞臺に於ける機智輕浮をば突然

慾望的宇宙
は種類が多
い

終結せしめて爰に全然變化した調子を表はす。斯くの如き變化は一宇宙から他の宇宙に轉じたるものとして差支なからう。尙ほ又吾々の日曜日的生活觀より週日の生活觀に變化する如きも慾望の變化の例解となすことが出來やう。或る種類の人において衣服の變化すらも其の人の宇宙の變化を來たすことがある。されば僧帽は僧侶を作らずと云ふ諺は必ずしも全く眞理と云ふことは出來ない。

吾々の慾望が常に一個として争はないで宇宙をなして争ふものであると云ふことは明かなことであるが余輩は尙マツケンジ一氏の説を補つて左の如く述べたい。即ち吾人の慾望的宇宙は之れを差別的に見ると其の種類が甚だ多數である。吾々には飲食、衣服、家屋の慾望もあれば地位、名譽、兩性の慾望もある。否、是等飲食、衣服などの慾望の中にも亦多數の慾望を包含して居る。そして精密に言つたならば鯛の漬焼を好むと云ふ慾望とピラテキを好むと云ふ食物の慾望とは其の種類に於て既に相異なるどころ

があると言はねばならぬ。假りに濱焼を好むの宇宙はピフテキを好むの宇宙と違つて居るとすると食物の宇宙なるもの、中に既に多くの違つた宇宙の包含されて居ると云ふことも出来るし其の他諸の慾望に付いても又其の通りである。果して然らば吾々の慾望の宇宙は之れを小にして観ずるときは其の數無限なりと云ふべく此の無限の慾望の宇宙は如何なる状態に於て意識中に生存競争をなすか？ マッケンジー氏は吾人の慾望の眞の力は其の由來するところ各慾望二個の活力又は勢力ではなくして其の所屬宇宙即ち系統の勢力にあると云つた。此のことは吾人の慾望なるものは孤立的現象ではなくして系統の一部分だと云ふこと、慾望の衝突は實際に於ては二個以上の慾望の宇宙の衝突だと云ふことを示して居るけれども然も其の謂はゆる所屬宇宙なるものは如何なる範圍を有するものであるかと云ふことは未だ審かでない。余輩の考へに由ると慾望の宇宙は之れを小にして云つたならば殆んど無數無限であるからして従つて

吾々の我も慾望の宇宙と同一く其數無限である

慾望の宇宙も我の類似の關係に由つて統一せらる

慾望の宇宙に由つてのみ表はれるところの我なるものは之れを差別的に云つたならば慾望の宇宙の如く無數の姿をなして表はれるものと言はねばならぬ。即ち吾々の自我は統一的の邊から見ると終始一貫恒久不變なるものであるなれども其顯現は千差萬別の姿を呈す。そして斯かる無數の慾望の宇宙は吾々の論理的概念が層々相包括して小なる概念が次第に大なる概念に由つて包まる、如く吾人の慾望のより小なる宇宙はより大なる其れと類似の關係の多いものと相結合して居る。そして論理的概念が層々相包括して遂には宇宙を綜括するの一大概念となることが出来るやうに吾人の慾望も之れと同一の状態を呈することが出来る。各個人の性格なるものは斯くの如くにして其の差別を表はすものではなからうか？ 吾人が人々の性格を云々するは素より其の人を統一的の側から見るのである。然も其の性格中には無數の慾望の宇宙を包含して居るからして之れが爲めに時々刻々の性格の表はれをして同中常に異彩を發せしめる

慾望の衝突は慾望團體相互の争ひである

人は異なつた慾望の宇宙を選び同時に恒久的宇宙を選び

ものである。其の同中異彩を發する邊に付いて吾人は慾望の活動慾望の衝突を云々することが出來やう。即ち之れを簡單に言つたならば吾々の慾望は其れと最も類似の關係の多い慾望相互の團結的勢力を以て他の之れとは相反對せるところの慾望的團結と相争ふのである。かゝる邊から見たならば人々が實際に或る慾望の宇宙をして勝利を得さすことは其の人の年齢と境遇と事情とに由つて相異なるけれども然も又一面から見ると始終を一貫して甲には甲の性格の影を表はし乙には乙の性格の影を宿す。されば人は時々刻々に相異なりたる慾望の宇宙を選ぶことがあると同時に又恒久不變的に或る慾望の宇宙を選択するものと言つて宜からう。即ち一個一個の慾望の選擇も之を大にして言つたならば其の人の性格を表はすと云ふことが出来る。一個一個の慾望が其の性格を表はせばこそ吾々は其の人の慾望するところを見て其の人の性格を知ることが出来るのである。若し人々の慾望が其の人其の人の性格の影でなくして全く孤

慾望の選擇は其の人全體の選擇である

立的のものであつたならば吾々は到底其の慾望を見て其の人の性格を云云することは出來ない。されば同一の人が時と場合とに由つて非常に相異なる慾望を選択することがあるとは云ふものゝ其の非常に相異なつたところの慾望を選択すると云ふこと其のことの中に其の人の性格の表はれて居るものである。所詮吾々の慾望の選擇は其の人全體の選擇でして其の選擇の各に付いて其人の性格の影は表はれるものと言つて宜からう。勿論個々の時と個々の場合と個々の選擇とに付いて其の人の性格の全體が悉く發揮さるゝと思ふのは大なる間違ひである。要するに余輩の所説は吾々には宇宙の森羅萬象に應するだけの慾望があり得べきものであるが其れが互に相容れないで葛藤する場合に於ては互に類似の關係が多くて相互に離る可からざる關係を有するものが相團結してより大なる宇宙を作り以て他の宇宙と争ふものである。かくして相争ふ邊にいつしか其の人の性格を表はすものである。

グリーン氏の
説に付い
ての批評

上に述べたところに由つて明かな通り通常人が考へるやうに或る一個の最強慾望が直ちに執意となるものでないことは明かであるがさりとてグリーン氏が自覺的主體が自己を彼等慾望の一つと同一視するに至つて爰に意志を生ずと云ふことは異論なきを得ないのである。殊に氏が吾々が如何に動作すべきかを未だ決定せない間は慾望は吾人の外部にあると云ふの説は賛成が出来ない。彼のヘーゲル氏が余は余の敵にもあらずさればとて味方でもない。敵味方の雙方を兼ねて居ると同時に尙ほ争闘夫れ自身であると述べケアード氏が余は一身以て敵味方と争闘と争闘の爲めに分裂するところの戰場とを兼ねたものだと言つたことを思ひ合はすとグリーン氏が慾望は吾々の執意とならない以上は吾々の外にあると云つたことは面白くない。デウエー氏も亦曰く爰に注意せねばならぬことは争闘即ち葛藤は其の人自身中に行はれると云ふことである。即ち自己と自己との葛藤であると云ふことである。決して己れと己れ以外のものと

の葛藤ではない。又一つの衝動と他の一つの衝動との葛藤でもない。従つて己れ自身は其の争闘の結果を待つて居るところの局外的傍觀者でもない。されば慾望の葛藤と云ふことに若し何等かの意味があるとしたならば其は己れと争闘中なるところの人を代表すると云ふことである。其の人は一身を以て敵味方を兼ねると共に又其の戰場をも兼ねたものだと言つて宜しいと。是等諸氏の言に由つて考へるとグリーン氏の説は面白くない。成るほど吾々が一旦或る慾望をして勝利を得せしめた後には其の勝利を得たところの慾望は他の慾望に比して自我と一種特別なる温暖親密なる感がある。其の點に於ては他の慾望とは自我に接近の度が違ふやうに感ずることは事實であるけれどもさればとて争闘しつつある場合に於て自我が全く局外中立者の如き態度にあるが如く見做すことは甚だ面白くない。ヘーゲル其の他諸氏の如く慾望の争闘の場合に於ては自我は一生懸命に其の戦闘に加はるものであつて且つ一旦或る種の慾望が勝

利を得た後でも若し之れと争つた他の慾望の宇宙が勢力の強いものであつた場合には絶えず頽勢を既倒に挽回せうとして吾々の意識内に奮躍するものであると云ふことは我々の常に経験するところであらう。

第四章 動機

動機は慾望
なして執意
とならざる
原因の感情
である

動機と云ふことの解釋には色々あるが余輩は動機は慾望をして執意たらしめる原因となるどころの感情であるとして其説を進めやうと思ふのである。例へば飯を食ふと云ふことを執意したと云ふ場合に其の動機は何であるかと云へば餓渴の感である。散歩せうと云ふ執意の動機は或は腹具合が悪いとか或は頭痛がするとか或は退屈だとか云ふやうな感情である。斯くの如く單に一個の慾望である場合には動機も頗る單純であるが事實吾々は三つ以上の慾望を持つ事があるのでそこで種々と複雑な作用が起つて来る。例へば學生が日曜日を海に暮さんか山に暮さんかと思ふ場合に海も一つの慾望であるし山も一つの慾望である。處で海の方に付

いても之れを助けるものが色々あるし山の方に付いても之れを助けるものが色々ある。そこで何れとも決し兼ねる。ところが偶々風が起つて来た。でボートで海に出るとは危険であると云ふやうなことに氣付いたときには寧ろ山に遊ぶことにする。即ち山に遊ぶと云ふ事が執意される。海に遊ぶと云ふことは單に其の當時慾望となつて表はれたことに過ぎないことになり終る。かかる場合に於て何が山に遊ぶと云ふことの動機であるかと云ふに吾々は風波の危険と云ふことに結び付いた感情であると思ふ。又爰に學生があつて天氣が良いから運動に出やうと思ひ立つたがふと同宿生が昨夜から病氣で寝て居ることを思ひ出して彼れをして終日徒然に苦しめますのも可愛そうであると思ふ。そこで運動に出やうか宅に居て同宿生を慰めて遣らうかと一寸考へる。其場合に自分が會て病氣に罹つたときに其の友人は親切に自分を介抱して呉れたことを思ひ出して遂に宅に留まることになつたとすると此の場合には報恩の情なるものが

動機には快
樂の情もあ
れば苦痛の
情もある

幼時には動
機は意識さ
れない

目的觀念の
動機説

彼れをして宅に留まらしめた動機であると云つて宜からう。無論かゝる場合に當つて運動に出ると云ふ方にも色々之れを助ける感情が浮ぶであらうが兎に角其の執意となつた方の慾望を助けたところの間の感情が即ち動機と云はれるのである。だから動機には快樂の情もあれば苦痛の情もある。空腹の感が動機となると云へば之れは一種の苦痛が動機となつたのである。報恩心が動機となつたと云へば之れは寧ろ快樂が動機となつたのである。意志の未だ幼稚なときには此の動機が自ら意識されないが意志が次第に發達するに従つて動機は次第に明瞭に意識されるやうになる。無論大人といへども時としては自己の意外のところは執意の動機があつたことを後に思ひ當るやうな場合は屢々あるので必ずしも常に明瞭に其の動機を把捉することが出来るものではない。此の説には無論多くの反對論もあるので其の反對論の一番著るしいのは目的觀念の動機説である。即ち吾々の慾望は目的の觀念即ち智的要素と

智的要素は
執意を動か
す力を持た
ない

ゼームス氏
の動機説

感情的の要素とより成つて居るが此の中で本當の動機となるものは目的の觀念であつて感情ではないと云ふのである。たとへば鷹が雀を捕へんとする目的の觀念は雀である。然し其の感情的要素は或は空腹の感とか或は種屬憎惡の情とか云ふものである。此の例に於て目的觀念説を取るものは雀と云ふ目的物の觀念が鷹をして之れを引つ捕へるところの行動を敢へてせしめたるものであると云ふ。然し此説には余輩は賛成が出来ないのである。目的の觀念は智的要素であれば其れは實際に於ては執意を動かす力を有して居ない。其の力を有して居るものは感情である。だから動機としては飽くまで感情を取りたい。感情動機説に付ては異論も随分多いが然し多くは感情動機説の誤解から起つて居るのである。余は次に其の中有力な學者の説を擧げて之れを論評しやう。有名なる米國現時の心理學者ゼームス氏は其著心理學教科書中行動の原困としての快不快と云ふ章の中に左の如きことを云つて居る。

快なる行動は其の快感の盡きるまで之れを反復するが之れに反して不快なる行動は其の發せんとするに當つて吾人の筋は自然に收縮して停止する。現在の不快感が運動を停止する力の強烈な事を知らうとならば思ひ切つてでなしに徐々と自ら自身に傷けることが如何にも不可能であることを見れば明かである。實に吾人の手は頑強に不快感を生ずる事を拒斥するものである。之れに反して吾人が一旦經驗した所の快感は吾人をして之を得る爲めの行動を連続せざるを得ざる様に強迫する。此の如く快感不快感が吾人の行動の上に及ぼす影響の大に廣く且つ強烈なるが爲めに早熟の哲學は快感不快感の唯一衝動力である。此の感なくして行動の發するが如く見ゆるのは是れ。只此の感が行動を惹起する遠隔の心像中に屬するが爲め一見明かならざるが故であると斷言した。然し此の斷言は大なる謬見である。勿論快感不快感が吾人の行動の上に及ぼす影響の大に重要な事は眞理だが其は行動を惹起すべき唯一刺激ではない。

本能及情緒的表出には不快は關與せぬ

例へば本能及情緒的表出の發表などは快感不快感の毫も關與せぬ所である。誰れか笑ふ事が愉快だから笑ふと云ふものがあらうか？誰れか盛面する事が愉快だから盛面すると云ふものがあらうか？誰れか赤面せない事の不快を避ける爲めに赤面するものがあらうか？誰れか憤怒、悲哀、恐怖の爲めに或る行動をなす時其れによつて生ずる快感の爲に斯く行動するものがあらうか？此等の如き行動は此の如く行動せねばならない様に構造せられた所の神経系統の上に起つた刺激によつて挑發せられた生理的の力によつて自然的に斯く行動するのである。憤怒、愛情、畏懼の對象竝に落涙、笑ひの刺激は其の現實的に感覺機關に現はるゝと其觀念として現はるゝとに拘らず其れ自身に一種の衝動力を有するものである。心意状態の衝動性は實に其の終極的性質である。吾々は其の何故に然るやを知ることが出来ない。只吾々は其の或るものは他のものよりも多く衝動性を有し或るものは此の方向に或るものは他の方向に働くと云ふ

快不快は習慣的行動に關與せな

ことを知るのみである。故に快感不快感も事物の知覺及び想像も同様に衝動性を具へて居るので其の中の或るものが專賣特許的に之れを具へて居るものではない。だから如何なる場合に於ても行動ある毎に此は快感の顯在的要求及び不快感の現在拒斥によつて生じた結果だと稱して行動の原理を解釋し得たと思ふ人は是れ狹隘なる有機的迷信を免れない所の僻說學者である。快感の觀念が行動を惹起する以上は何んぞ他の思想も然らざる理あらんやだ。只其の如何なる思想が行動を惹起し居るかと言ふ事は是れ全く經驗によつて決定すべき事である。快感不快感が吾人の最初の行動に對して何等の關係をも有せない通り又吾人の最後の行動即最初は人爲的で後に習慣的となつた行動に於ても何等關與する所がないのである。即ち衣服を着脱し職業に従事し又は此を進め行く事の如き吾人日常生活の習慣的行爲は只稀に現はるゝ現實的事情の時の外は全く快感不快感に關係なくして行はるゝものである。是全

人は故意に不快に就くことがある

く觀念運動である。恰かも吾々は呼吸する事の快なるが爲めに呼吸するにはあらずして只單に呼吸しつゝあるが如く吾々は書記する事の快なるが爲めに書記するにあらずして只單に一旦之を始め且つ之を惹起すべき知的刺激の状態にあるために書記しつゝあるのである。知らず識らず机上にある小刀の柄に觸れた時誰か斯くする事によつて生ずべき快感を得るが爲めに又は此くせない事によつて生ずべき不快感を避けんが爲めに斯くなしたと主張するものがあらうか？此の如き場合に於て吾人は只此くなさねばならなかつたから斯くなすのみである。吾々の神経系統が丁度斯くなすべき様に解發したから斯くなしたのである。其他凡て何と言ふ目的もない所の純粹なる神経的不定の行動なるものには爾かく行動した事の何等の理由もないのである。今内氣で世間慣れない人が自ら好まない或る組合に加入すべく勧誘せられたとせよ。此の勧誘は彼自らに取つては嫌ふ所であらうが其勧誘者中

に彼れの知人あるが爲めに強迫され之を辭する口實なく自ら心中に之れを承諾するの不可なるを思ひながら遂に不本意的に之を承諾すると云ふ様な事があらう。然り此まで彼は此の如き迷惑に遭遇した事のない自治者であつた。此の如き不本意行動の事例は行動は常に必ずしも快感の觀念の結果でないのみならず又必ずしも善の觀念の結果とも云ふべからざる事を示すものである。善と云ふ觀念の中には快感と言ふ觀念よりも大に有效的なる多くの動機を含有して居る。然し吾人の行動が必ずしも快感の觀念によつて惹起せられない様に又必ずしも善の觀念のみによりて惹起せられるものではない。病的衝動病的強迫觀念は其の適切な例である。此の場合に於て吾人を欺瞞して行動を惹起しやうとする衝動は正に其の行動の悪い事の觀念自身である。此の時此の衝動の禁止を拒斥する時は此と同時に衝動も止む事がある。余が大學に居る頃或る一學生は學校の二階の上り附きの窓から投身して生命も危い程負傷した。余の朋友

なる他の一學生は毎日其の室よりして出入の際此の窓の側を通行しつゝ、あつたが一日卒然として自身も夫の學生に倣ふて投身しやうとの恐ろしい誘惑を感じた。彼はカソリック信徒であつたから此の事を其の監督者に告げた。機智に富んだ監督者は宜し投身せねばならぬとならば詮方なし……早く投身せよと言つた。夫れ限りで學生の慾望は靜定することが出来た。此監督者は能く病的心意を治療する法を知つて居るものと云つて宜しい。然し吾人は只單に悪い觀念並に不快な觀念其れ自身が時々行動を誘發するの力となる事の例として必ずしも病的精神の事に説き及ばさねばならぬ必要を見ない。身體の局部や齒に痛所ある時には何人でも只單に苦痛其物を生せやうとて時々其の痛所に觸れ又は齒を動かしたりするものである。或は嫌やな臭に出會する時には吾人は只單に如何程心地の悪い臭氣であるかを確知しやうとて之を嗅がずに置けぬ事などのあるものである。現に余は今日まで只其嫌惡すべき事其れ自身の爲めに或る

ゼームス氏の説を評す

耳障りする音語を反復しつつあるのである。余は其れを嫌悪するけれども之れを反復せずには居ることが出来ないものである。余輩は常にゼームス氏の所論の奇警、嶄新なのに感服して居るのであるが然しながら右に引用せる所の説に付ては多少の異論を呈出せずには居れないのである。請ふ、余輩をして其主眼點に付て述べさせよ。氏は本能及び情緒の例をとり來つて吾人の最初の行動に對しては快、不快は何等の關係も無いことを證明した。然り、赤兒の乳を吸ふのは滿腹後の快樂を豫想して、なく燕の巢を組むのは其の組み上げた後に平安に卵を産む愉快を豫想して、無いのと同じくゼームス氏の云はれた如く誰れも笑ふことの快なる爲めに笑ふものもなければ慙面する事の快なる爲めに慙面するものも無い、誰れも赤面せないことの不快を避けるために赤面するものも無ければ誰れも憤怒、悲哀、恐怖の爲めに或る行動を爲す時に其れによつて生ずる快感の爲めに斯く行動するのであるとするものは無い。

氏の説は敵に刃を貸すもの

事實上氏の云はれた如く此等の如き行動は此の如く行動せねばならぬやうに構造された所の神経系統の上に来た所の刺戟によつて挑發された生理的の力によつて必然的に斯く行動するのである。けれども余輩は此の此言を讀んで何故に氏が此の如き言説を試みたかを解することが出来ないのである。氏の此言を爲したのは氏の所謂早熟的哲學者が快、不快は行動の唯一衝動力であるとの説を駁撃する爲めであることは明かである。さりながら余輩は此の此駁撃が餘り適切でないと思はざるを得ないのである。否管に適切で無いのみならず却て敵に刃を貸すものとなつて居ると思ふのである。なせならば氏の所謂早熟的哲學者の云ふ所の衝動力と云ふ語の意味は普通に之れを解すると吾人の行動の起る原因的刺戟と云ふものを意味して居るので何にも行動した後に其結果として生ずるものを意識して云々すると云ふことを意味しては居らない。所で氏の列舉した所の笑ひとか慙面とか赤面とか其他憤怒、悲哀、恐怖などの爲めに爲す所

内に感情が
動くから外
に笑ひ、悲
むと云ふ様
な事がある
のだ

の行動と云ふものは其れが快樂をとり苦痛を避けるとを意識的に目的として居るとは云へないが、それ等の行動は内に起つた所の快不快の刺戟の爲めに惹起せられたものであるに相違なからう。誰れも故意に情的發表を作為して見ることを除いては内に何の快樂苦痛も無しに笑つたり赤面したり盛面したりするものはありはずまい。無論ゼームス氏などは笑ふからオカシイのでオカシイから笑ふのではないと云つて外形的發表の方を因として居るけれども此は餘りに外形的發表に重きを置き過ぎて因果を顛倒して居るものであることは一般心理學者の共に認めて居ることである。我々が笑つたり赤面したりするのは内に因となるものがあつて其れが生理的狀態に變化を及ぼして笑ひ、赤面など云ふ所の外形的發表を生ずるのである。成程笑ふと益オカシクなり赤面すると益耻かしくなると云ふやうに一旦發程した後は内心と外形とは互に因果となつて相影響することは事實であるけれども然し其發程の初めに立ちかへつて考へて見たら内

心の快苦が因となつて外形上に變化を呈したのであることは誰れも疑ふものは無からう。然り胃を害するとか肺を損ねるとか何とか生理的の變化が因となつて快苦が起り其快苦の爲めに外形に變化を及ぼすと云ふやうな場合には生理的變化が第一因となることは勿論であるが人に辱かじめられて赤面するとか滑稽談を聞て笑ふとか云ふやうなのは快苦が因となつて笑つたり赤面したりするのであることは誰れも疑はぬことだらう。否、前の場合即ち生理的變化が因となつて快苦が起る場合でも外形の變化即ち普通に云ふ所の行動即ち笑ひ、赤面などの起るのは快苦が因となるのであるから矢張り行動の因は快苦であると云つて差支が無いので唯吾人は快苦の起る原因には物理的の原因もあるし心理的の原因もあると云ふことを許せばよいので何れにもせよ行動の原因は快苦であるとせねばならぬ。要するにゼームス氏の云はれたやうに誰れも笑ふことが快樂であるといふことを豫め意識して其快樂を得るために笑ふものは無いこと

は明かであるが然しながら其笑ひと云ふ身體行動の起るのは心中に生じた所の感情が衝動となつたのであることは疑ふことは出来まい。さすれば情緒的表出は感情が因となつて居るものと云はねばならず隨て氏の快苦は情緒的表出には毫も關係せないのでの駁撃は大に事實に背いて居ると云はねばならぬ。然りゼームス氏が情緒的表出は快不快と少しも關係が無いと云はれたのは情緒的表出は快不快を目的として發表されるもので無いとの意味であることは余輩も之れを知つて居るが然しながら此意味にするとの説の駁撃にはならぬ。なせならば此早熟哲學者の言は前にも云つたやうに行動の原因は快苦であると云ふので行動は快苦を目的とするると云ふ意味ではないからである。

ゼームス氏はまた習慣的行動の例をとつて來て吾人の最後の行動即ち最初は人爲的で後に習慣的となつた行動に於てて快不快は何等關與する所

習慣が感情的要素に富むことは之れを變化せんとする場合に大不快を感じることによつて知ることが出来る

が無いものであると云ふことを主張した。此主張に對しても吾人は全然同意することは出来ないのである。元來我々の行動が一旦快樂の方に進行を始められた時には其惰力が次第に強くなるから後には最早蒸氣力(即ち快不快)が左程強くなくとも同一方向をとつて進行を續けるものである。此事は習慣的行動に付て見ると能く分る。が然しながら斯くなつて居る場合とても感情の力が無いのでは無くつて其れは智的要素と共に識域以下に潜勢力となつて居るのである。さればこそ善惡にかゝらず習慣となつて居ることを中止するとか變化するとか云ふことは大きな不快を起すものである。此不快の起るのは識域以下に潜んで居つたものが再び顯勢力となつて識域上に現はれるに因るのであらう。然り習慣は元來器械的となつた所の行動であるからして些細の刺戟によつて續々行動を始めものである其行動は殆んど全く無意識的に行はれるものであるから其れが快樂を得ることを意識して居らう等は無いけれども若し其習慣的行動が或

最初不快な事を繼續して習慣を作るとは他の感情の力による

る事情によつて苦痛を起すことがあつたならば最早今迄のまゝに其行動が繼續せられないのを見ると我々は習慣的行動も例令無意識的であると云へ矢張り快樂に向つて進行して居るものと云はねばならぬ。又習慣の生ずる始めに遡つて考へて見ると最初不快の起るにもかゝらず之れを辛抱して繼續することがあるのを見て吾人は必ずしも常に快樂に向て進行するもので無いと云ふものがあるけれども是亦皮相な見解である。喩へば酒や煙草は最初より人に快樂を興へるものではないので大概の人は初めには不快な刺戟を感じるのであるが其れにも拘はらずなせ、飲酒、喫煙を繼續するかと云ふと此は飲酒、喫煙以外に或は交際場裏に立つには少々飲酒、喫煙が出来ねば困るとか、人の飲酒、喫煙して居るのを見ると一寸意氣だとか云ふやうな他の感情や或は今是不愉快でも慣れたら大變快樂になるものであるとか云ふやうな豫想があるので、例令飲酒、喫煙其事は不愉快であつても之れを繼續するので繼續して居る中には次第に不快な刺

ゼームス氏の内氣の人の例は皮相の考へだ

激がなくなつて快樂ばかりが残るやうになるので遂には牢固として抜くことの出来ない習慣となるのである。我々は差當りの事柄其ものは快樂的でないといても其事柄に關聯した他の事柄が愉快を起すか或は苦痛を防ぐかの效能がある場合には不快な事柄にも喜んで服するものである。要は唯全體として快樂を多くとり苦痛を避けるのにあるのである。だから若し某の事柄にして全く他の事柄と感情的の關聯が無くて孤立して居つて然かも苦痛を起すものであつたならば我々は到底其れに服して其事をば習慣と化することは出来ないものである。又ゼームス氏が擧げた一例即ち内氣で世間慣れぬ人が自ら好まない或る組合に加入す可く勸誘せられた時の状態の説明は慧眼なるゼームス氏に似合はない皮相的の観想である。成る程彼れ内氣なものが組合に加入すること其事は好かない不愉快のことではあるが然し其不快は彼れが之れを謝絶する爲めに知人の感觸を害するの不快に比したら軽いのであらう。

内氣な人の
特性

若し其組合に加入するとが非常に大なる損害を蒙るとか或は不名譽を招くと云ふことが明かであつて、そして知人と彼れとの關係は左程深い關係があるのてなかつたならば如何に内氣なものとは云へ組合に加入しやう筈がない。であるから此場合に彼れ内氣な人の心中に於ては組合に入することに伴ふ不快と知人の勧誘を謝絶することに伴ふ不快とが相争うて遂に彼れは比較的に不快の少い組合に加入することの方に就いたのである。若し組合に加入することの方が知人の勧誘を謝絶することよりも遙かに不快なものであつたならば如何に内氣なものだからとて組合に加入しやう筈はない。元來内氣な人の特色とも云つてよいことは人から勧められたことを謝絶するなど、云ふことを非常に苦とすることである。世間慣れたものなれば何の苦もなく謝絶し得ることも内氣なものは非常に煩悶苦惱するものである。其煩悶苦惱が強いので好かないことも遂には勧誘に随ふのである。所が世慣れたものは例令知人から強て勧誘さ

不本意的行動は單に其事のみを見ては眞因は分らない

病的衝動や病的觀念には強勢な感情結合す

れても之れを謝絶することをば内氣な人のやうに甚だしく苦とせない。苦とせないから自分の好かないことには加入せないのである。さすれば兩者何れの場合に於ても常に比較的に苦の輕少な方に就くことは同一であつて唯兩者の相異なる點は其苦の大きな事柄が違ふのみである。此事は常に右の事例ばかりでなく一切の不本意的行動に應用が出来る論であると思ふ。ゼームス氏のやうに單に差當りの嫌いな事柄だけをどつて云ふことは大に心的事實に相違するので例令差當りのことは當人に不快を與へることであつても其不快に勝る他の不快若くは快樂があつて當人をして其不快な事を敢てさすこととは一切の不本意的行動に於て常に見る所のことである。

ゼームス氏はまた病的衝動病的強迫觀念の例を引かれたが然しながら余を以て之を見ると元來病的衝動や病的強迫觀念と云ふものは其れが病的であるからに異常な強勢の感情が結合して居る。そこで其衝動其觀念に

随つて行動することは他人より見たら單に不快の方に趨き居るやうであるけれども然し病者其人になつて見ると其不快の方に趨くことは之れに趨かないやうにすることよりは爲し易いのである。通常人であれば避け得られる馬鹿らしいことでも病者の悲しさには其れが避け得られないのである。之れを避けることは之れに趨くよりも困難なのである。其不快な方に趨かねばならぬやうに餘儀なくされる所並びに之れに趨くよりも之れを避けることが困難に感ぜられる所が病者の病者たる所以であつて見れば其比較的困難な方を避けて容易な方に就くのは矢張り人間の苦の少い方に就て苦の多い方を避けると云ふことを證明して居るでは無いか？少くとも内に強勢な感情があるので其れに強ひられて種々病的の行動を敢てするので感情が動機であることは疑ふ可からずである。ゼームス氏の引例した所の大學生に就て云つて見ると彼れは投身すると云ふことが投身すまいとすることよりも容易に感じたのであるが然し彼れは全

ゼームス氏が、わざと痛みを生ずるに云ふ例の如きは差當り當面の事だけしか

くの精神病者で無かつたから一方には投身するなど、云ふことは馬鹿らしいことであると云ふ感じがあつたに違ひない。さればこそ之れを其監督者に告げたのであらう。少くとも彼れが投身せねばならぬ様に想はれて仕方が無かつたのは彼れをして此く想はせる強勢な感情が内に燃わたに違ひない。即ち此場合に於ても觀念が動機となつて居るのではなく矢張り感情が動機となつて居ることだけは動かす可からざることである。ゼームス氏はまた身體局部、齒などの痛所にわざと觸れることや、嫌やな臭ひのするものに、わざと近付いたりする事などの例を挙げたが余輩は此等の例に付ても前と同一の論法で氏の觀察の皮相的である事を證することが出来ると信するのである。則ちゼームス氏は差當り當面の事だけしか眼中に置かないから右のやうな論をすることになつたのである。身體の局部や齒に痛所があるときに其痛所に觸れたり齒を動かしたりすることのあるのは事實である。けれども此は決して氏の云はれるやうに只單に

眼中に置か
ないから異
な結論に達
したのであ
る

苦痛其物を生ずることを唯一の目的とするものではない。或は實際に位痛むのであるかと云ふことを試みやうと云ふ情だとか或は痛みに疥癬を起して其疥癬を醫する爲め本人は無論之れを醫することを意識して居るまいが然し實際は醫することになつて居るとか云ふやうに他の情が手傳うて其行動を爲さしめるのである。若し此等の情が手傳ふことが全くないか或は其痛みが非常であつて此等の情に打勝つならば誰れも故意に痛所に觸れたら痛む齒を動かしたりするものはなからう。又イヤな嗅ひと想ひつゝ之れを嗅いて見るとか耳障りの音語を故意に反復して見るとか云ふのは前者は悉く好奇心の爲めであるし後者は始めは好奇心によつて反復したのが後には無意識的に幾分の嗜好を生じたのであらう。左もなくとも實際に付て色々考へて見たら何か或種の感情があつて其イヤなことを餘儀なく爲さしめて居るのであると云ふことが理會せられるであらう。否余は常に自ら此等のことに注意して居るが是れ迄一度もゼーム

余の主張の
概括

快感の觀念

ス氏のやうに他に何のわけもなしにイヤなこと、苦痛なことを敢てする場合を見出さないのである。

以上、余輩はゼームス氏が快不快に關與せない行動として列舉せられた所の各種の場合に付て余輩の所見を吐露したのであるが余輩の所論は之れを要するに第一に我々の行動は彼の物理的生理的のものを除いて心理的のものには皆直接にか間接にか將た意識的にか無意識的にか常に快樂に就いて苦痛を避けるか或は大快に就いて小快を棄てるか或は大苦を避けて小苦に就くかを目的とするものであること第二に現在の状態に付ては例令然る傾向が認め悪いやうなことで進化する行程を辿つて見ると然ることで明かなこと第三に我々の心理的行動は常に某種の感情が動機となつて生ずるものであること換言すれば行動の動機は常に感情であつて單に觀念が動機となつて行動を生ずることは無いものであると云ふのである。今一つ附言して置きたいことはゼームス氏は快感の觀念が行動を惹起す

他の觀念との差、

る以上は何んぞ他の思想も然らざるの理あらんや」と云はれたけれども余輩は同じく觀念とは云ふものゝ快樂の觀念と他の思想思想も觀念の中にあるとは相異なる點があると信することである。ゼームス氏は快感の觀念も他の觀念も其觀念たる點に於ては同一であるからして快感の觀念が行動を惹起する以上は他の觀念とても行動を惹起し得ざる理由は無いと考へられて居るやうである。が余輩は其處に異見を懐くものである。爰に一人の學生があつて櫻花爛熳の春四月、人々の春宵一刻價千金と浮かれ遊んで居る時に卒業後の錦衣歸郷の快樂を目的として孤燈の下に苦學して居るとせよ、彼れは未來に得られる所の快樂を目的として現在の苦痛を忍んで居るとして善からう。が然かしながら斯る場合に於て彼れ學生の現在は苦學の苦ばかりが現實にされて居るのみであるか、詳言すると錦衣歸郷の快樂は未來に屬する所の快樂であつて未だ現實にされて居らないものであるから現在の場合には單に觀念として存在する許りで其感情と

して存在するものは苦學の苦ばかりであるかと云ふとゼームス氏は恐らく然りと云はれるだらうが余輩は然らずと云ふのである。若し斯かる場合に於て錦衣歸郷の快樂は單に觀念たるに止まつて毫も感情を有して居らないならば其は到底苦學の苦に打ち勝つとは出來ないので隨て彼れ學生は他の一般人と同じやうに櫻花春色に引かれて春遊を恣にするであらう。然しながら斯かる場合は之を事實に徴して見ると決して快樂の觀念ばかりではなくして快樂が實現して居るのである。錦衣歸郷の未來の快樂に對する憧憬渴仰は能く現在の苦痛を忍ぶに足るだけの快樂を現在に供給して居るのである。想ふに彼れ學生は遊志の勃々として起つて讀書の苦に堪へないやうになる毎に恐らく幾度ともなく錦衣歸郷の快樂を浮想して其れで以て勃々たる遊志に打ち勝つて讀書の苦を忍び得て居るのであらう。其錦衣歸郷の快樂の浮想は決して單なる觀念ではなくして現在に於ても一種の快樂を供給して居るのである。若し錦衣歸郷の快樂は

單に觀念たるに止まつて居るならば其れは彼の自らも到底現實にされ得可からざることを熟知して居る所の空中樓閣と同じことでも、現現在の苦痛に打ち勝つことは出来ない。其能く打ち勝つことの出来るのは錦衣歸郷の快樂の觀念は現在に於ても單なる觀念ではなくして多くの快樂を供給して居るものとせねばならぬ。然り、學生の苦學は錦衣歸郷の外に或は落第の耻辱だとか或は卒業後の事業だとか其他色々の感情によつて忍ばれるのであらうけれども何れにしても未來に得る快樂の觀念若くは現在の苦に勝る苦痛を免れやうとする觀念は現在とでも單に觀念たるに止まらないうで必ず或種の感情を現實にして居るものであると斷言することが出来る。此事は未來に得べく考へられた一切の快樂の觀念に等しく適用されることである。此見地よりして余輩は快樂の觀念は他の乾燥な觀念とは大に相異なる所があると云ふのである。此理よりして快樂の觀念(若くは苦痛の觀念)は能く行動を惹起するけれども他の單なる觀念は行動

目的觀念に感情の結合したものが動機だ云ふ説

を惹起することが出来ない。若し其れが行動を惹起しやうとすれば何か感情が結合して居て其感情の力によらねばならぬと云ふことが推演されるであらう。

又動機は目的の觀念と感情的要素との兩者を具へたもので前者は即ち運動の理由で後者は即ち衝動の弾力である。此の二つのものが相集つて動機となつて吾々の意志を動かすものであると云ふ説もある。是れはヴント氏などの唱へる説で頗る廣く行はれて居るが余輩は寧ろ動機の動機たるべき性質は此の中の衝動弾力即ち動學的要素で即ち感情的の要素であるとした方が宜いと思ふのである。のみならず余輩は吾々に種々の慾望があつて其れが相争つて居る最中に於て其の中の何れかを勝たしめて執意たらしめるところの感情のみを動機と云ふことが便利であると思ふのである。爰に甲と乙との慾望があつて其れが同時に同一の人の上に争闘するとせよ。既に其れが争闘するからにはそこに甲乙の各々は目的の觀

念があると同時に感情的要素がある。其の感情的要素の力を以て互に争つて居るのである。若しも此の場合に於て甲若しくは乙の感情的要素が非常に強い場合には初めからして餘り烈しい争闘が起らないで何れか一つの方に定つて仕舞ふ。其のやうな場合には其の定つて仕舞つた方の慾望即ち執意となつた慾望を形成して居るところの感情的要素を指して動機と云つて宜からう。之れに反して甲乙二個の慾望の感情的要素が其の勢力に於て殆んど互角の勢を呈して居ると云ふやうな場合には夫れ自身のみでは何れも勝ちを制することが出来ない、出来ないからそこで何れにしたものかと當事者は熟慮する。熟慮して居る間に或は甲を助けるものも起つて来るし或は之と反對に甲を妨げるものも起つて来る。或は又乙を助けるもの或は又之れを妨害するものも起つて来る。そして最後に或る種の感情が起つて甲乙何れにか定めたとするならば余輩は其の最後の感情を以て動機と稱するのである。だから余輩の動機と稱するものは普

動機には覺
的の感情
的の感情操
的の感情操
的の感情操
る

動機となる
感情が色々
組み合つて
一團となる
こともある

通に云ふよりは少しく意味が狭い。

吾々の感情には覺的の感情もあれば情緒もあり又情操もあるからして従つて動機にも覺的のもあれば情緒的の動機もあれば又情操的の動機もある。炎熱が甚だしいから頻りに團扇を使ふと云ふやうな場合には覺的感情が行爲を惹き起したのである。相手が無禮なことを言つたから腹を立て、罵詈雑言したとすれば憤怒の情緒が動機となつたのである。國家の危急存亡の秋に際して居ることを感じて命を輕んじ身を忘れて其難に趣かんとするものは愛國の情操が動機となつたのである。無論實際の場合に當つては動機たるべき感情は色々組み合つて以て一團をなすことも甚だ多いので單純に或は饑渴とか或は恐怖とか或は同情とか云ふ一つの感情のみが執意の原因となるには限らない。然り兎に角一團となつて執意の原因となる場合にはそこに色々な感情が組み合つて居るものも之れを一つの動機と見て差支へないのである。

企圖は執意的行動其の物を指し志向は其の目的を指す

志向は招致せんと企圖する或事物を指す

志向の種類

一、近志向と遠志向

動機のことを明かにするには志向と云ふことに付いて少しく述べねばならぬ。志向と云ふ語は企圖と云ふこと、其の意味が近い。然し企圖の方は寧ろ執意的行動其の物を指すし志向の方は吾人の執意的行動の向ふところの目的を指すやうである。此の意味で志向を解釋すると志向と云ふのは吾々が招致せんと企圖するところの或る事物を指すと云つて宜からうところで吾々が企圖するところのものと云へば甚だ單純なこともあるし又非常に複雑なこともある。たとへば家屋の建築、鐵道の敷設の如き或る外界の目的即ち物質界の何事かの變更を成就せうと望むこともあるし又壓制政府の顛覆、貧富平等などの如く自己の生存する社會的組織の變更を望むこともある。今左に志向の種類を述べて見ると。
第一に吾々は行動の近志向と遠志向との間に差別を立てることが出来る。例へば憐れなる少女の外人の妾として賣られんとするを見て一人は人道の爲めに之を救ひ一人は少女の容貌の美なるが爲めに之を己れの妾と

二、外志向と内志向

爲さんが爲めに救ふとすれば此の二人の近志向は共に少女の外人の妾に賣られやうとするのを見て之れを救ふことにあるが然し其の遠志向より言つたならば一人は人道の爲めにし一人は自己の肉慾の爲めに之れを救ふのであるから甚だ異なつて居る。
第二に志向は又之れを外志向と内志向とに分けることが出来る。アブラハム、リンコルンは曾て友人と共に騎馬旅行をして途に一疋の豚が溝の中で苦んで居るのを見た。初めは其れを見たなりで數町を行き過ぎたが態々歸つて來て其の豚を溝から救つた。そこで友人はリンコルンの同情に富んで居ることを賞讃した。リンコルンは答へて否余は寧ろ豚の苦んで居るのを見た爲めに心に不愉快で堪へないから其の自己の心中の不愉快を除く爲めに豚を救つたので豚の爲に豚を救つたのではないと云つた。此の場合に於て豚の苦んで居るのを助けると云ふことは外志向であつて其の内志向は彼れ自身の不快の感情を其の心中から除かうとすることに

三、直接的志向と間接的志向

あると言つて宜からう。
第三に吾々は直接的志向と間接的志向とを差別することが出来る。例へば都會の繁華なる市街に電鐵を架設せうとするところの直接的志向は素より交通の便宜を計ると云ふにあるが然かも其の直接的志向を遂する爲めには或は道路擴張の爲めに氣の毒ながら民屋を折斷せねばならぬこともあるし或は人力車夫に迷惑をさすと云ふこともある。此の民屋を折斷するとか車夫に迷惑を掛けるとか云ふことは電鐵を架設するが爲めには初めから豫算の中に入れねばならぬことでは是等は即ち電鐵架設の間接的志向であるとなさねばならぬ。

四、意識的志向と無意識志向

第四に吾々の志向には意識的の志向と無意識的の志向とがある。即ち行為者自身が明瞭に認識せる志向と認識せない志向とがある。例へば戦陣に於ては天皇陛下の爲めに絶大の忠を盡さんとするところの志向も知らず識らず名譽金鵝勳章と云ふやうな無意識的志向の爲めに影響せられる

五、形式的志向と實質的志向

こともある。

第五に志向は又之れを形式的と實質的とに分かつことが出来る。爰に謂はゆる實質的の志向と云ふのは格段なる結果即ち實現したる或る種の事實を指すのである。又形式的志向と云ふのは其の事實の中に包含せられて居るところの原則を指すのである。古今未曾有の大軍を起して敵國を懲らさうと主張するところの實質的志向は縦しや凡べての人同じとするも其れを主張する主義原則には色々ある。或は世界人道の爲めに主張するものもあるし或は日本の東洋に於ける覇權を確立せうとする主義から打算するものもあると云ふ風に其の形式的志向は色々違ふ。

志向は動機より範圍が廣い

右に述べた各種の志向に付いて知ることが出来る通り概して云ふと志向は吾々の動機と云ふよりも其の範圍が廣大である。前に述べた遠志向、直接的志向、形式的志向などは多く動機となるものであるが近志向、間接的志向、實質的志向は動機となることが少い。又動機は外志向たることもあれ

志向は目的
觀念の側か
ら動機は感
情の側から
脱かれる
目的觀念と
感情との全
體説から見
たる動機と
志向

ば内志向たることもあるし又意識的の志向たることもあるし無意識的志
向たることもある。尙ほ余輩が前に述べた動機説に對して云ふと志向の
方は寧ろ目的の觀念の側から脱かれるし動機の方は感情の方から脱かれ
るのである。此の點よりすれば志向と動機とは根本的に違ふとも云へる
のである。無論動機が目的の觀念と感情とから成つて居ると云ふ説から
云へば二者の間には類似の點は甚だ多くなる。唯此説からいへば動機
の方は行爲者が自己の目的とせる部分即ち其の實現に由つて自己の満足
を得る部分のみを指し志向の方は自己の満足するものであると否とに拘ら
ず其の行動をなすに當つて先見豫定するところのものは凡べて之れを指
すのであるから其の範圍が廣い。例へば敵國外患を防ぐ爲めに戦争する
と云ふ場合に當つて多くの壯丁を犠牲にすると云ふことも覺悟せねばな
らぬが其れは志向であるけれども動機とは言へない。

第五章 自由意志

第一節 自由の意義

自由意志の問題は近世に至つて諸學者の最も注目するところとなつたが
殊にダーヴキンの進化論が學者社會に眞理と認めらるゝに至つてからは
一入喧しくなつた。無論其の以前といへども此の問題はホップススピノ
ーザ其の他の學者に由つて盛んに論辯せられたのである。そして此の問
題は常に歴史的研究の興味があるばかりではなく現今に於ては個人的及
び社會的事情に對して實際上よりも頗る緊要なものであると云ふことが
明かとなつた。世人が普通に考へるところに由ると吾々が或る行爲を賞
讃若くは擯斥し或る行爲を正當とし若くは處罰するのは只其れが吾々の
自由意志から發現したものに限るので苟も自由なる行爲者の爲したとこ
ろの行ひでなかつたならば之れに向つて善惡正邪の批評を爲すことを得

自由意志の
問題は人生
に重要な關
係がある

ないものとして居る。法律上に於ても強迫されて爲したところの行爲或は無故意の行爲は通例之れを處罰せないことを原則として居る。狂者又は幼年者の行爲も刑法上では罰せられないのである。なせならば是等のものに對しては到底正邪善惡の評価を爲すことが出來ないからである。奴隸や其の他之れに類するものは他人の意志に服從して行動するのであるからして自由ではない。従つて是等のものゝ行爲に對しては其の責任は彼等自身には存せないで其の主人又は監理者に存するのである。吾々の反射運動や自發運動なども自由でなければ又吾々の肉體的或は無意識的行動も自由ではない。何とならば是等は吾々の指揮命令の及ばないところであるか或は吾々の選擇の自由のないことであるからである。従つて是等の行動は其の結果の如何に拘らず非難賞讃さるべきものではない。要するに此の事は自由なる動作でないこと云ふときの意味は一切の道德的行動を引き去つた部分を云ふもので彼の物理的運動と同じく善惡正邪

自由と云ふ語の意義

一、無羈絆の自由即ち外部的束縛から免れること

の道德的判斷を下すことの出來ないものを指すのである。されば若し此の自由意志なるものを否定する場合には其の關係の及ぶところは甚だ廣く社會一切の事柄は勿論自己保存の行動に至るまで其の影響を受けるのである。斯くの如く自由意志の問題は重要な關係を有して居るものであるからして之れが研究は頗る慎重でなければならぬ。

自由と云ふ語の意味は時と場合に由つて色々に用ひられるのであるが今之れを大別して見ると凡そ三種の意味となるやうである。

第一は無羈絆の自由と云ふ意味で此は専ら外部的の束縛から免かれること云ふことである。外部的束縛と云ふのは主として物理的及び社會的の束縛を指すのである。此の社會的束縛と云ふ中には政治的の束縛も含んで居るのである。若し人が是等のものゝ爲めに其の行動或は其の選擇すべき場合を束縛せられなかつたならば彼れは無羈絆の自由を有して居ると云ふことが云へるのである。奴隸又は牢獄の中に投せられたものは此の

此の自由は吾々が自然の慾望に従つて動作するところの

種類の自由を有せないのである。彼の發狂者が座敷牢に入れられたり又は傳染病者が避病院に入れられて交通の自由を有せないのも亦此の無羈絆の自由を有せないと云ふ部類に屬するのである。無論此の無羈絆の自由のないものでも思想の自由のあることは明かである。如何に手枷足枷を入れられて居る罪人も己れの思想だけは如何様にも働かせ得るのである。又普通に無羈絆の自由を有して居ると稱せられる人々でも事實上に於ては全く無羈絆と云ふ譯には行かない。なせならば苟も吾々が地球上に住んで居る以上は各種の物理的の原則にも従はねばならず其の他地理的狀態や政治上の制度經濟上の事情などの爲めに直接間接に束縛されるもので若し強いて是等の勢力に反抗する場合には常に不愉快不利益を招くばかりではなく遂には其の身命をも犠牲に供せねばならぬ。されば通例無羈絆の自由と稱するもの、意味は吾々が其の自然の慾望に従つて動作するところの制約のみを意味するのである。然り此の無羈絆の自由は最

制約のみを意味する

政治的に用ひた自由の意味は権力ではなくて特權である

二、自發的

も多く政治上に用ひられる語で此の場合に於ては専ら法律命令などの作用に由つて人々の行動の束縛せられないことを指すのである。此の意味に於ては誰れでも絶對的に自由なものはないので必ず或る種の束縛を蒙るものである。勿論法律的命令は必然的に人をして一定の行動を爲さざるを得ざらしむるものではなくして是れに従ふと従はないとは其人の意志に任すべきものではあるが然し人若し一たび之れに反抗して動作したならば當然何等かの不快苦痛の結果を受けなければならぬ。されば此政治的に用ひられた自由の意味は権力ではなくして特權である。委しく言へば自由に或る場合を選択する能力ではなくして或る刑罰を受けるとなしに動作するところの特權である。例へば何人も他人の物を盗んだり他人を殺害するところの力は之れを有して居るけれども然も窃盜殺害して刑罰を免かれるところの自由は有して居ないのである。

第二は自發的の自由である。自發と云ふことは主觀的原因と云ふことを

の自由即ち吾々の行動は吾々自ら起すとするもの

物理的の運動は必然であるが人間の行動は我れ自らの發動である

意味して居るもので吾々の行動は吾々自ら起すものであると云ふことである。故に此の意味に於ての自由と云ふのは自分が之れを意識するとせないと拘らず單に自働すると云ふほどの意味が即ち機械的運動に反對した意味を有して居るのである。凡べての物理的運動は必然的である。なせならば運動をなすつゝある物體其の物に自ら運動を起すところの能力を有して居ないからである。若し一物體が或る種の運動を爲す場合には其原因は必ず外部に存在して居る。されば物體の運動及び其の運動の傳達は畢竟するに物體其の物の所生ではなくして外部に存するところの他の物體から受けたものである。故に一物體が他の物體上に働くときは必ずそこに或る一定の結果を生せなければならぬ。然るに人の動作は斯くの如きものではなく何等の外界の刺戟がなくとも自ら能く或る種の行動を爲し得るものである。かゝる場合に於ては其の行動は素より我れ自らの發動だと言はなければならぬ。纏じや外界の刺戟に由つて動作

自動的本能的行動は自發運動の初階級である

する場合でも其の趣きは機械的行動とは甚だ相異なつて居つて其の行動の主體に歸すべき他の何等かの屬性があるのである。例へば吾々が火事を見て其の鎮火の状態を見やうとて走るときは行動と一つの球が他の球に打たれて動く結果との間には大なる差別がある。前の場合に於ては火事は素より吾々が疾走する動機であることには違ひないが其疾走を初めたところのものは即ち吾々自身である。然るに一つの球が他の球に打たれて動く場合には其の乙の球の動くのは甲の球の爲めに打たれたからである。乙の球の運動は自發的ではない。此の意味よりすれば自發と云ふことは惰性と反對の力を指すものと云つても宜からう。即ち或る種類の行動を開始し得べき能力を云ふのである。そして自發にも色々階級がある。彼の自動的本能的行動は恐らくは有機生活に於ける自發運動の初階級であらう。是等の運動も外界の力に由つて動かされるものではなくして確かに有機組織内に起る刺戟に起因するものである。然しながら余は

此の種の行動に付いては敢へて爰に論ずる必要を見ない。勿論吾々の意識せない場合に於ても自動の作用はある。彼の人の意識的動作をなすとは之れを承認するけれども然も實際上其の人がなしたるよりも他の行動を爲すことが出来るであらうと云ふことを否定する人々でも換言すれば人は實際爲したことよりも外のことは爲し得なかつたものであると云ふ人々でも今爰に論じて居る自動と云ふことの事實は之れを承認するのである。人は凡べて彼れ自らの執意の原因でなければならぬ。然らざれば其の執意は彼れ自身の執意ではないと云ふことになる。今吾々が扇子を開いて涼風を取るとせよ。吾々に其の行動を起させるところのものは扇子及び其の他の外物ではない。何となれば若し此の行動を起させたところのものが扇子又は其の他の外物であるとしたならば其の扇子又は外物が吾々の身邊に存在して居る限りは吾々をして常に同一の行動を爲さしめねばならないのであるのに事實上決してそんなことはない。之れと

同一の事情の下には同一の行動をなすこと云ふ同一の事情とは主観的の事情を指す

同様に小僧が金銭を盗むとせよ此の行動は小僧夫れ自身の心情に原因するもので決して外物の行動に起因するものではない。若し外物の行動に起因するものであるとしたならば小僧は同一物に接近する毎に常に窃盜の行爲を敢へてすべき筈である。然かり人間は同じ事情の下には同じ行動を爲すものだ云へないことではない。然しながら其の所謂同じ事情と云ふものは決して行動者の外界に於けるところの事情の同一を云ふのではなくして行動者の主観的事情の同一を指すものだ云はなければならぬ。なせならば之れを事實に徴して見ると外界の事情が同一であつても人々の行動は相異なつて居るからである。だから各種の行動は行動者の主観的事情並びに性質に起因するものとなさねばならぬ。要するに自發と云ふことは其の意識的なるは無意識的なるに論なく自開的のもので他開的のものではない。換言すれば惰性的のものに對する自動的のもの機械的發動に對する心的發動のもの、名稱である。

三、選擇の自由即ち種々の場合から其の一を採用する能力

此の種の自由がなければ責任や刑罰は成立せられないとせられて居る

第三は選擇の自由である。選擇と云ふのは二箇以上の物の中で其の一のみを**選ぶ**ところの能力即ち行爲の種々の場合を思慮分別して其の一を採用するところの能力を云ふのである。通常の場合に於ては此の種類の自由がなかつたならば責任及び刑罰の説は成立せないものとせられて居る。即ち責任及び刑罰を感ずるには行爲者に於て自ら其の場合を選択するの力即ち其のものが現に行つたところの行爲以外の行ひをも爲すことが出来たのであると云ふ推定がなければならぬ。故に若し此の種の自由がなくして現に爲した如く爲さざるを得ないで爲したのに過ぎなかつた場合には敢へて責任と云ふものがあるべき筈がない。又犯罪人に刑罰を加へるのは之れを加へて置くことと將來に於て前の如き行動を再演さぬに豫防することが出来ることとの信憑があるからである。故に此の點に關する問題は若しも事情が同一であつたならば果して此の思慮的の選擇の力なるものがあるかないかと云ふことである。通常人が最も多く自由意志

自由の意味の特殊的關係

と稱するところのものは此の選擇の意味に於ける自由意志で前の無羈絆の義でも又は自發の義でもない。以上述べたところの種々の自由の意味の間には皆、特殊の關係がある。第一に無羈絆の自由と云ふのは外部の束縛からの自由を指すものであるが選擇としての自由は敢へて必ずしも此の無羈絆の自由を有せない。若しも此の選擇の自由なるものが吾々の心理的事實として存在して居るとするならばそれは直接には毫も外部の束縛の爲めに影響せられないものである。ソクラテスや吉田松蔭や其他幾多の志士は牢獄中に投せられたが然し命を棄て、義を遂げると云ふ如き選擇は自由に爲されたではないか。無論間接的に云つたならば外部の束縛は其人の精神に影響を及ぼしやがて又選擇にも影響を及ぼすともあるものである。第二に自發は前にも述べた通り自主的原因の義であるが選擇は此の自發に加ふるに選擇能力を以てしたのである。だから選擇の中には必ず自發の意味を含んで居るけ

選擇の自由は思慮に於て明かに認められる

責任は自主的原因の外に選擇の自由が加はつて成立せざるべし

れども然し自發は必ずしも其の中に選擇を含んで居ない。人が現に爲せるよりも他の事を爲し得たであらうと云ふ場合には勿論其の行動は彼れ自ら其の原因でなければならぬ。然も之れに反して彼れ自らが其の原因であつたとしても必ずしもそこに選擇と云ふことが存するには限らない。此の選擇の自由は思慮と云ふ現象に於て最も明かに認めることが出来る。此の思慮と云ふ中には行爲者が選擇的能力のあるなしに關せず二箇以上のもの、中で其の一つを選擇すると云ふ意識を有して居ることは明かである。是れ即ち選擇の自由に關して自然に起るべき觀念を表はしたものである。通常に於ては責任なるものは自主的原因と云ふの外尙ほ此の選擇の自由があつて爰に初めて成立し得べきものとせらるゝのである。例へば本能に従つて行動するものは素より是れ自主的原因ではあるけれども吾々は之に向つて責任を歸することは出来ない。燕が其の巢を軒端に造ればとて、赤兒が母の乳房を吸へばとて吾々は之れに向つて道徳

通常自由意志は選擇の自由を指すから自由に関する議論は此の種の自由に限る

上の責任を歸することは出来ない。故に行動の自主的原因と云ふこと、理由のみでは未だ其の人をば合理的生類だと云ふことは出来ない。人の合理的生類と云はれる所以のものは此の自主的原因の上に尙ほ且つ選擇の自由の能力を有する場合である。普通に自由意志と稱するところのものは實に此の選擇の自由を指すのである。委しく言へば無羈絆、自發選擇の三者は皆責任の制約として認定せられ又選定中に含んで居るところの選擇の能力は自由を表示すべき要素として承認せられるのである。以下に論せんとするところの自由に關する議論は詰り選擇の自由のみに關するものである。なせならば第一の無羈絆の自由と云ふ意味に關しては人は必ず或る種の物理的及び社會的の制裁を蒙るもので否蒙るべき筈のもので此の點に關しては何人も其の幾分か不自由であると云ふことを疑はない。従つて此の點に關しては爭論のあることはない。第二の自發としての自由の意味に於ても何人も吾々が其の自由であることを否定するも

執意に關する諸説の表

のではない。かくして残るところのものは即ち選擇の自由のみである。素より此の自由は責任と云ふ觀念を構成する唯一の條件ではないけれども是れが自由意志の唯一の論點であると云ふことは疑ひない。

第一節 執意に關する諸説



一、決定論即ち執意は因果の關係

吾々は選擇の自由があるかないかと云ふことに付いては右の表に示したやうな種々な説があるのである。先づ其の決定論の主張に由ると吾々の執意は凡べて一定の原因に由つて惹起せられるものであると云ふのであ

に従ふと云ふ説

る。或る意味に於ては決定論と云ふ中には自由意志の論は包含せられな
いともあるが然し爰に云ふ決定論の中にはカントやライブニツ氏などの
唱へた議論も這入るのである。だから爰に決定論と云ふのは不決定論に
反對なる學説を意味するのみではなくして執意は因果の關係に従ふもの
であると云ふことを主張する學説である。だから自己の品性が吾々の執
意を決定すると云ふ自由論も亦此の中に這入るのである。要するに決定
論は執意は因果の關係に従ふと云ふことに於て其の特色を表はすもので
其の原因の種類は何たるかは別問題である。此の決定論を大別して客觀
的決定論と主觀的決定論となす。客觀的決定論と云ふのは一名之れを物
理的必然論とも稱するので其の主張に由ると吾々の執意作用は彼の機械
的運動の如く外部より開發せられるものであると云ふのである。凡べて
の物理的運動は外部の刺戟或は勢力より生ずるもので決して主體内より
起るもの若しくは自發的に起るものではない。彼の甲の球が乙の球を動

(イ)客觀的決定論

(ロ)主観的決定論はこれには二種ある

精神的必然説

かすとか木石が將葉倒しになるとか乃至有機生活の發展とか云ふものは皆之れ必然的の事件である。一執意は勿論我が主観内に於ける作用ではあるけれども然し是れ畢竟脳髓の作用に外ならない。そして脳髓其の物は執意以外のもので只機械的原因にのみ従ふものである。かゝる見解からすると吾々の意志は不自由なものと云はねばならぬ。是れ客観的決定論の主張である。之れに反して主観的決定論には吾々の執意は自發の結果だと云ふのと選擇の結果だと云ふのとあつて選擇的決定論と自發的決定論との二つに分かれる。一選擇的決定論は客観的決定論の如く執意が或る一定の原因を有するものであると云ふことは之れを許容するけれども然し其の原因は客観的決定論者が説く如く動作をなす主體其の物以外にあるとは見ないで主體夫れ自らであると云ふのである。此の説に従ふものも亦吾々に選擇の自由があると云ふことは許さないで吾人の行動は所謂最強動機に従つて動されるのであると見るのである。即ち此の説は凡

自由説

二、不決定論 (イ)自發説即ち原因なき執意を主張するもの

べて人間なるものは自己の品性と一致して行動するものであると云ふのである。言ひ換へれば主體は夫れ自身の種々の行為を認識するけれども其の實際行はるべきものは其の主體の性質に従つて只一つあるばかりでそして其の主體が行はんと欲するところの行為を豫知することが出來ないのは全く品性を組織するところの複雑なる事情を詳かにすることが出來ないからであると云ふのである。之れに反して自發的決定論即ち自由論を唱へるものは吾々は實際の場合に於て二箇の場合を選択することが出來るのであると主張するので従つて此の論は物理的必然説とも精神的必然説とも反對するのである。次ぎに不決定論は前に表示した如く三つに分れる。其第一の自發説と云ふのは要するに原因なき執意を主張するので此の説は執意は何等かの原因に由つて惹起せられるものであると主張するところの説に反對するところの不決定論である。ヒュームやスペンサー氏などは此の派に屬する

(ロ)自動説
即ち動機なき
執意を主張
するもの

(ハ)不偏論
即ち不偏な
執意を主張
するもの

學者^レ其の説に由ると若し吾々が自由なる以上は其の條件として吾々の執意は何等の原因をも有すべきものではない。されば此説に由ると執意なるものは原因のないものであるか或は因果律に無關係なものであると主張するものである。又第二の自動説と云ふのは動機なき執意の主張をなすもので此の派の學者の言に由ると若し執意が動機に由つて決定せらるゝものであるならば必ずや其の最も強盛なものに従ふであらう。若し最も強勢な動機に由つて決定せらるゝものとしたならばそこには選擇の自由と云ふものは無い筈である。だから執意が自由であると云へば其れは必ず動機がないと云ふことを意味せねばならないと。第三の不偏論即ち不偏なる執意を主張する説は第二と能く似て居るけれども然も自由行為は必ずしも動機を排除するものではないと云ふことを主張するものである。其の説に曰く若し爰に外部の事情が全く同一であると假定したならば其れに對する人々の動機は又従つて同一なるべき筈である。然るに

自由意志論
は畢竟選擇
的能力の有
無論に歸着
する即ち自
由論と精神
必然論とが
何れが眞理
なるかに歸
着する

自由意志に

尙ほ事實上に於ては其の二つを採つて他を捨てるか若しくは兩者を合せ採るかの舉動に出る。是れ吾々の執意は動機に不偏なる證據である」と右に述べた通り自由意志論に付いては非常に多くの議論があるのであるが然し其の議論を煎じ詰めて見ると詰まり人は果して一定の行為をなすの外他の行為をなすの選擇的自由の能力がないものであるか或は又二箇以上の行為に付いて其の何れを爲すべきやの選擇的能力を有するものであるかと云ふ事に歸着して仕舞ふのである。是れに由つて之れを觀れば自由意志に關する問題の最も重要なものは前に表示した中で彼の自由論と精神的必然説との何れが眞理なるやにあるのである。其の他の議論はさほど必要ではないのである。由つて此の點に對して左に陳述することとせう。

第三節 諸種の必然説

余輩は先づ自由意志に反對する事實及び議論を簡單に列舉して見やう。

反對する事
實と議論
一、因果律
の普遍説

第一の論は因果律の普遍説である。此の説に由ると宇宙の森羅萬象は皆是れ因果律に従ふものである。翻つて考へるに吾々の執意なるものも畢竟是れ宇宙の現象に過ぎないものであるからして是れ亦因果律の外に獨立すべきものではない。而して因果律なるものは事件をして必ず然らざるを得ざらしむるものであるからして執意も亦必然であつて自由なものではないことは勿論である。

二、天然に於ける人類の從屬的地位を根據として自由論を破するもの

第二は天然に於ける人類の從屬的地位と云ふことを根據として自由論を破するものである。此の説は一般因果論の一つの適用で其の大意に曰く元來人類なるものは一箇依屬的の動物で其の行動は自分よりも勝れたところの勢力に由つて制限せられ決定せられるもので言はゞ服從的地位を有して居るものである。此思想をば大々的に明瞭になした處のものは天文学と進化論とである。天文学は宏大無邊の空間に於ける無限の勢力を感じ是等は皆人類に關係するもので人類の行動を制限するものであるこ

三、最強動機説を以て意志の自由を否定するもの

とを示し進化論は又無始無終の時間に於て進化的の事實あることを明瞭にし理想の實現は漸々の手續に由らなければならぬことを示した。又彼の神學も神なる思想を以て人間の自由を制限する。要するに人類は其の宇宙に於ける生存に於ても將た活動に於ても共に是等の制限を蒙るものであるからして到底自由なることは出來ない。なせならば自由と云ふことは元來無制限と言はれて居る。然るに宇宙は人類をして其の自然の法則に服従せしむるものであると云ふことを承認したならば宇宙は凡べての人類の要求を制限せねばならないのである。言ひ換へれば自由とは自然の法則に超絶して居ることを意味して居るからである。

第三は最強動機説を以て意志の自由を否定せんとするものである。換言すれば吾々の執意なるものは皆動機に由つて決定せられるものである。勿論動機の中には色々あるけれども中で最も強盛なものは他の動機を壓倒して自己の目的を遂行するものであることは恰も物理的の諸力の中に

於て最強なものゝ勝を制して其の結果を生ずるやうなものである。〔比喩的に言つたならば吾々の執意は天秤のやうなものである。一方の皿に十貫目の物を載せ一方の皿に九貫目の物を載せたなら天秤は十貫目の方に傾くであらう。是れと同じく吾々の執意は二箇の動機の中で其の力の強い方に傾くものである。〕従つて執意は必然なものであつて自由なものではない。

四、性格を
根據とする
必然論

〔第四は性格を根據とせる必然論で所謂性格とは吾々が動作するところの一定の法式或は個人の本性に於ける確固たる性質で其れは動作の源となると同時に其の動作に特色を興ふるところのものである。〕人は皆其の本性に従つて行動せざるを得ないもので其れ以外に出で、行動することは出来ないとするならば是れ取りも直さず人の自由意志と云ふものを否定するものである。〔人は凡べて其の性質に従つて行動するものである。故に若し爰に大酒家があるとすれば吾人は管に最強の動機のみならず彼れ

の心身の本質中に其の性質があると爲さねばならぬ。窃盜殺人其の他暴悪なる犯罪行爲も亦然りである。蓋し犯罪者は其の犯罪する當時にあつては自己の犯罪的行爲を禁制することが出来ない。なせなれば彼の性質は常に彼れをば其の犯罪の方向に逐ひ彼れの觀念と感情との權衡をば保つこと能はざらしむるからである。否管に是等犯罪的行爲のみならず饑渴、思考、記憶より反射、自動の諸活動に至るまで悉く人の本性に由來せぬものはなく従つて是等は一つとして自由なものはない。果して然らば只吾々の一部を構成して居るところの意志ばかりが除外例となることは出来ないのでないか？人の性格は其の人の思想感情に對して制限を興ふるが如く其の人の執意をも決定するものである。前に述べたやうに衝動は變化する世界に順應し本能は周圍の變化如何に拘らず唯其の有機的性質より或る種の行動を生ずるものである。されば少くとも本能の場合に於ては自由のないと云ふことは明かである。然るに此の本能たるや又是

れ其の活動主體の本性の發表するに過ぎない。是れに由つて見れば意志も亦人の本性に従つて決定せられるものであると云つても其の間に疑ひを挿むことは出来ない。人間の行動に一定の規律と確實とを與ふるところのものは此の人間の本性並びに所謂第二の天性と稱せられる習慣なるもの、制限である。

五、遺傳の影響を根據として必然論を唱へるもの

第五は遺傳の影響を根據として必然論を唱へるのである。遺傳の意志作用に關する議論は畢竟前に述べた性格の意志作用に關する議論の特例たるに過ぎない。人類は自然に或る一定の組織的能力及び傾向を附與せられたもので日常生活に於けるところの一切の行動は常に之れに由つて控束せられるものである。是れ所謂遺傳論者が基いて以て自由意志に反對する原則である。遺傳説に曰く吾人の祖先が其の性格をば經驗に由つて得たとしても其の子孫たる吾々は必ずしも祖先の如く經驗に由つて性格を作るものとは言へない。即ち今日の子孫には必ずや或る一定の種類

の行動を爲すべき傾向を遺傳するものである。素より此の傾向の勢力は或る時代に於ては不確實であつたこともあらうが時代を経るに従つて次第に本能的性質を具備するやうになるとは明かである。ところで本能は自由なるものではない。爰に人があつて生れながらにして飲酒窃盜其の他の犯罪をなすべき遺傳的傾向を有すとせよ。斯くの如き人は彼れが豫め向ふべく定められた行動以外の行動を感得し得べき性質を缺ぐものである。或は曰はん彼れは其の欲せし行動以外の行動を選択し得るものである。然しながら悲いかな彼れは其れ以外には強盛なる慾望を有せないのである。換言すれば彼れの意志は該行爲以外の行爲には助成せないのである。或は又曰はん若し人の品性にして善良ならんか其の邪惡なるものに比して自由であらうと。然も是れは一種の妄想に外ならない。蓋し遺傳と云ふものは善惡に論なく一方向に行動すべき生得的傾向である。此の事は彼の選擇の自由を制限するものである。即ち生得的性質なる

ものは最強動機を先決し之れに對する他の傾向の競争を不能ならしめるものである。吾々は右の理由に由つて特殊なる遺傳的傾向を有する人の稟賦其の物を批評するが其の行動は之れを批評せないのである。吾人は惡しき遺傳性を有する人の行爲に對しては之れを非難するよりも寧ろ之れを憐れむのである。要するに遺傳なるものは少くとも主體の自由意志を制限するか或は全く之れを奪ひ去るものと言はねばならぬ。

六、行動の豫知を根據とする必然論

第六は人の行動は豫知せられるものであると云ふことを根據として居る必然論である。夫れ物理的現象は其の性質を知悉するときは其れが次ぎに生ずるところの現象を豫知することが出来る。日月蝕の如き潮汐の干満の如き四季の交代の如き吾々の容易に豫知することの出来るものである。それは是等の現象は盡く自然律に由つて規定せられるもので自然律には意識もなければ又選擇作用なども許さないからである。人の執意も亦此の通りである。若し人の行動も斯くの如き規律性と豫知性を具備して

居るとしたならば是等も亦斯くの如き自然の法則に従ふものであると云ふことを知ることが出来やう。之れを實際の事實に徴するに自殺、私生兒、放火、殺人、其の他種々の罪惡の起るは何れも皆顯著なる規律性を示すものである。蓋し豫知することが出来るのは爲し得るところの道が只一つのみの場合に限るもので若し實際動作せるよりも他のことが爲し得る場合に於ては其の行動を豫知することの出来ないのは勿論である。是れは四つ辻に立つて居るものがどの方向に足を向けるか豫知することが出来ないやうなものである。故に行動の將來を豫知することが出来るとしたことは是れやがて意志は自由ではないと云ふことを證明するものと言つて宜からう。

第四節 自由論

右に述べた各種の必然論に對して自由論者の明細なる駁論があるのであるが今之れを略して自由論者の採つて以て積極的論據となすところのも

人は一般に平等一様でないから、對的に決定論者か自由論を主張することは困難である

のを述べて見やう。然し愛に一つの注意せねばならぬことがある。熟ら考へると必然論を唱へるものも自由論を唱へるものも特稱命題を全稱命題として用ひる嫌ひがある。蓋し從來の人は人間と云ふものは生れながらにして皆平等一様なものであると云ふ謬見を抱いて居つた。此見解は一部は近世の政治組織の歴史より來り、一部は耶蘇教徒の社會的組織より來り、又一部は自由及び責任と云ふ近世の學說から來たのである。然しながら能く世の中のことを觀察すると人間は體力に於ても智力に於ても將た氣質趣味に於ても殆んど全く同一であることを發見することは出來ないものである。されば或る種類の人類に適切なる結論なればとて之れを凡べての人類に應用せうとするのは決定論者も將た自由論者も共に慎まねばならないことである。然り、余輩は人類は凡べての點に於て差別的であると云ふのではない。唯自由と云ふことに關して一般に不平等であると云ふのに過ぎない。例へば虚弱者、狂者、濟度し難き罪人などは其の意志

自由論者の積極的論據

一、自由原因は必然原因よりも前に存して居る彼の因果律は結果の必然で原因の必然でない

が自由でないことと云ふことを假定しても自由論者に於て是等のものと通常人とは同一な性質を有して居ると云ふことを十分に證明するにあらざる限りは人は皆自由であると云ふことを明言することは出來ない。だから謹み深く言ふならば人は絶對的に自由であるとか或は必然であるとか云ふことは困難であらう。左に自由論者が採つて以て其の積極的論據となすところのものを列舉せう。

第一に自由意志論者は自由原因は必然原因よりも前に存して居るものであると云ふことを主張するのである。因果律は或る種類の必然を含蓄して居ると云ふことは眞理である。然しながら其の必然たるや結果の必然であつて原因の必然ではない。若し十分の原因があつたならば一定の結果は必ず生ぜねばならぬ。然しながら其の原因は必ず無ければならぬと云ふことはない。若し此の際原因の無ければならぬと云ふことを言ひ得るとしたならば其の原因を生じたところのものも又或る先行事件の結

果と見られるべき場合である。例へば金石が堅き物體面に落下するならば音響並びに或る種類の結果が必然的に生ずるであらう。是れは因果律の主張することが出来る範圍である。然しながら金石が堅き物體面に落下せるなるべしと云ふことの原因は必ずしも存せねばならぬと云ふことは出来ない。故に金石の落下の結果の必然は金石なるもの、落下の必然を證據立てることは出来ない。勿論此の場合に於ける結果の必然は原因を有することが出来るけれども其の落下が或る事件であることを知らねば其の原因を認めない。即ち必然と云ふのは原因の必然ではなく結果の必然である。是れに由つて之れを觀れば必然なるものは活動の絶對的形式を表はすものではなくして唯一一定の原因ある時は其れが生ずるところの結果を規定するに過ぎない。従つて實際上事件が存在する爲めには他の結果ならぬ原生的動力がなければならぬ。換言すれば必然の現象は必然ならぬ現象に隨伴して發現するものである。是れに由つて見れば因果

の法則は原因たる活動體を支配するところの普遍的法則ではなくして自由即ち自發的原因は或る現象の存在の制約として必然よりも前のものなることを知ることが出来る。夫れ一切の事件及び現象は必ず其の初めがなければならぬ。若し其の初めがなければ之れを現象と稱することが出来ないばかりではなく。其の原因など云ふことは出来ない。已に事件及び現象は必ず其の初めがあるものとしたならば其の原因は先行の原因なるか將た事件ならぬものなるか必ず二者其の一つでなければならぬ。若し原因は先行の事件であるとしたならば又其の先行事件の原因がなければならぬこととなつて所詮吾々は多數の現象の連鎖を考へるより外はなからう。そして其の連鎖は再び其の初めあるや否や即ち此の連鎖は有限なものであるか將た無限なものであるか何れか其の一でなければならぬ。若し有限なものであるとしたならば其の最初の事件は最早他の事件の爲めに生起せられないものであるか或は先行事件ならぬ或る物に

よつて生起せられたものでなければならぬ。前者の場合に於ては其の自由ならざることには勿論後者の場合に於ては其原因たるものは其の存在に於ても將た其の活動に於ても共に必然ではない。若し又事件の連鎖が無限のものであるとしたならば素より初があるべき道理がない。従つて其原因として或る先行事件があると云ふことは許すことが出来ない。唯事件ならぬ或る物に由つて制約せられるばかりである。抑も箇々の事件は有限である。有限の事件を以て無限の事件の連鎖を提醒すると云ふことは已に疑はしい點であるけれども一步譲つて之れを可能だとしても其の場合に於ては必ず無限の連鎖に先行の事件のあることを承認することが出来ないものであるからして其の連鎖の原因は事件でないこと云ふことを假定して居るのである。故に事件の連鎖は有限であると無限であるに論なく事件を以て其原因となすことの出来ないこと云ふことは一である。換言すれば原因たるものは夫れ自身又は他のもの、爲めに生起せ

られたのであつてはならない。自發的運動をなすもの即ち自由なるものでなければならぬ。若し又事件が他の先行事件に由つて生起せられないで連鎖をなさない場合には其の事件は必ず自發的運動をなし得るもの即ち自由なるものでなければならぬ。なせなれば此は連鎖の最初の事件と同一性質を帯ぶるものであるからである。故に何れの點より考へても事件又は現象の第一義は自由であつて因果律は唯其の第一義の後に生滅變化する事件を規定するに過ぎないことは明かである。上に述ぶるところの原因の自由は勿論自發的運動の自由を指すもので選擇の自由を説いたものではない。だから選擇の自由のあるや否やを目的として述べつゝある議論としては正鵠を失して居るやうであるが然も翻つて之れを考へると自由と云ふ概念に對して第一に有害なる障害として立つところのものは普遍的因果律の思想である。然るに今一方に於て機械的因果の關係は決して普遍的絶對的のものではなく遂には自發的運動

をなすところのもの即ち或る意味に於て自由なる活動體の存在を承認せねばならぬことを説き他方に於て先行事件としての因果律は原因の眞正なる意義でないことを明かにしたる以上は自由の概念に對する障害の大部分は除き去られたものと言はねばならぬ。

二、熱慮を以て意志の自由を證明せうとする

7 第二に自由論者は熱慮と云ふことを以て意志の自由を證明せうとする。蓋し熱慮と云ふことは一方に於ては彼の外部的刺戟に反對するもので又他の一方に於ては彼の不決定論者が自由の根底と認めるところの動機相互の間の平衡を暗示するものであるからである。若し執意が動機の結果だとすれば執意は直接に動機に従つて起らなければならぬ。然るに熱慮なるものがあつて諸々の動機の間作用するものとしたならば動機なるものは之れを指揮すべき先行的勢力即ち熱慮なるものがなければ執意を生ずべき原因的勢力となることが出来ないことは明かである。因つて吾々は先づ第一に熱慮と云ふことの意義を明かにせねばならない。倫理

一般的にいへば熱慮とは反省の作用であるが行爲に關して見るときは一時選擇又は執意を見合はす作用である

學上から言ふならば熱慮と云ふことは意志に提供せられたところの動作の二つのもの、内其の一つを選ぶところの反省の作用である。若し又之れを一般的に云つたならば熱慮と云ふことは意識内のものは其の何たるに論なく之れを反省するの作用即ち一時或るものに注意を凝集せしむるの作用を云ふのである。然るに之れを行爲に關して見るときは熱慮は一時選擇又は執意することを躊躇し心意が確定したところの経路を得たと決定するに至るまで其の活動を見合はすの作用である。爰に人があつて山中人なき露店に財囊の忘れてあることを發見したとせよ。彼れは假令之れを欲するの念が起つても其の事の不正な所業であることを思つて躊躇するであらう。然し又一方には傍らに全く人が居ないからして之れを窃取するも發覺することはないと思つて再び之れを取らうとする悪念の萌ざすこともあらうし此の萌した悪念は又再び他人のものを窃取するは大罪惡なりと云ふ感に抑制せられることもあらう。斯る場合は即ち一時

熟慮とは衝動又は輕卒な舉動を控制して心意全體の平衡を得しむる作用である
熟慮するところの執意は意志自身の所生である

或る行動を果すべきか否かを熟慮しつゝあるのである。又吾々は花見もよしポートも好し讀書も好し皆望ましきものであつたならば一時其の何れを取るかを躊躇するであらう。斯くの如きは皆意志なるものは多少行為の諸々の方向を提醒し得るもので愈決行するに至る迄は猶豫躊躇のあることを示すものである。是れ實に熟慮と云ふ作用の本性である。だから今熟慮と云ふことの意味を定義すると衝動又は輕卒なる舉動を控制して心意全體の平衡を得さす作用であると云ふことが出來やう。既に熟慮の如何なるものであるかを説いたなれば其の次ぎに之れを以て執意の自由を證據立てる論に移らねばならぬ。是れに付いては先づ第一に熟慮は自發の證據である所以換言すれば熟慮するところの執意は意志自身の所生で外界の諸事情に由つて構成せられたものではないことを辨明せねばならぬ。そは自發は自由の第一必要條件で若し吾々の意志は周圍の事情に由つて制御せられるものであると云ふことが眞理であるとき

物理的機械的の因果的連鎖の先行者と後果との聯絡は直接的である

には意志の自由のないことは勿論である。従つて議論の必要はない。されば若し人の行動は外界の事情に由つて一定せられるものとしたならば其の行動は直接に刺戟に従つて生せねばならない。即ち刺戟と執意との因果的連鎖は他の原因の爲めに制限を受けることを許さないのである。彼の物理的機械的の因果律を見よ。其の性質先行者と後果との聯絡は必ず直接的である。勿論因果律に由つて結合せられたところの連鎖の最初の環と最後の環との間には必ず多少の時間の存するものである。然しながら其れは只最初の環と最後の環とを見た場合を云ふもので其の間の手續を看過して居るのである。最後のものは其の直前の先行者に由つて生じ其の先行者は又直前の先行者に由つて生じかくして初めて最初のものに達するのである。だから一般に因果の連鎖なるものは精密に考ふれば必ず其先行者と後果との間に直接的聯絡あることを要するものである。然らば今外界の刺戟と後果との間にかゝる直接的關係が果して存在し

刺戟と執意との聯絡は直接ではない

て居るものであらうか？ 假りに執意は外界の影響に由つて必然的に構成せられるものであるとしたならば執意と外界の刺戟との聯絡は全く直接的であるか或は直接に聯絡せられた階級の連鎖でなければならぬ。第一に執意と刺戟との聯絡の直接の場合に於て研究して見やう。吾々が今或る鋭き物に由つて刺戟せられたときには必ず之れを免れやうとする舉動をなすであらう。此の際執意なるものが刺戟の機械的結果に過ぎないとしたならば刺戟のあるや否や響の聲に應ずるが如く活動は之れに従つて發生すべき筈である。然しながら實際はかかる場合にも多少の思慮をなし従つて其の刺戟は必ずしも豫期の結果の執意を惹起するものではない。此の刺戟と執意との物理的機械的聯絡を切斷するものは是れ刺戟以外の別種の作用で此の作用こそ實に執意の眞正の原因である。だから執意と刺戟との聯絡は決して直接的なるものではない。第二に後の場合即ち刺戟と執意とを連鎖中の一員として研究せう。論者の中には

先行者と後果との切斷を執意は外界事情の所生ではない

かく考へるものがあるであらう。即ち刺戟と執意との間に多少の時間のあるのは是れは思慮する時間ではなくして其間に介在して居る幾多の手續に要するところの時間である。然り吾々は刺戟からして先づ感覺知覺慾望などの順序を経て遂に執意を起すものである。然しながら機械的因果の關係に従つたならば是等の連鎖は前のものは直ぐ後のもの、原因で後のものは直前者の結果でなければならぬ。即ち二者の間の聯絡は必ず直接的でなければならぬ。然るに之れを事實に徴するときには感覺と執意との間に於てか或は慾望と執意との間に於てか何れかの場合に思慮即ち其の間の直接の聯絡を切斷するの作用をなすものがある。故に刺戟と執意との間に因果の連鎖があるとすも尚ほ執意は是等の連鎖以外或る別種のものに由つて惹起せられるものなることを承認せねばならぬ。之れを要するに執意と刺戟との關係は物理的機械的因果の關係を以て見ることは出来ない。換言すれば執意は外界の刺戟の所造であるとな

すことは出来ない。意志は外界の事情に由つて決定せられるものであると主張するところの客観的決定論者は次ぎの雙關論法の攻撃を脱することは出来ない。即ち若し彼れ論者が凡べての因果を以て純粹の機械的因果であるとなすならば彼れは執意と云ふ明白な事實を否定せねばならない。何とならば機械的因果は必ず直接的聯絡を要するものであるのに執意と云ふ事實は之れに反對して居るからである。之れに反して若し彼れ論者が執意と云ふ事實を承認したならば彼れは其の客観的決定論を棄却せねばならない。何とならば執意の事實を承認すると云ふことは原因と結果との聯絡が必ずしも直接的のものではなくて或る他の作用者が其の結果の眞の原因であることを承認するものであるからである。然るに思慮と云ふ事實は誠に明白なことで之れを否定せうと欲しても否定することが出来ないのである。故に彼等客観的決定論者は斷然其の客観的決定論を棄却せねばならない。是れ執意は外界の事情の所造ではなくして其

以上は客観的決定論に對する駁論で以下は主觀的決定論に對する駁論である

動機は執意の原因でなくして尙且つ執意ありとせば結果を生ずるものは主體其

れ自身の所生であると云ふ譯である。

前の議論は客観的決定論の駁論であるが主觀的決定論即ち動機或は性格が意志を決定するものであると云ふ説に對しての自由意志論者の駁論を次ぎに調べて見やう。委しく言へば主觀的決定論者は思慮と云ふ事實の存在すること及び客観的決定論の缺點を有して居ることは之れを許すけれども然も尙最強動機説を以て選擇的能力を否定するものである。主觀的決定論者は心意以内の動機が心意以内の意志を決定すると云ふのであるからして客観的決定論と同一に視ることは出来ない。此の主觀的決定論に對する自由論者の答辯を見るに其の要點左の如し。曰く動機は執意の原因であるか或は原因でないか二者必ず其一に居らねばならない。動機が執意の原因でないとしたならば殆んど議論をする必要はない。何とならば若し動機が執意の原因でないとし尙且つ執意が實際に起るものとしたならば結果を生せしむるところのものは主體を除いては他に存す

の物の力で
ある
動機が執意
であること
は思慮の存
在が許され
ぬ故思慮に
付いて臆説
を立てた

るものなく従つて自由意志に撞着することはないからである。之れに反して若し動機が執意の原因であるとしたならば前に刺戟と執意との関係の場合に述べたやうに動機は執意とも亦必ず直接的に聯絡を有せねばならない。若し直接的の聯絡をなすとしたならば其間に思慮てふ事實の存在することを許すことは出来ない。然るに思慮と云ふ事實は明白な事實として存在して居る、そこで此の事實は否定せんと欲して否定することが出来ないから彼等必然論者は二箇の臆説を以て此の思慮を説明する。第一は思慮と云ふのは均等であつて然も反對なる動機の争闘より生じたるところの平衡的精神状態であるとなす。第二は動機には一般の因果律に對して相異なる關係を有するところの種々の種類があるとする。然し此等の臆説は何の役にも立たない。若しも動機が種類を異にして因果律に對し特殊的關係を有するものとしたならば其の力の強弱と云ふ單純な事實に由つて執意の決定を説明することは出来ない。即ち最強の動機

が執意を決定すると云ふところの主觀的決定論は成立することが出来ない。次に第一の臆説の如く思慮と云ふことを均等で然も反對せる動機の間存する平衡であるとしたならば到底執意なるものは存在することが出来ないか或は存在するとするれば最強の動機が之れを決定すると云ふことが出来ないか何れかである。然り此の場合に於ては動機が執意の原因であると云ふことを假定することは勿論である。然も若し均等でないところの動機間に争闘があつて最強のものが覇權を握るものとしたならば其の作用は又直接的であつて思慮てふものが其の間に介在することを許すことが出来ない。然るに思慮てふものは事實として存在するのみならず思慮は又動機間の平衡した場合には起ることが出来ないところの執意をも生起するものであると云ふことは事實である。されば思慮は決して論者の云ふやうに動機間の平衡を云ふものではない。即ち執意は所謂強き動機の場合に起るものとなさねばならぬものとなる。若し又後者の

思慮の後に
最強動機が
細相を握る
とせば其の
力は思慮か
ら得たもの
即ち主體か
ら得たもの
である

場合としたならば再び平衡を生起して執意は其の何れの動機にも制御せられないで發現するか又は所謂最強の動機の豫期的結果を變化して生出するものなるか何れかでなければならぬ。而かして以上二者の何れの場合に於ても執意は動機以外の何等かのものに由つて影響せられることを示すもので主觀的決定論者は客觀的決定論者と同じく思慮と云ふ事實を承認して動機の機械的因果律を否定するか將た動機の機械的決定論を承認して思慮と云ふ事實を否定するか二者必ず其の一に居らねばならぬ。よしや思慮と云ふ事實の起つた後に最強動機が其の覇權を握るものとしても其れは何の役にも立たない。なせならば其の最強動機の有するところの力は唯其の事件の系列中に存するところの箇々の動機の力ではなくして畢竟其の動作者の熟慮選擇及び決定より得來るところの力であるからである。此の故に凡べての自由論は熟慮と云ふ事實からして證明することを得べきもので最早最強動機のことについて説明する必要はな

實に思慮は
動機を生ぜ
しめ其の強
弱を決定す
る

自由の感の
意識を論據
とする自由
論

い。何とならば若しも熟慮なるものが常に動機間に介在しをして動機夫れ自身が適當なる結果を生せしむることが出來ぬとすれば是れ動機なるものは畢竟結果を生せしむべき力のないもので結果を生せしむるところのものは反省するところの主體其の物でなければならぬからである。實に熟慮なるものは動機を生せしめ之れを思料し而して其の間に強弱の差があつたならば其の強弱を決定せしむるものである。之れに反して動機なるものは唯心意が附與するところのもの、以外に毫も勢力を有することはない。故によしや熟慮と云ふことを以て動機の争闘であるとしても其の争闘に最後の決定を與ふるところのものは即ち此の自由の選擇でなければならぬ。次ぎに自由論者は人々は自己に自由があると感ずるところの意識があること云ふ事實を論據として自由論を立てやうとして居る。そも自由の意識と云ふのは如何なるものであるか？是れは前に述べた自由の三意義の中

自由の意識は選擇的自由のみを意味す

此の意識は客觀的論據を有して居ない

で最後の選擇的自由をのみ意味するものである。又此の意識は人々が或ることをなすたびに必ず感ずると云ふのではない。唯選擇の際に當つて我れは何れを選ぶべきかと自問自答するときには如何なる場合に於ても何れを選ぶも我れの自由であるとの感あることである。自由論者は人間に此の意識がある以上は吾々の意志は自由でなければならぬと主張するのである。必然論者なるシジウキツク氏すら述べて曰うに今數箇の行爲に付いて明白なる意識を以て選擇せうとするときに當り吾人若し其の一つを以て有理で正常であると思惟しそして其の正行爲であると思惟するところのものを行ふに當つて唯適當な動機を缺ぐのみで他に何等の障害もなしとせんか假令不道理の行ひを爲さうとする傾向が強盛であつても又過去に於て常に此の傾向に従つたとしても吾々は尙ほ是等のものを措いて他の有理なるものに就くべく選擇し得るものと思惟し得ることは決して出來ない相談ではないと。然しながら正直に言つたならば此の自由

義務の感を論據とする自由論

の意識は全く主觀的の論據で客觀的論據を有して居ない。従つて之れを有するもののみ證據となるもので其れ以外には何等の効果もない。此の主觀的效果のみを有する自由の意識に對して客觀的根據を有するものは義務の感である。義務の感なるものは人の自然的に之れを行ふものではないけれども之れを行ふことを得るものであるとの主旨を含んで居る。若しも吾々の意志が常に正しいことをのみ行ふことを得るものであるならば斯くの如き義務の感の存在することを要せないのであらう。然しながら實際上吾々の意志は種々の誘惑を受けて正しい道から離れ去らうとする處の傾向があるからして之れを束縛して常規を離れさへないやうにする必要がある。是れ實に義務の感の任務である。若しも此の義務の感の命ずるところが到底吾人の力の及ばないものであるならば甚だしき不都合と言はなければならぬ。若し又意志は常に此の義務の感の命ずるところと一致して活動するのみのものであるならば此の義務の

感は全く無用の長物となり終るであらう。然るに事實は二者何れの場合にも一致するものでないことを示す。何とならば吾人の本性は豫想せる結果を成就せしめ得るところの能力を有して居るからである。且つや吾人の行動は自然的傾向と一致することは少く多くの場合に於ては是れと反對するものである。そして又吾々の心意的活動は之れを完成せしめやうとするものである。若し自然的傾向に反對せる行動は全く不可能のものであるならば義務の感は無用の長物である。故に義務の感の命令は人に不可能なることを命ずるのではなく又全く無用の長物でもない。論者或は義務の感の確實を否認し之れを以て一種の迷妄であるとなすであらうけれども吾々は義務の感の確實で勢力あることを認めるものである。因つて此の感を以て自由の存在の證據となす。即ち此の義務の感は一

般普通のものであるからして是れを以て客觀的の證據となすことが出来る。

シマウ井ツ
ク氏の所謂
自由意志の
論點

以上自由意志論の積極的論據として陳述した所の説は主としてヒスロツ
グ氏の説に依つたのであるが之れに對する余輩の所論を述ぶる前に有名
なるシジウキツク氏の自由意志問題の要點に付ての説を引用しやう。是
れは自由意志問題の要點を最も著明に表示して居るからである

シジウキツク氏曰く自由意志の論點たるべき疑問は下の如く述べること
が出来やう。第一、熟慮的執意の依りて以て生ずる所の自我なるものは嚴
密なる意味に於て必然的な道徳的の性質のものであるか？委しく之れ
を言は、其の一定せる性格は一部は遺傳により一部は過去の動作感情及
び無意識の間に外界より受けた所の影響即ち順應によつて形成せられた
所の性質のものであるか？即ち善に向ひ或は惡に向ふ所の有意的動作は
常に全く此の性格の必然的性質、其の境遇及び其の當時の外界の影響（身體
の状態等をも含む）の合成によつて惹起せられるものであるか？第二、
過去の動作、經驗の如何を問はず吾人は常に刻下有理で正しいと判斷し

た通りに動作しやうと選擇するものであるかどうか？然り以上の疑問を提出するに當つて余は唯物的假定を含む所の用語を避けた。何とならば近世の唯物論者は大概必然論者であるけれども然かも必然論者は必ずしも唯物論者でないからである。唯物論者は必ずや性格の語の代りに脳髓及び神経系統なる語を以てし爲めに或は一層明白な觀念を得ることもあらう。然しながら余は肉體と行爲者とを區別する所の常識的見解即ち自然的二元説を採用し殊更に性格などの語を用ひた。けれども目下の目的に對しては性格などの語と唯物的用語との差異を論ずるの必要はない。吾人の爰に必要とする所の争論の根本は執意は之れに先つ所の自己によつて左右せられるものであるか？換言すれば執意は性格及び境遇若くは脳髓及び外界の勢力の爲めに全然左右せられるものであるか如何？と云ふことである。

自由意志論の論點果してシジウキツク氏の説く所の如くであるならば前

に余輩が述べた所のヒスロップ氏の議論は未だ根本的に自由意志論を立證するものとは云ふことが出来ない様である。然りヒスロップ氏の説は自由意志論としては最も精細なもので其の上一步を進むることは最早困難の業であらう。此に於てか必然論は是非に起らざるを得ないのである而して必然論の根據は余輩が先きに列擧したるものの中に充分發見することが出来る。然り先きに列擧したるものに對しては自由意志論者の反駁があるのであるが然かも其の反駁は未だ充分な反駁とは云へない。余輩は徒らに前に述べた必然論を反覆することを好むものではないけれども余輩の意見を明かにする爲めに左に必然論の根據の確實なことを陳述しやう。

第五節 必然論

吾人の意志以外の凡ての事項は直接に之れに先き立つ所の事情と必然的關係を有するものであるとの信仰は多くの有力なる學者の異口同音に主

因果律の及ぶ所は次第に廣く確かなる

張する所である。而して人類の思想次第に發展し其の經驗が秩序的に廣
 濶豊富となり來るに従ひ此の信仰は益々明瞭となり其の應用も益廣大と
 なつた。之れに依つて種々の方面に於ける思想の衝突矛盾は愈減滅して
 今や此の因果の關係を許さない所のものは意志の秘密なる堅城のみとな
 つた。然り意志の堅城は例令金城鐵壁であつても今は四面楚歌孤城落日
 の状態にあるのである。實に意志以外の事に於ては因果必然の法則の行
 はれるものであるとの信仰の堅固なことは他に比すべきものが無いと云
 つても過言ではない。某論者の如きは因果律に反對することは到底吾人
 の思惟するを得ないことであると主張した程である。凡ての科學的推論
 は皆是れ因果的關係を豫想し科學の成效は着々之れを保證しつゝある。
 吾人は嘗に諸般の事項が因果必然的であることを認識すべき證據を發見
 するのみならず尙ほ種々の事項の必然性は例令其の形式に於ては各相異
 なる様でも其の根本に至つては何れも同一で且つ互に相待つものである

發展した動
 作と發展せ
 ない動作と
 の區別は明
 確でない

ことを證明する所の新發明は吾人の常に遭遇する所である。而して右の
 如く宇宙萬般の事項に於て其の本質上の一致を信仰することの深いのに
 従つて益々唯人類の行爲の上に於てのみ自由意志論者の主張する様な例
 外の存することを承認することは頗る困難であることを感せずには居ら
 れない。

今若し吾人々類の動作に付いて之れを見るに其の無意識的に生起する所
 の部分は外部的原因によつて結構せられるものであることは容易に之れ
 を觀察することが出来る。所で是れ等無意識的動作と有意識的動作との
 間に判然たる區域を劃することは頗る困難の所業である。嘗に多くの無
 意識的動作は其の無意識であると云ふ一點を除いた外は悉く意識的動作
 と相異ならないのみならず尙ほ又吾人の習慣的動作は最初の間は意識的
 動作に屬するけれども次第に無意識的に之れを行ふに至り後に至つては
 全く或は少くとも其の一部は自ら之れを意識せないで行ふことを得るに

衝動的動作
は必然的で
ある

他人の行爲
を説明する
には因果的
關係を以て
する

至るのである。尙一步を進めて之れを研究するに吾人は意識的執意によりて生起せられた所の何等の動作でも或る事情の下に於ては必ず無意識的に之れを生起することを得るに至るものだと結論して差支ない様である。尙百尺竿頭一步を進めて親しく吾人の意識的動作を観察するに吾人が所謂衝動的行動の如きは咄嗟の感覺又は情緒の刺激によつて思はず爲す所の動作で吾人は之れを以て其の刺戟力と兼ねて一定せる吾人の氣質及び其の當時の性格によつて全く決定せられたものでないと云ふことは到底出來ないであらう。而して是れ等衝動的の動作と自由選擇の意識的の判然たる動作との間に區別を盡くことの困難であることは恰も無意識的の動作と意識的の動作とを區別することの困難なるに異なることはない。又吾人は自己以外の人の有意的動作を説明するに當つては必ず其の性格及び境遇事情と其の動作との間に因果的關係を附するのが常である。是れ吾人の日常經驗する所で若し此の推測を爲さなかつたならば吾々は修

身處世上多くの困難を感じるであらう。蓋し吾人々類の社會的生活は一顧一両常に他人の動作に關して幾多の綿密な豫想を含むものである。吾人は一般人類或は某階級の人類或は個人の經驗上より他人を観察して彼等は必然的の性質を有するもので其の結果も亦豫料することが出来るものとして居る。だから吾人は一般に知人の過去の動作より其の將來の動作を推論し若し其の豫想が縦し誤ることがあつても此の誤謬を以て其の人の自由意志の影響に歸することは少ないので却て吾人が其の人の性格及び動機を知ることの未熟であつたことに原因するとなすのが常である。彼の人があんなことを仕出かさうとは吾々の夢想することも出來なかつたことであると云ふ様な場合に於ても其の甚だしく自己の豫想の誤つて居たことは彼れの平素外形に表はれる所の舉動の外隱密に何れにか其の夢想せなかつた様な行動を爲す可き種子の籠つて居たのであらうと思ふのを常とする様である。即ち其の人を知ることの甚だ皮相であつたこ

公衆に對する判断も因果律を以てする

と或は少なかつたことを感じるのが普通である。彼れが然る行動をなすに至つた原因は彼れの性格の何れにか其の影を隠して居たのによるものであると云ふのは吾々の常に實驗する所である。社會公衆に對しての場合も亦之れと同じく吾人は今日の所謂社會學なるものを信仰すると否とに拘らず社會現象に因果的理法の行はれるものであることは人々の承認する所である。吾人は社會學の特殊の議論に關しては異見を懐くことがあるけれども因果的理法の假定の精確なことに付いては疑ひを容れない。若し之れに付いて疑ひを容れたならば恐らくは社會學經濟學等の如き人間の慾望に關係する所の學問は成立することが出來ないであらう。否例令成立することがあるとしても其は今日吾人の見る所のものとは甚だしく相異なつた形式に於てであらう。されば吾人は過去の歴史或は現在の社會的事情に於て十分な説明を下すことが出來ない事件を發見することはあらうとも決して之れを以て特殊的方向に走

吾人自身の動作に關しても因果的關係を以てする

つた自由意志の所業だとは爲さないであらう。然かのみならず吾々は吾々自身の動作に關しても常に因果的理法を以て之れを説明しやうとするものである。吾々は時として自己を自由と感じ而して現下の動機と境遇とには束縛せられないし又過去の事件の結果によつても抑制せられないで自己の執意的選擇をなし得るものであると感じることがなきにしもあらずだが後日に至つて其の連鎖せる過去の動作を回顧一番したならば其の中には動かす可からざる因果的關係の存在することを認め又吾人の生活中間々之れと類似せる場合の存することを見而して吾人が自己の性質教育及び境遇事情の結果として之れを説明することは蓋し自然の事であらう。然かのみならず吾人は吾人の將來の動作に關しても同一の思想を適用するのが常である。實に此の事たるや吾人の道徳的情操が發達するに従つて益々其の然るを見るものである。蓋し義務の思想が進步するに従ひ一般に修徳の義務を感じることも進歩し又

自己を改善しやうとする所の志望も増進するものであるけれども若し現在の執意によつて或る度までは將來の動作を決定し得るものであると云ふ假定がなかつたならば吾人は自己の修徳を成就することは出来ないのである。然しながら吾人は一方に於ては又習慣上吾人の將來に關して前の假定と正反對な自由の見解を探ることのあるのは明瞭な事實である。例へば吾人は過去に於て服従し來つた誘惑に對し將來は充分之れに抵抗することが出來ると確信するなどは其の一例である。然しながら此信仰は多くは幻想謬見たるに過ぎない。是れ諸派の倫理學者の承認する所である。自由意志論者は吾人の過去に得た所の傾向及び習慣に抵抗して之れと反對なる動作をなすことは如何なる時にあつても吾人の爲し得べきことである。論辯するけれども吾人が不知不識習慣の羈絆を蒙るものであることは止むを得ないことで全然此の羈絆を脱却することの豫想外に困難なことを説くに至つては自由論者も必然論者と異なる所はない。

ポールゼン氏の因果必然に付ての説

尙ほ余輩をしてポールゼン氏の説を引用せしめよ。氏曰く新科學の地盤の上に成長する近世哲學は素より此の問題を解釋せないので放棄した。自然の統一と劃一 (The unity and uniformity of nature) とを有することは近世の根本的思想の一で其が第十七世紀の碩學によつて稱導せられてから其の勢力の盛んなことは何物も之れに抵抗することが出來ない。精神的過程を解釋するにも亦益々此思想に依つた。ホッブスは精神的過程其の物を以て運動だとなした。されば形而上學的方面より見て意志の自由なること能はざることには尙ほ無より運動若くは物質を生ずる事の出來ない様なのである。之れに反して心理學上の意義に於ては意志の自由なことは辯を待たないで明かである。氏は此の説を簡單に叙述して曰く行爲の執意あり之れを自由と云ふ。然れども執意の執意あることなし。以て此の問題の斷案とするに足る。孤立せる現實の原素あることを許さない所の哲學組織を有するスピノーザは心を以て精神的自動機 (Spiritual automation)

となした。ライブニッツ故にウオルフは數學的必然性と物理的必然性とを區別し依て以て宿命論だとの非難を免れやうと努めたけれども徒勞に屬した。カント及びシヨッペンハウエルは睿智的[○]自由[○] (Intelligible freedom) を稱導したけれども經驗的世界即ち凡べての人類が實在世界と稱する世界は因果の法則によつて支配せられるものとなした。物理的世界に於ける事件と同じく精神的世界に於ける事件も亦必然的で吾人の精神に固有な所の自然の法則によつて支配せられる。其偶然的なもの、如く見ゆるのは唯其の極めて複雑な爲めである。物理的世界に於ても亦氣象的經過若くは生理學的經過の如く吾人の計算し豫知することの出来ない多くの經過がある。精神的經過程其れ自身は必然で一切の觀察點より一時に洞察し得る完全なる智性即ち神の如きものを指すならん)には人間の行爲の明瞭なことは尙ほ日月星辰の運動の一定不變な様なものであらう。現今の生理學者は一切の精神的過程は因果律によつて規定せられるものである。

必然論の根

るとの假定を以て其の根本的思想となして居るからして精神的過程は腦髓及び神経系統に於ける生理的過程に隨伴せる所の現象に過ぎないとなすのである。然るに生理的過程は素より物理的過程の一種であるから因果の法則によつて支配せられるものであることは勿論である。故に之れに隨伴する所の精神的現象も亦因果の法則によつて支配せられねばならぬ。全く同一の性質構造を有する有機體が若し全く同一の刺激を受けたときには全く同様に反動するものであるとの命題が穩當であるならば全く同一の性質を有し全然同一の性癖心氣經驗及び觀念を有する所の精神が若し全く同一の刺激を受けたときには全然同様に反動するものであるとの命題も亦穩當でなければならぬ。而して之と同じ様に身體的性質の遺傳が因果律によつて支配せられるものならば精神的資質も亦之れによつて支配せられねばならない。

ポールゼン氏の所説はシジュキツグ氏の避けた所の唯物的見解を露骨的

據は動かす
可からず

に自由意志論に適用した。此の事に付いては余輩多少の異論なき能はず
 であるけれども必然論の根據の確實なことは吾人の經驗的事實に徴して
 實に疑ふことの出来ないものである。實際何人でも人間の意志の一定の
 性質を有するもので従つて一定の事情の下に於て一定の刺戟を受ける以
 上は今回は其の任意の行動を營み次回は他の任意の行動を營むものであ
 ると信ずることは困難であらう。爰に吾人は何人も否定することの出来
 ない所の事實を舉示することを得るのである。想へ、人間若くは人間の意
 志は如何にして此の世界に現はれて来たか？吾人の見る所では人間の生
 活は其の始めを時間中に有して居る。始めを時間中に有して居る人間の生
 活は其の始めに於て何等の原因も無かつたであらうか？若くは其の原
 因は自己の選擇せるものであらうか？何人も異口同音に其の然からざる
 を答へるであらう。人間は他の獸類と同じく、香草木とも同じく皆其の父
 母の生む所である。其の身體なり其精神なりは父母に似其身體的性質と

我々は父母

の所生であ
る

共に氣質、慾望及び感性的、智力的能力を遺傳する。然かのみならず吾人は
 其の所屬國民の身體的及び精神的習慣も稟有する。男女の別れるわけは
 未だ其の原因を知ることが出来ないけれども何人も我れは男に生れやう、
 我れは女に生れやうとの自由意志によつて其の男女たることを決定した
 のだと信ずるものはなからう。其の他賢愚、強弱など苟も吾人の心身に關
 する一切の事情は一として其の初めに遡つて考へたならば自己の意志に
 よつて決定したものはない。是れに由つて之れを觀れば人間が自然の法
 則の支配を脱却することの出来ないことは火を賭るよりも明かである。
 而して這般の資性は周圍の事情の影響を蒙つて其の回轉し易い方面に回
 轉するのである。其の周圍の事情には自然的なものもあるが人間的なもの
 が殊に多い。小兒は其の家族によつて教育せられ、其の國民の性格、社交の
 形式を採り、國民の言語を以て言語となし、國民の概念、判斷を以て其の概念
 判斷とし、國民の理想を以て其の理想とするのである。即ち其の國民の風

我人は廣意
の教育によ
つて人と爲
る

俗習慣によつて陶冶せられ、學校に於て教育せられ、宗教的薰陶を受け、漸く長ずると益々多く社會的感化を受け、終生是れ等の廣意の教育的羈絆を脱することは出来ない。此の如くなれば吾人が自ら選擇決定するの餘地は果して幾許あるだらうか？其の家系によつて吾人は生れながらにして某階級に屬し一般に終生之れを去ることは出来ない。社會の彼れに蒙らす所の影響は行住坐臥休止するときはない。社會は或は言語を以て或は行為舉動を以て我々に何物が善惡で何物が禮不禮で何物が適不適であるかを示す。其長ずるに當つては社會は彼れに一定の職分を命令若くは要求する。何人と雖も其の時代の指圖を受けないものはない。建築家の建築する所のものは其の欲する所のものではなくして時代の欲する所のものである。美術家の製作する所の物すら皆是れ時代の要求する所のものを脱却することは出来ない。況んや衣服飲食等の嗜好に於てをやだ、フロッコートの流行して袴羽織の次第に廢れつゝあるのも是れ時代の要求では

ないか？ヒサシ髪に結はねば時代後れの様に云はれ、袴を穿かねば女學生視されない云ふのも當世の要求ではないか？東京言葉の漸く勢力を得て方言の無勢力とならうとしつゝあるのも是れ亦時代の欲する所ではないか？之と同じく學者も亦自ら科學的問題を選ぶのではなくして實は其の時代が之れを選ぶのである。第十四世紀に於ては實體及屬性の抽象的研究が行はれ、第十六世紀に於てはヴァイルギリウスを模倣せる羅旬語の所作が行はれ、第十八世紀に於ては主として數學的物理學的事と若くは迷信攻撃論が行はれ、前世紀に於ては湮滅せる希臘の文豪の歴史的若くは有史以前の遺物の研究が行はれた。之を我國に考へて見ても同じである。徳川時代に於ては士君子のみならず、一般人民は孔孟の教へを以て千古不滅の眞理となし之れによつて其の行為舉動を規正したのだが明治に至つて歐米の物質的文明によつて甚だしき打撃を受け昔時のオーソリティーは殆ど地に委してしまはうとして居る。其の他斯くの如き事例は枚舉に遑

あらずである。然り天才は時代に先立ち時代を先導するものであることは事實だ。然しながら其の天才を生ずる所のものは亦時代、社會、國家であることを忘れてはならぬ。天才の云爲する所のものは是れ實に社會の云爲せんと欲して云爲することが出来ないで暫く之れを天才の云爲に借るのである。斯くの如く各個人の自然の發展、生活上の位置及び職分は國民時代、兩親、教育者、周圍の境遇、事情並びに社會によつて規定せられるもの、すれば個人は個人の産物ではなくして全く社會の産物である。個人の社會に於ける關係は猶ほ細胞の有機體に於ける關係の様なものである。細胞は有機體を離れて自己の意志によつて其の形態と機能とを規定することはない。之れと同じく個人は國家の一員として世界に現はれ此の世界に於て活動する。此を以て其の生活は其の國民の生活と共に人類の歴史⁷的社會中に埋没し遂に普遍的世界過程中に歸着するのである。之れを要するに我々には心理的選擇の自由のあることは疑ふことの出來

思慮の事實は單に心理的選擇の自由を立證するのみ

ないものであるが然し此の自由は決して絶對的のものではなく一歩進んで考へると結局必然論となるのである。前に述べた通りヒスロップ氏などは思慮の事實を根據として頻りに自由意志を主張するが然かし是れは僅かに人間は心理的選擇の自由のあることを立證し得るに止まるものである。思ひ見よ、成程我々には思慮と云ふ事實はあるが然し我々が思慮する形式竝に材料は共に我々自身の自由意志によつて作つたものではなからう。我々の思慮の形式は我々の祖先から受けたものであるのみならず必ず人種的國民的の着色を帯びて居る。また我々の思慮の材料は我々生後の境遇事情即ち廣意の教育によつて得たもので此の境遇事情は決して我々自身の自由意志によつて作つたものではない。既に思慮の形式も亦其の材料も共に我々自身の自由意志によつて作つたものでないとしたならば……即ち必然的の存在としたならば例令我々に思慮の事實があるとしても扱本逆源的に考へると意志も他の一切の事物と全く必然的のもの

たふことは蓋し疑はんと欲して疑ふことの出来ないものであらう。此他ヒスロップ氏の擧げた自由の感とか義務の念とか云ふものは何れも唯我に心理的選択の自由のあることを證するのみで絶對的自由のあることの證據とならない。否、心理的選択の自由の證據としても思慮の事實よりは價值が少いのである。

第六章 決心の模型 (TYPES OF DECISION)

決心の五個の重なる模型

第一理性的模型即ち思慮の熟した後に決するもの

我々が實際或る事を決心する有様は千差萬別の様ではあるが然し其の中自ら一定の模型とも云ふ可きものがあるのでセームス氏は決心の模型 (Type) 中最も重なるものは凡そ左の五個だとした。
第一の模型は理性的模型と云ふのである。此は一定の行動に關する所の理由が殆んど自ら感せない程徐々に現はれた爲めに遂に意識界の平衡が其の中の或る候補者の方に傾いて本人は何等の努力を爲すの必要もなく此の候補者を採用することの出来る場合である。此の種決心の模型に於

ては理性平衡が充分とならない間は本人は決心の理由の不十分な事を冷靜的に感じ、而して此の感は行動をして未決の状態に止らしめるのである。然し此くする中に何時しか思考は熟した此上は猶豫しても別段に名案が出やうとも思はれないから最早之を決定するのが善からうと感ずる。此の如く疑惑状態からして容易に確信状態に移轉する場合には吾人は全く受動的に事の成り行きに従ふ様に感せられるもので即ち決定の理由は全く事物の性質上より來たかの如くに感せられて吾人自身の意志の上には殆んど無關係なる様に見えるのである。換言すれば其の決定は自然の道理である様に感ずるのである。とは云へ、此の如き場合に於ては我々は何等の強迫の感をも經驗せないからして充分に自由の感がある。此の如き場合に於ける決心の理由は概して之れを云は、目下の場合は從來一定不變なる方途によつて別に躊躇することなく行動し來つた場合中に數へられるものに過ぎないと言ふ事の發見である。通常思慮と稱せられる場

合の大多數は右の發見に關するものに外ならない。則ち目下疑問となつて居る所の行動を實行すべきや否やに關する、あらゆる可能的の場合を心中に於て歴問する事より成立するもので斯く歴問する間に、若し吾人が自我の一定部分を形成する所の行動原理の應用と認められる概念に遭遇する時には、即ち疑惑状態は直に雲散霧消するに至るものである。則ち一見新奇の出來事の様に思つて思慮せる間に不圖其の事は何にも新奇なことではなくして從來採り來つた或種の概念中に算入す可きものであることを發見する時には直ちに意志は決定するのである。日々多くの決定をなす所の確信のある人は自己の行動を惹起すべき實行的思想の系統をば豫め一定して居つて常に個々の行動をば成る可く此の系統中に歸着じやうと欲するものである。此の如き人をば通常主義の人と云ふのである。然るに彼等若し曾て前例のない爲に何等の模範的格律をも應用することの出來ない場合に遭遇すると、則ち彼等は大に物足らぬ感を發し煩悶亦煩悶俄

主義の人

かに決心することが出來ない。然しながら若し此の煩悶して居る中に、彼等の熟知せる實行的思想系統中に、目下の問題を決定すべき原理の存して居ることを發見する時には、即ち彼等は再び安易を感ずるに至るものである。故に行動に於ても、又推理に於けるが如く、其の重要な事は正當なる概念を搜索する事である。然り行動の場合に於ては其の概念は單に思惟的でなくして實行的の者でなければならぬ。換言すれば其概念は情意的要素の豊富なものでなければならぬ。具體的雙關論(Concrete dilemmas)は其れに對する一定の處分法を具へて現はれるものではないから吾人は之れに對して種々雜多の概念を持ち出すことが出來る。而して所謂智者と愚者との分かれる點は此の特殊なる場合の要求に最も能く適合する所の概念を發見し得ると然らざるの點にあるのである。故に理性的性格とは確實有用なる種々の目的を貯へて居て事件の起る毎に其が此等目的の中の何れに適合するや否やを冷靜に確めた上で始めて其の行動を敢て

第二模型即ち外部の偶然的出来事によつて決心を生ずるもの

する所の人に外ならない。次に示す所の決心の二個の模型に於ては行動實現に對する最後の命令が證據の未だ充分に明かでない中に早く已に發せられる場合である。吾人は千々に心の岐れた時に當つて其の何れの道に行動しやうとするにも何等の不變的證權も何等の確定的理由も發見せられない場合の多くあるものである。即ち何れの道も同様に善いからして吾人は其の一を取つて他を捨てることの判決をなし得ない事が多くあるものである。此の如き場合に際すると吾人は自ら猶豫躊躇の餘りに長くいて心中の不安に倦厭し遂に假令決定は運悪く不利益の性質のもので尙決定せないには優ると感ずるに至る事のあるもので此く吾人が倦厭し居る中に圖らずも或る偶然的事件の加入し來つた爲めに、心的權衡は候補者中の或る一方に傾き以て吾人をして此の方向に向つて決心せしめるやうになる。明日は日曜だから遠足を爲さうか、端艇競争を試みやうか、將た庭球の練習を爲さうかと心

第三模型即ち内部の偶然的出来事によつて決心するもの

千々に岐れて決しかねた學生が今朝の快晴に刺戟されて遠足に決心すると云ふ様な場合は此の一例である。然りかゝる場合に於て若しも偶然的事件が反對の方向に出でたならば(即ち前の例なれば曇天であつたならば)吾人は其の結果は全く反對の決定に出づべきものであることを心に許すのである。此の如き第二模型の場合に於て、吾人の主として感ずる所は吾人は何れの方向にも決する自由があるのみならず、何れの方向に決しても充分に正當だと確信しつゝ、然かも無頓着な態度を以て外來某種の偶然的事件によつて規定せられた方向に漂流する事である。第三模型の場合に於ても、第二の場合と同く行動の規定者は偶然的出来事であるが然し其の出来事は外部から來ないで内部から來るのである。此の場合に於ても前の第二模型の場合と同く嚴格なる命令的原理がないから本人の心意は首鼠兩端の間に躊躇逡巡しつゝあるにも拘はらず、行動は恰も神経の自發的解發によつて惹起されたかの如く、已に二者中の或る一

方に向て自動的に現出しつゝある事が屢々あるのである。右の如く本人が未決定の爲めに大に憂鬱を感じつゝある際に生じた所の右の如き運動感覺は其の性質上大に衝動性のもので、本人は其の運動する儘に引き行かれるものである。即ちエ、面倒臭い、遣る可し、天は墜つとも遣るべし等の聲は本人の心内を衝いて響くものである。此の如き行動は有意的運動の主人公が自動的に行動を發すと言ふよりも、寧ろ或る外部的勢力の作用を受動的に觀覽しつゝある様に感せられる程不意に爆發する所の勢力に由る決定の模型であると云つて宜しい。此の種の決心の模型は強い情緒的、輕浮的、不定的性格の人には屢々之れを見るが遲鈍冷血な人には多く見ない所のものである。夫の世界の耳目を聳動さす様な行動をなす所の人例へばジンギスカン、項羽、豊公、ナポレオン、ルーテル、日蓮等の如き、剛強屈するを知らない所の情緒と爆發的で制することの出来ない所の活動との結合より成つて居る人物が若しも何等かの機因によつて其の情緒の自由

第四模型即ち性格の卒然たる變化より決定を生ずるもの

に發動することが出来なくて狐疑躊躇する際などには屢々右の様な破裂的種類の決定の現はれるものである。即ちかゝる人物に於ては其の血は全く不意に堰を破つて突き出るのである。されば彼等に於て破裂的種類の決定の屢々現はれるのは是れ全く彼等の心意が其の宿命的氣質(Fatalis-ty mood)として、此の如く決定せねばならぬ様に組織されて居るのに因るものと見てよい。且つ此の宿命的氣質其の物が已に一定の方向に向て解發し始めた所の勢力の力度をば援助するものであるのだ。

第四模型も亦第三模型に似て卒然として熟考の終結を告げる所のものである。即ち此の模型の決定は或る外界事物の經驗又は或る未知的内部變化の結果として、本人は卒然、輕易無頓着な氣質からして眞率熱心な氣質又は或る他の氣質に變移する時に生ずるものである。此の如き場合に於ては恰も觀察者の立脚地の變化によつて其の觀察の變化する様に本人の動機並に衝動の價值が前と全體に變化を生ずるのである。吾人の動機中で

最も真面目なものは悲哀と恐怖の對象である。此の對象が吾人を刺戟する時には、凡ての剽軽なる觀念は其の勢力を失ひ、嚴肅なる觀念のみが其の勢力を數倍するに至るものである。然る時は其の結果として、吾人が其の時まで玩弄しつゝあつた所の浮き草の根のない様な輕浮な空想をば全く放棄し去つて先きに雲煙過眼視した所の悽愴眞面目な思想に注意する様になる。彼の「心機一轉」と云つたり、或は「良心の覺醒」と稱せられる様な状態即ち吾人をして從來と全く別人の如くならしめる所の状態は、皆此の事項中に屬するものである。故に此の場合にあつては、熟考は性格の卒然たる變化によつて決定状態に至るものである。

第五の模型に於ては、決定を與ふるに足る所の證據の充分な事、理由の完全な事の感の存在する事もあれば或は存在せない事もある。然し、何れにしても其の決定をなすの際に當て本人は其れ自身の故意的行動によつて其の均勢を傾ける様に感するのである。是實に第五模型の特色である。則

第五模型即ち努力によつて決定に至るもの

ち充分な理由の存在する場合にあつては、意志は其れ自身のみ孤立しては行動を解發するに足るだけの力を有せない所の論理的理由をして、行動を解發するを得しむるだけの援助的努力を添加する事を感じ、又充分の理由の存在せない場合にあつては行動を解發すべき理由のない代りに他の或る物の創造的貢獻がある様に感せられるのである。斯かる場合に於て、吾人の直感する所の緩徐で且つ沈靜な意志の脹起 (Heave of the will) は此等の事例をして前の四模型と相異ならしめる所の點である。所謂意志の脹起と云ふのは純正哲學上何事を意味するか？此の努力の感なるものが吾人の意志力をして單なる動機と相異ならしめる所の理由如何？此等は自由意志問題に屬するもので茲に論ず可き事柄ではない。然しながら之を主觀的に又現象的に觀察する時は、前の四種類の決定には存在せない所の努力の感 (The Feeling of effort) なるものが第五種の事例には伴生するのである。而して此の努力は時としては苛酷なる純粹的義務の爲に、世間的歡樂の

凡てを犠牲に供するが如き慘憺悲痛なる克己として作用することもあれば。時としては何れも善良で其の何れを選択して可なるやに付いて、何等客観的の命令原理も存せない所の葛藤的二個の行動概念中、強て其の一をして現實的ならしめ、他の一をして永久に實現さ、ない様な沈靜陰鬱なる決心たることもある。何は兎もあれ此の如き決定は寂寞たる道德的荒野の門戸とも言ふべき、苛酷辛辣な行動に違ひない。世に意志の人とか、剛毅の人物とか稱する人は此種の模型に富んだ人である。尙ほ精密に觀察すると此の第五の模型をして前の四模型と相異ならしめる重要な點は、前の四模型の場合にあつては吾人の心意が勝利を得たる候補者の方に決定するの瞬間に於て、他の反對の候補者は多少吾人の注意圏外に遁逸し去るものであるが、第五の場合にあつては採否兩方の候補者は依然頑強に吾人の注意圏内に存立し、選擇者は其の中の一を殺戮するの瞬間に於て、彼自身をも毀傷しつゝあるの感を経験する事である。即ち選擇者は自ら自身の肉中

衝動力の多い事と少い

に針を刺しつゝある事を感じるのである。袈裟御前は素より夫の身に代り死なんものと雄々しくも決心しながら今端の際に至る迄愛子爲若の事さては老たる母の事などが強勢なる力を以て其の注意圏内に嚴立して居たから文覺の刃にかゝつて三寸息絶ゆるに至る迄獻身的行動を勵まして愛着慈悲に變心せない様にと努力することを要したであらう。斯く行動に伴生する所の内部努力の感は、第五模型に一種特別なる心的現象の如き觀を與へ之れをして他の模型より分明に相異ならしめるのである。

第七章 意志の健康と不健康

種々の心的對象の衝動力相互の間には、所謂意志の健康 (Healthiness of will) と云ふものを特表すべき所の一定の尋常的比例がある。此比例は只特別の時又は特別の人を除くの外は、通常人の衝動性對象間に存在するものである。心意状態中で通常強烈なる衝動力を具へて居るものは情慾、肉慾、情緒或は何等かの理由によつて吾人が其れに従つて習慣的に反應運動する様

健康意志の
具ふ可き條
件は努力の
強いこと、
思慮あるこ
とである

に馴致された事などである。彼の凡て遠隔的思考甚だしく抽象的なる概
念、習慣に合はない理由及本能の發達に無關係な動機等は更に衝動力を具
へない。よし之を具へても其は大に微弱なものである。故に若し此等の
心狀が行動を惹起することがあつても是れ全く努力によつて然るを得た
もので其れ自身の力によるものではない。故に病的場合は之れを別とし
通常の場合にあつては努力なるものは常に行動を本能的に惹起すべき力
のない動機をして爾他の動機を排擠して行動を惹起さす援助として現出
するものである。此の努力が強ければ強い程其の人の意志は強健だと稱
せられる。然しながら意志の健康など云はれる爲めには此の外に尙命令
の發表に先き立つて多少思慮すると云ふことが無ければならぬ。即ち各
の刺戟が其れ自身の衝動を喚起すると同時に、尙他の觀念竝に其の特殊の
衝動を惹起し、然る後此等相關係せる凡ての力の協同的結果として緩慢に
失せず急速に過ぎないで行動の隨生することがなければならぬ。假令決

意志の不健
康

勿卒意志
強情意志

定が稍々急激になされるとして、兎に角通常意志の健康ならんが爲に要
する所の事は、命令の現出以前に於て能く智識の明に依つて其の進行路を
檢覽して其の孰れを取るのが最も善いかと云ふことを豫測する事である。
而して健康な意志にあつては此の豫測は正當で、換言すれば動機相互の
比例は全體上通常で、而して行動は此の豫測に従つて生ぜねばならぬ。要
するに健康の意志と云はれるものは努力の強さと決心に先きだつて適當
に思慮分別することのあるものである。
右の記述よりして吾人は意志の不健康なものは種々な事情より生ずるも
のであることを推知することが出来る。世人中には一定の刺戟の現はれ
るや否や之れを制限する所のものを喚起する暇なく、卒然と行動の隨生す
るものがある。之れを勿卒意志 (Precipitate will) と稱する。又假令連合者を
喚起しても其の制止力と衝動力との間に存せねばならぬ比例に異狀があ
る時は之れを稱して強情意志 (Reverse will) と云ふのである。之をして此の強

情意志の起る原因にも多々ある。即ち刺戟力度の強きに過ぎ又は弱きに過ぎる事もあれば、或は其の情性の強きに過ぎ、又は弱きに過ぎる事もある。然しなから凡て強情意志の外部的徴候を通覧概括する時は、大體之を二種に分類することが出来る。則ち一は通常的行動の不能なもの、一は異常的行動を制止することの出来ないものである。吾人は前者を稱して閉塞的意志と言ひ、後者を稱して爆發的意志と言ふ。

右の如き意志の行動は、常に現に存在する所の閉塞力と爆發力との間に存する比例に歸着するものであるから、只單なる外部的徴候によつて、意志の強情の如何なる原因に歸着するものであるかを知ることが出来ない。即ち二勢力中其の何れの力度の増加又は何れの力度の減少によつて生じたかを辨知する事は困難である。元來意志は閉塞力の除去によつても、又衝動力の増加によつても、同様に爆發的たることの出来るもので、又慾望の銷

(一)爆發的意志
(二)禁制力の缺乏より生ずるもの

沈によつても又は之れを達する途中に横はつて居る妨害によつても同様に閉塞的たることの出来るものである。クラウストン博士の言に御者は力は無いのであるが馬の温馴なために能く之れを制取することの出来る事もあれば、馬の餘りに慄駢なために如何なる御者も之を止める事の出来ない事もある。好比喻ではないか。

爆發的意志の生ずべき條件は禁制の缺乏と衝動の過大とである。

(二)禁制の缺乏より生ずる爆發的意志。世には衝動が運動を惹起することが甚だ迅速で、禁制作用が現出するだけの餘裕を與へない所の性格を有して居る者がある。例へば全身活氣を以て充滿せる所の冒險家の如き、或は心中に或る種の事柄の浮ぶや否や突如として之を言談に表はす所の性急家の如きは、即ち此種に屬するものである。此の種のものには彼の「スラボニツク」人種及び「セルチツク」人種に於て普通に見る所で、之を冷血深慮なる英人的性格などと對比する時は、吾人は其の間に大なるコンツラストの存す

閉塞的の
爆發的の
は全體とし
て何れが多
くの活力を
具するかは
分らない

ることを見るであらう。後者より前者を見る時は、當さに猿猴類を見る様
であらうし、前者より後者を見るときは當さに爬蟲類を見る様であらう。
然しながら此の閉塞的意志と爆發的意志との二者中で、其の孰れが全體と
して多くの活力を有して居るかを判決することは困難である。善良なる
知覺才能を具へた所の爆發的性質の以太利人は閉塞的性質の米國人が他
人の目に着かない様に内部に韜晦して居る能力のみに依つてすら充分に
世人の耳目を聳動するに足るだけの行動をなし得るであらう。即ち彼は
彼の交際仲間中の牛耳を執り、謠を唄ひ談話をなし、仲間を指揮し、洒落を發
し、處女に媚び、敵者に抵抗し、必要あるに臨んでは已に失はれた希望、企圖を
挽回し、恰も傍觀者をして彼の一小指の上には、他の正當な思慮家の全身の
活力にも優つて居る活力が存在して居るかと思はすのである。然しながら
ら焉んぞ知らん思慮家とても常に彼の輕舉家と同様なる、或は反つて之れ
より以上の性能を具へて居るが、只禁制力の強大な爲に鎮靜なものである

ことをだ。されば一旦其の禁制力が除去されんか彼等と同様に、否、彼等よ
りも一層猛烈に爆發すべき状態に至り得るものである。爆發的、性格の人
をして容易く其の運動的勢力を解發さすのは實に彼に狐疑の念が無いか
らである。臆測が無いからである。煩鎖なる思慮が無いからである。各
瞬間に於ける心的觀察點の單純なからである。必ずしも其の感情意志の
か度の強いからではない。心意の發達するに従つて、意識は次第に複雑と
なり、之れと同時に各種の衝動に對する禁制も多くなつて行く。正當嚴肅
なる教育を受けたものは其の發言は常に眞理に従はねばならぬと感ずる
からして、其の自然の結果として大に議論の束縛を得るのである。然り此
の禁制作用の多くなつて行く事には善惡の兩方面がある。若し其の衝動
が全體上迅速であると同時に良く調整して居り、其の勇氣は行動の結果を
擔當するに足り、其の才知は此の衝動を善良な結果に導くに足るものであ
つたならば則ち徒らに空想中に徘徊呻吟するよりも、些少の刺戟によつて

軍人的革命
家的性質

卒然爆發するのは善い。古來軍人として又革命家として成效したものの、多數は概ね此の單純で機智に富んで居る衝動的模型に屬するものである。彼の反省的禁制的心意の人は問題に對してより多くの困難を感ずるものでかゝる性格の人は衝動的性質の人よりも廣大深奥なる問題を解釋し彼等の蹈むべき多くの過失を免れることが出来る。然しながら若し衝動的性質の人で過失に陥る事なく、假令之れに陥つても能く之れを挽回する才智と能力とを具へて居つたならば、則ち彼等は最も世人に歡迎せられ、最も世界に必要な所の人物模型だと云つて宜しい。

小兒や虚態状態にある者竝に特殊の病的状態にある者は此の禁制力が弱くて、爲めに各種の衝動力の解發を禁制することが出来ない。斯かる状態にあるものは平常は比較的閉塞的模型の人でも多少爆發的氣質の人と變化する。又ヒステリ病、癲癇病、佛國學者の所謂變質(Degeneres)と云ふ神經質に屬する罪人などにあつては、其の心的機制は先天的に薄弱なるもので、一

習慣の爲め
に(イ)的
なるもの
もある

定の衝動が起ると之れを禁制するもの、未だ現出する暇のない中に早く已に行動を解發するものである。又意志の天性的に健康な人にあつても、習慣の悪いために此の如き状態に至る事がある。其は特に或る種の特殊的衝動に於て然るを見るのである。例へば飲酒家に向て、なせ屢飲酒慾に耽るのであるかと問ふたならば彼等は大概明白に其の理由を答へることが出来ないであらう。此の如きものは醫學社界に所謂眩暈と稱する様な生理的作用と同様のものと見てよい。即ち彼等の神經組織は、徳利や酒盃などを見る事又は酒の話を聞くことなどによつて、病的に解發する様な状態になつて居るものと思つて宜しい。彼等は必ずしも酒に向つて渴するのでもなく、又必ずしも其の味を甘しとするのでもない。且つ醒後に於ける後悔、苦痛をも充分に豫知して居る。然しながら如何にせん彼等は酒に付いて思惟し、又は之れを見るや否や、知らず識らず酒を飲むべく用意をなし、而して自ら之れを禁制することが出来ない。飲酒家の答へ得る所は恐

らく之れより以上に出づることばないであらう。之れと同様で、別段に現實的に猛烈な感情又は慾望があると云ふこともなく、只一時の些細な提醒又は單なる空想の刺戟する所となつて断念することの出来ない戀慕又は姪慾放恣に耽るものもある。此の如き性格のものは其の意志の單に薄弱なものたるに過ぎないから嚴密な意味に於ては之れを惡と稱することの出来ない程のものである。此の如き人にあつては、其の自然的衝動の徑路の脆弱なために僅に常度を超へたに過ぎない興奮によつて直に筋肉の解發を生ずるのである。是れ即ち病理學上で刺戟性衰弱 (Irritable weakness) と稱する所の者に外ならない。斯かる人物にあつては其の神經組織中に興奮が生ずると所謂潜伏期と稱すべき状態にあることが甚だ短いから緊張なるものが組織中に蓄積せられる機會なく、興奮あるに従つて直ちに其の勢力を消耗するのである。其の結果如何なる感激又は活動に於ても、其れによつて生ずべき現實的感情の分量は甚だ僅少に過ぎない。彼の「ヒステ

(口)過大的衝動より生ずるもの

飲酒狂者の

外的性質の如きは此の如き不安定なる權衡状態の最純粹なものである。即ち此の如き者にあつては、或る瞬間に於ては、或る種類の行爲に對して徹頭徹尾嫌厭の情を生ずるかと思ふ内、忽ちにして之れを好む様になり、所謂眼もなき迄に之れに沈醉するに至るものである。(二)過大的衝動より生ずる爆發的意志。然るに世には又神經組織が其れ相當の内部的調子を有し、禁制力も尋常或は異常に強きにも拘はらず、亂雜で衝動的な行動を生ずる者がある。此の如き者にあつては衝動的觀念の力が異常に亢進し、通常の人に對しては只單に經過的想起として現はれるに過ぎない所のものが當人にあつては行動を惹起すべき強迫力として現はれるのである。發狂者の行動には此の如く病的に猛烈なる強迫的觀念より發するものが實に多い。彼等は其心中に於ては大に煩悶して之れに抵抗するにも拘らず、遂に強迫的觀念によつて征服せられるのである。飲酒狂者に於ける飲酒慾又は之れに類似せる患者に於ける阿片又はクロ

例

ロホルムに對する欲求の強勢なことは到底通常人の想像だも出来ない所である。爰に室隅に一個の酒樽があるとせよ假令此の樽と余との間に大砲が爆發しつゝあつても酒を得る爲めならば余は此の大砲の前を通過することを辭せない。一方には酒瓶があるし他の一方には千仞の斷崖があるとせよ、そして假令一杯の酒を飲むや否や、忽ち斷崖中に突き墜されるとも、余は之れが爲めに避易せない、とは飲酒狂者の口にした所である。シンシナツチ州のマツセー博士は曰はく、數年前、一人の暴飲家があつて此の州の酒屋に入つて來た。彼は如何なる方法によつてか酒を得たい者だと考へつゝ、空しく數日を経た後、遂に一計を案じ出した。彼は材木置場に至り、一方の手を材木の上に置き、他の手に斧を振上げて之を切斷した。乃ち彼は切株となつた手を舉げて號泣しつゝ、家に入り「ラム(酒の名)を持つて來いラムを持つて來い、我手は切斷された」と叫んだ。時に周章混雜にまされ、ラムを持つて來るものがあつたので、彼は直に出血する手をラム中に挿

此の種の固定觀念は些些たることに關するともある

入した。此に於て彼は大盃を舉げて自由に飲み終り、欣然として『最早満足した』と言つた。又タールナー博士は嘗て酒中毒の治療を受ける爲めに來院しながら、四週間の間病理的標品を浸した瓶中の「アルコール」を窃に盜飲した人があつたからして之に向てなせ此の如き厭ふ可き行動を敢てしたかと問ふたら、彼は之に答へて『余の此の病的嗜慾を禁制することの出来ないのは恰も心臟の悸動を禁制することの出来ない様なものだ』と答へた。此等は随分皆甚だしい例であるが西洋人中にて之れに類する例は少ないのである。我日本人は比較的に酒の嗜慾が弱いから此の如き極端なものゝは容易に得られないであらう。

此の固定觀念は屢々些々たることに過ぎないのに患者は之れが爲めに其の生涯を煩悶の中に費す事がある。例へば實際手が汚れて居ないのに汚れて居る様に感じて、之れを洗はずには居れない様に強迫されるものがある。然り、患者は自ら能く其の手の汚れて居ないことを知つて居るけれど

も、只其の觀念の強迫を避ける爲に之れを洗ふのである。然るに手を洗つてしまふと、直に亦再び不潔の感を生じ、憫れにも彼は終日手洗場に立ち暮らすに至るのである。又例へば衣服の着方が不整だとの思想が現はれると、患者は此の思想の強迫を免れやうとする爲に衣服を脱いで之れを着直し、着直しては亦之れを脱ぎの二三時間を浪費する事がある。多數の人特に神経質の人は多少此の疾病の傾向を有して居るものである。例へば多數の人は其の已に寢床に就いた後に不圖したことより、或は表戸に錠を下すことを忘れやしないか、或は室内の瓦斯を放出することを忘れやしないかとの觀念を強迫的に感じた事があるであらう。而して此く感じた場合には、別段之れを忘れたと思はないでも、只單に此の疑念を避けて安心しやうとて態々起きて見廻はる事がある。

次に閉塞的意志は之れを前に述べた禁制作用の不充分な者や、又は衝動の過大な者と對比する時は大に相異なるもので、其は衝動の不充分なことか

(二)閉塞的意志

ら、又は禁制の過大なことからして生ずるものである。我々の心意は一時其の凝集力を失つて一定の事物に専心注意することが出来ない状態に陥る事がある。此の如き場合に於ては、人は何物を見るときも、只漫然として空しく凝視するものである。勿論此の如き場合に於ても意識の對象は依然として存在するには相違ないが、其は只單に存在するのみで、未だ吾人の注意を喚起するだけの有效的状態に達しないのである。然り、通常の場合に於ても意識對象中の或るものは、常に此の如き無効存在の状態にあるものである。然し通常の場合には對象中の何かに注意が依るものである。然るに疲労と虚憊との場合に於ては、對象全體が此の如き状態にあるのである。瘋癲病院に於て、精神病の徴候として認められる所の意志缺乏なるものは、即ち之れに類似する所の一種の無感覺状態に外ならないのである。前にも云つた通り意志が健康である爲めには、豫測の正常な事竝に此の豫測の先導に従つて行動の發生する事を要するのである。

道德的悲劇

智者と愚者
善人と悪人
とは外見上
大差あるが
彼等の有す
る可能的概
念には左程
の差別はな
い

然るに右の如き病的状態にあつては、其の豫測は必ずしも異常でなく又其の才智も必ずしも不明でないものであるのに、只注意が缺乏して居る爲めに、其の行動が豫測した通りに發現せないのである。西諺に「善事を見て、其の善たるを自證いながら、其の行動や悪」(Vides meliora robo que, deteriora sequor)とは、此の如き心状態を文學的に表出したのである。人間生活の道德的悲劇(Moral tragedy)は殆ど全く真理と行動との間に通常存すべき連鎖の破壊並に一定觀念に對して有效現實の刺戟的感の添はない事から起るのである。素より人には智愚善惡の差別はあるが、其の單なる感情並に概念より言つたならば必ずしも大なる徑庭があるのではない。智者と愚者と將た善人と悪人とは其の外觀的狀態には大きな差別があるけれども、彼等の有する可能的概念並に觀念に至つては左程に差別のあるものではない。永く善惡兩岐の葛藤中に生活し會て其有理の命令によつて其れ自身の自家撞着的性質を矯正することの出來ない墮落者、激情家、荒飲家、陰謀家、無頼漢等

悪人の惡を
爲す心中の
模様

が具へて居る情操、竝に高等な生活道と下等な生活道との差別に付いて、彼等の感ずる所は、其れが只單に情操又は感としては甚だ立派なもので、何人でも之よりも更に立派なものを有することは出來ないであらう。否、寧ろ何人も彼等の如く智慧樹の果實を食して居ない。故に若し單に道德上の智識の點から言つたならば、世人が從順だ、質朴だ、天真だと云つて愛顧する所の農夫などは、彼等に比べると尙ほ乳兒の様なものである。然しながら、憫れにも、彼等の道德的智識は辯明しつゝ、評釋しつゝ、抗論しつゝ、希望しつゝ、半途まで決定しつゝ、大に心意の裏面に於て喧嘩咆哮をなすけれども、其は只空しく喧嘩咆哮するのみで、更に決心する事なく、更に公然と聲を大にして議する事なく、更に假設の状態を脱して命令の態度に入ることなく、更に勇氣を鼓して斷然誘惑を衝破する事なく、更に蹶然探配を振つて立つ事がないのである。故に、彼等の如き性格にあつては、只下等な動機のみが衝動的效力を有して居る様に見るのである。喩へて云へば、下等な動機は

努力は原始力の感あり

通路權を具へた列車の様に自家専用の線路を疾走し去るが上等な理想的動機は例令存在しても只空しく下等動機の通行すべき線路の傍に存在するのみで自身はレールの上に載る事がない。直行列車は自分も乗つて行かうと絶叫する路傍人の爲めに暫しも止らない。之れと等しく行動は下等な動機によつて着々進行し理想的動機は生涯何等の活動もない無氣力の傍觀者として終るのである。而して斯く理想としては善良な動機を有しながら其の實際的行動は反つて不良な動機より發することの自覺によつて生ずる所の内部的虚偽の意識は人間の享有する悲哀的感情中で其の最も悲哀的なものである。

前陳する所によつて推知さるゝ如く努力の發現は吾人の意志作用を複雑にするものである。即ち只稀有で理想的な動機をして本能的習慣的衝動に對抗さうとする時又は猛烈な爆發的傾向を禁制しやうとする時又は強烈な閉塞的事情に打ち勝たうとする時には常に努力が發現して意志作

努力は最大抵抗の邊に進むの感がある

用を複雑にするのである。然り實際上各人は此の努力の必要の度に差異がある。彼の貴族名門平和の家に生れて事として意の如くならないことはない人即ち天の恩恵を一身に集めて生れ來つた所の運命の寵兒は其の生活中此の努力を要する事が少いであらう。之れに反してナポレオンや武田信玄の如き英雄や朱元璋新井白石の如き神經家は努力し自ら鞭撻するの必要が多であつたであらう。今此の如き事情に於ける努力に付いて之れを内省すると其は本來は衝動力の多くない慾望をして行動を惹起さす様に之れに力を添加する所の活動力である様に感せられるのである。

外界の力が一定の物體上加はる場合に該物體の運動する方向は最小抵抗の方又は最大牽引の方である。然るに努力に就いての吾人の平常の言説は右と反對して居る事は實に奇怪に堪へない事である。勿論吾人が最初より努力によつて生ずる所の行動の方向も最小抵抗の方に向ふものだと定義すれば其れまで、此の物理學的法則は心意の範圍にも行はれる

と言つて可からう。然しながら努力を要する意志活動に於て其の行動を惹起する所のものが稀有で理想的のものなる場合には、其の行動の方向は反て大なる抵抗のある方にあつて下等な素朴的衝動の方向は吾人の之れに従ふことを辭するにも拘はらず其は之れを實行しやうとすれば甚だ平易坦々たるものだと感ぜられるのである。例へば外科の荒療治を受ける時に苦痛を忍び又義務の爲に利益を棄て社會の非難を冒すが如き人は、其の瞬間に於ては自己は最大抵抗の方に向つて行動しつゝあるが如くに感ずるものであることは何人も疑はないであらう。彼は衝動を征服し誘惑に抵抗すると云ふのである。然るに懶惰者、荒飲家、臆病者は其の行動に付いて右の如く感ずることはない。彼れ等は勢力に抵抗し沈着を制止し勇氣を征服するなどは言はない。今假りに行動の源泉をば大別して偏向(Propensity)と理想とする時は、只道徳家のみは偏向を征服したと云ふけれども肉慾家は決して理想を征服して斯かる結果を生じたとは云はない。

彼等肉慾家は多く理想を忘却した。義務に盲目だと云ふ様な無活力の語を用ひる。此等は全く理想的衝動其れ自身は勢力又は努力の補助がなくては存立競争に打ち勝つことの出来ないものであること、竝に最強な牽引力は偏向の方にあるものである事を意味するものと云つてよい。故に理想的衝動が行動を惹起する爲めには多くは人爲的援助を要する。努力は即ち此の援助である。但し品性が高等になつた人即ち君子人は所謂心の欲する所に従ふて矩を超わずと云ふ風に別段に努力を感ずることなしに理想的衝動に従ふことが出来るのである。

第八章 個人的性格 (THE INDIVIDUAL CHARACTER)

性格、氣質、個性及人格の四者は親密不離の關係を有して居るもので苟も四者の中一者に付て充分の説明を爲さうとすれば勢他の三者に關係を及ぼさざるを得ないのである。されば本章に於ける余輩の目的は主として性格の記述にあるが之れを述べる前に先づ人格と云ふことから筆を起すの

人格の意義

人格には自
識あるを要
す

が便宜である。
人格 (Personality) と云ふ語を廣義に解する時は人と云ふ程の意味に過ぎない。法律や道徳に於ては狂者たると赤兒たると將た野蠻人たるとを問はず苟も人間なる以上は皆な人格のあるものとし之れを物體視し或は動物視することを許さない。換言すれば之れを目的とすることは許すが手段として取扱ふことは許さぬ。是れ人間には如何なるものにも人格があつて神聖なる人位を有するものと見るからである。然しながら人格なるものを嚴密な意義に解する時は自我と云ふものによつて統一された意識即ち自識 (或は自覺即ち Self consciousness) のあるものでなければ未だ人格があるとは云へないのである。換言すれば遺傳と經驗とによりて合成せられた所の統一の意識を有し自由意志を有して道徳的責任を負ひ得る所の資格を有するものでなければならぬ。此の意味よりすれば彼の白痴の如き將た

個性と人格

個性の要素

氣質と性格

嬰兒の如きは未だ人格を有せないものと爲さねばならぬ。人格は其を構成する自我統一の形式及内容如何によつて種々の差別を生じる、かゝる人格上の差異を稱して個性 (Individuality) と云ふのである。されば個性とは人々の個人的差異上より名けられた人格に外ならない。個性は人格の差別觀で人格は個性の平等觀である。然らば次に起る問題は人々の差別を生ずる所の個性なるものは如何にして生起すると云ふのであるか? 個性の成立には二要素がある。先天的要素と後天的要素と。或は之れを遺傳と經驗と稱してもよい。其の所謂先天的要素即ち遺傳とは吾人が祖先より稟け得て生れながらに之れを有するもの。其の所謂後天的要素即ち經驗とは吾人が生後、教育、教化、風俗習慣、制度、其の他種々の境遇事情より得た所のもの。而して此の個性の先天的要素を指して氣質 (Temperament) と稱し後天的要素を指して性格 (Character) と云ふのである。夫れ同じ土地に蒔かれても種子の性質が本來相異なる

時は自然と相異なつた果實を結ぶ様に同じ後天的經驗に遭遇するとして
も人々の先天的氣質が相異なる以上は自然と相異なつた個性を生じるの
は明白なことである。之と同理で同じ種子も其れが蒔かれる土地の相異
なるに随ひ自然と相異なつた果實を結ぶ様に同じ先天的氣質のものも其
れが生後受ける所の經驗の差異よりして各相異つた個性を生ずるであら
う。されば氣質と性格とは離る可からざる關係を有して居る。

氣質とは身
體的稟賦よ
り生ずる根
本的な精神
状態

氣質は畢竟吾人が先天的に有する生理的狀態即ち有機的系統の組織、神經
系統の組織如何によつて起るものである。換言すれば身體的稟賦が基礎
となつて生ずる所の根本的精神状態である。ヘフディング氏云く古來心理
學は吾人の精神作用に特色を與へる所の感情本來の傾向を重要視した。
吾人の才幹及性格が氣質によりて規定せられるものであることは恰かも
感情が認識と意志との中心の位置を占有して居る様なものである。而し
て吾人の氣質なるものは吾人有機體の組織によつて規定せられる所の生

氣質は吾人
の經驗の結
果に大影響
を生ず

活感情に現はれるもので此れは外界の經驗より離れて吾人の心意を支配
する所の根本的氣分である。而して此は實に吾人の實在的自我 (Real self)
の最も大切な成分を成せるもので個人の感情を左右すること多大であ
る。加之氣質は個人に賦與せられたる根據となつては吾人の外界種々の
經驗を感受する有様を規定するものであるから其人が外界に反動する有
様も亦之れによつて定まるものである。ヘフディング氏の言の如く氣質
は實に吾人の感情の根據で之れを左右するのみならず吾人の智識及意志
にも影響を及すことの甚大なるものである。見よ、宇宙の森羅萬象が各人
に與へる所の刺戟は若し之れを純客觀的に見たならば常に甚だしい差異
のあるものでないが是れが各個人に與へる所の影響を觀察すると實に感
情の側面に於てのみならず智識の側面に於ても將た意志の方面に於ても
人により時により種々の差異がある。是れは抑も如何なる理由に基くか
と云ふに素より人々の後天的經驗の差異も與て力あるもの、主として各